

平成 30 年度厚生労働省
老人保健事業推進費等補助金
(老人保健健康増進等事業分)

介護サービス事業における社会参加活動の
適切な実施と効果の検証に関する調査研究事業
報告書

平成 31 (2019) 年 3 月

一般社団法人 人とまちづくり研究所

目次

第1章 事業の概要	1
1 事業の背景・目的	1
2 事業のながれ.....	2
3 実施体制.....	2
第2章 多様な介護サービス事業所における取組みの実態調査と展開方法の整理(調査1) .4	
1 目的	4
2 調査の対象と方法	4
3 調査内容.....	6
4 結果と考察	24
第3章 介護サービス事業所の職員のための研修プロトタイプ作成 (調査2).....	26
1 目的	26
2 調査の対象と方法	26
3 調査内容.....	29
4 結果と考察	45
第4章 多様な介護サービス事業所における社会参加活動の利用者にとっての効果を含む	
社会的価値の評価モデルの構築及び検証 (調査3).....	48
1 目的	48
2 調査の対象と方法	48
3 調査内容.....	50
4 結果と考察	58
第5章 得られた示唆と課題	60
資料編 :	63
調査2	63
調査3	73
手引き	119

第1章 事業の概要

1 事業の背景・目的

1) 事業の背景

2015年に策定された新オレンジプランでは、柱の1つに「若年性認知症施策の強化」が掲げられ、その対策として、「居場所づくり、就労・社会参加支援等の様々な分野にわたる支援を総合的に講じていく」方向性が示された。また、同年の介護報酬改定では、訪問・通所リハビリテーション(以下、リハ)の利用者の社会参加促進を図ることを目的に、社会参加支援加算が新設された。さらに、平成30年度介護報酬改定に関する審議報告では、今後の課題として「地域共生社会の実現の観点から、共生型サービスを含む介護サービス事業所が、利用者が社会に参加・貢献する取組みを後押しするための方策について、運営基準やその評価の在り方等を含め、引き続き検討していくべきである」とされている。

このように、利用者の自立と尊厳を支える支援の一環として、介護サービス事業所における、事業所内外での社会参加活動の取組み促進への期待が高まっているが、その実態や実現のためのプロセス・具体的な展開方法、阻害要因は明らかにされておらず、取組みの評価に関する考え方も整理されていない状況にある。

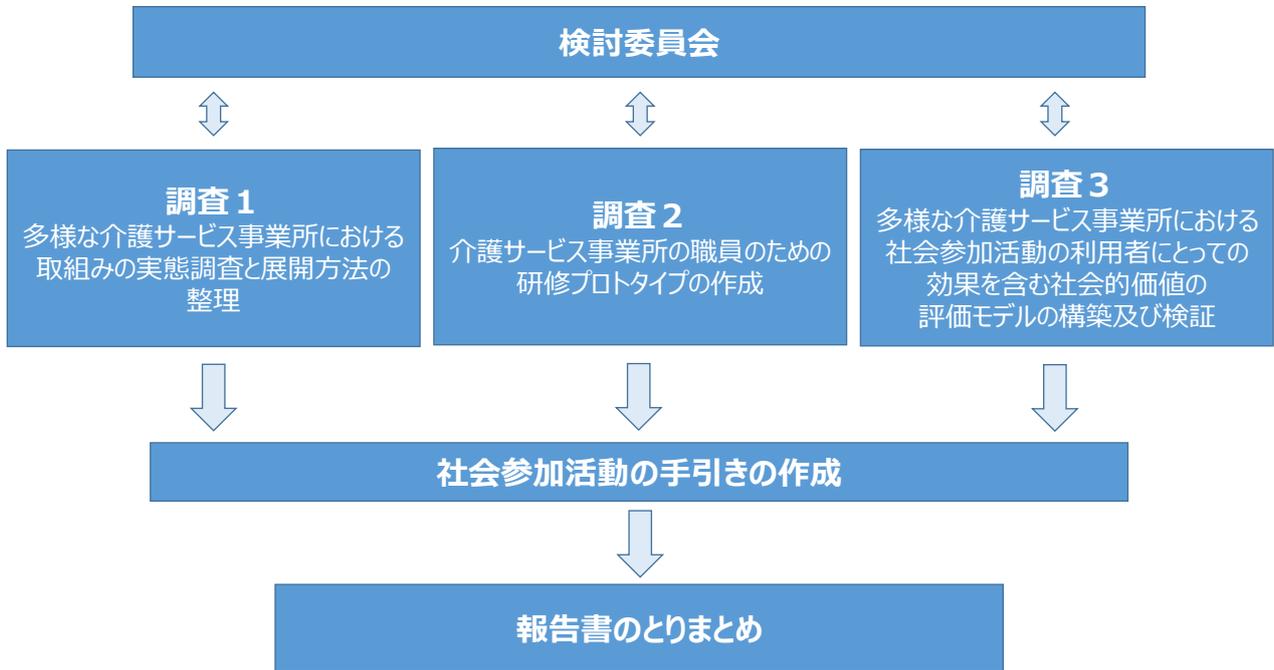
2) 事業の目的

本事業は、認知症のある人を中心に、広く介護サービス利用者の特性や能力を活かした就労を含む社会参加活動、活躍の場づくりを介護サービス事業所が推進できる環境整備を目的として、

- (1) 多様な介護サービス事業所における取組みの実態調査と展開方法の整理
- (2) 介護サービス事業所の職員のための研修プロトタイプを作成
- (3) 取組みの利用者にとっての効果を含む社会的価値の評価モデルの構築及び検証
- (4) 介護サービス利用者の社会参加活動の手引きの作成 を行う。

2 事業のながれ

本事業のながれは下図のとおりである。



3 実施体制

本事業の実施に際し、事業全体の方向性、各調査の実施方法及び内容、さらに報告書及び手引きの作成等についての議論及び助言を得ることを目的に検討委員会を設置した。

1) 検討委員会

	氏名	所属
委員長	川越 雅弘	埼玉県立大学 研究開発センター 教授
委員	赤野 政治	岡山市保健福祉局 高齢福祉部長
	岡野 英樹	全国デイ・ケア協会 理事
	黒岩 尚文	全国小規模多機能型居宅介護支援事業者連絡会 副代表
	下河原 忠道	サービス付き高齢者向け住宅協会 理事
	野村 晋	岡山市保健福祉局 局次長(保健福祉部長兼務)
	馬袋 秀男	「民間事業者の質を高める」全国介護事業者協議会 顧問
	三浦 晃	日本作業療法士協会 地域包括ケアシステム推進委員会 委員長
	山田 尋志	介護人材キャリア開発機構 理事長

(敬称略、50音順)

<オブザーバー>

厚生労働省 老健局 振興課

厚生労働省 老健局 認知症施策推進室

<実施主体>

(調査1) 徳田 雄人 株式会社 スマートエイジング NPO 法人 認知症フレンドシップクラブ

(調査2及び事務局支援) 河合 綾香 埼玉県立大学

(調査2) 河野 禎之 筑波大学ダイバーシティ・アクセスシビリティ・キャリアセンター助教

(調査2) 猿渡 進平 白川病院 医療連携室 室長

(調査3) 鴨崎 貴泰 NPO 法人 日本ファンドレイジング協会

(調査3) 川合 朋音 NPO 法人 日本ファンドレイジング協会

2) 検討委員会の開催時期及び議題

以下のとおり、検討委員会を3回開催した。

回	日時・場所	議題
第1回	2018年8月9日(木) 17:00~19:00 医療介護福祉政策研究 フォーラム 会議室	調査趣旨・実施方法の確認 等 ・本事業の概要 ・調査対象事業所等の概要・進め方 ・本事業における評価モデルの位置づけ ・本事業で開発する研修プロトタイプに必要な要素の抽出
第2回	2018年12月25日(火) 13:00~15:00 医療介護福祉政策研究 フォーラム 会議室	中間報告 等 ・各調査の進捗状況確認 ・調査結果の考察 ・手引き、報告書の構成について
第3回	2019年3月15日(金) 10:00~12:00 医療介護福祉政策研究 フォーラム 会議室	報告書等の内容の確認、その他 ・報告書の内容と考察 ・手引きの内容と考察

第2章 多様な介護サービス事業所における取組みの実態調査と展開方法の整理（調査1）

1 目的

利用者の自立と尊厳を支える支援の一環として、介護サービス事業所における事業所内外での社会参加活動の取組み促進への期待が高まっているが、その実態や実現のためのプロセス・具体的な展開方法、阻害要因などは十分に明らかとなっていない。調査1の目的は、全国にある様々な介護サービス事業所における社会参加活動の現状を把握し、どのように取組みが開始、展開しているのか、また今後取組みがより広がっていくための課題や阻害要因などに明らかにすることである。

2 調査の対象と方法

1) 調査の対象

文献調査および調査事業の委員からの推薦により、国内で利用者の社会参加活動に取組む事業所をリストアップし、その上で、事業種別や社会参加活動の内容などで、多様な領域をカバーできるよう、以下の10事業所について調査をすることとした。

<インタビュー先>

- 医療法人社団東北福祉会・せんだんの丘（宮城県仙台市／老健・通所リハ等）
- 株式会社創心會・リハビリ倶楽部（岡山県倉敷市・岡山市等／通所介護等）
- 社会福祉法人佛子園・新橋邸（石川県輪島市／サービス付き高齢者向け住宅等）
- 認定NPO法人つどい・共生型の各種事業／総出事業（滋賀県長浜市）
- NPO法人シニアライフセラピー研究所・カルチャースクール亀吉（神奈川県藤沢市／通所介護等）
- 株式会社浪漫・よかあんべ（鹿児島県霧島市・始良市等／小規模多機能型居宅介護等）
- 株式会社ユニティ・リハケアガーデン（鹿児島県霧島市・始良市等／通所介護等）
- 株式会社アール・ケア（岡山県玉野市・倉敷市・岡山市等／通所介護等）
- 品川区立東五反田地域密着型多機能ホーム（小規模多機能とグループホーム）
- 株式会社おおきに・仕事&役割付きシェアハウス SUMIKA（奈良県桜井市／住宅型有料老人ホーム）
- 株式会社シルバーウッド（銀木犀〈船橋夏見〉千葉県船橋市／サービス付き高齢者向け住宅）

2) 調査の方法

各事業所には、インタビュー調査を行い、以下の項目を中心に聞き取りをした。なお、幅広く状況を把握するため、「社会参加活動」を、就労だけでなく役割創出、活躍できる場づくりを含み、介護サービス利用者（中重度者を含む）の思い、やりたいことが実現できる状況を創ると広くとらえた活動として、お聞きした。

<主な質問項目>

- 「社会参加」の活動内容
 - ・ 活動内容
 - ・ 場所
 - ・ 参加者
 - ・ 時間
 - ・ 実施体制
 - ・ 移動手段
 - ・ 報酬の有無
 - ・ 契約関係
 - ・ 行政との関係
- 活動の背景
 - ・ 活動をはじめた背景
 - ・ 活動が進んだ・広がった理由
 - ・ 活動をする上での壁・課題
- 関係する主体
 - ・ 活動には、どのような人や団体が関わっていますか？
 - ・ それぞれの役割
 - ・ それぞれの期待すること
- 活動の効果・成果
- 今後どのようになるとよいと思いますか？

3 調査内容

1) 医療法人社団東北福祉会・せんだんの丘（宮城県仙台市／老健・通所リハ等）

(1) 事業所の基本情報

【せんだんの丘ぶらす】

介護予防・日常生活支援総合事業

35名定員 登録は150名

対象地域は仙台市、送迎範囲は青葉区になっている

(仙台市には介護予防に特化しているところが少ない)

AM2時間コース、PMは火・木のみ

(サービス時間以外には地域住民に施設を開放している)

職員配置：作業療法士2名、理学療法士1名、看護師1名、介護職4名

【せんだんの丘 通所リハビリテーション】

定員50名

仙台市内で送迎が片道20分圏内で受け入れている

要支援の方から要介護の方まで重症度は様々

サービス提供時間も利用者のニーズに合わせて1～2時間から7～8時間まで7コース設定

職員配置：作業療法士4名、理学療法士2名、看護師1名、介護職9名

【せんだんの丘 入所】

超強化型老健

在宅復帰率は6～8割

在宅復帰を繰り返した延長線上で、在宅生活の限界を迎えた方は看取りまで支援している

(2) 社会参加の活動内容

【せんだんの丘ぶらす】

・個別で参加したい場所があればリハ職員が現場まで行って評価する

・個別のニーズに合わせて場面を設定することもある

(例)100均に行く、バスに乗る、マックに行く、野球観戦(現地集合にして事前にそこまでの手段を獲得させるための介入を行う→ほかの場面にも応用がきき活動範囲が広がる)

【通所リハ】

- ・寝たきりだがベッドから起きて家庭という社会参加をするという場合もあれば、地域に出て社会参加する場合もあるので個別での対応が多い
- ・『バスに乗って三越に行く』という小集団を作る等 利用者同士で気持ちを高めあうために集団を用いることはある
- ・集団でもみんな同じ目的ではなくて行けそうなのにはいかない、あきらめている利用者も一緒に連れて行って利用者同士の声かけでひきあげてもらい役割を担ってもらうこともある
- ・事業所内での役割：家庭での役割でのニーズがある利用者に配膳をしてもらうことはある
- ・認知症の利用者に職員の補助という役割を与える形で集団を利用することもある

【入所】

- ・IADL 改善目的に入所することは少ない(ほとんどが ADL の改善が目的)
- ・自宅との接点、家族との接点がまず第 1 の社会参加
- ・自宅に外出・外泊した際にいつもの席に母が座っているという社会参加もある
- ・調理活動を行っているが一連の工程全てを 1 人で行うのは入所の方だと難しい 家族が面会に来た際に調理の場に自分の母が参加しているというのでも効果のある社会参加
- ・認知症ユニットでは地域の見回り役をしていた入居者に消灯前にパトロールしてもらって今日の役割終わりましたねという声かけをすることもあった

(3) 活動の推進理由および課題

- もともとは預かり型の入所施設であったところから在宅復帰を目指す老健へとシフトしていった
- 地域でうまく機能する老健を示すことを念頭においている

(4) 関係する主体

- 利用者と家族
- 利用者のニーズとしてあがった場合は本人を介して職場の方とやり取りしながら調整した／している事例がある

(5) 活動の効果・成果

- 地下鉄で通院をきっかけに、地下鉄を食事やネットカフェまで広範囲が拡大
気功教室を再開し、教室主催の山登りに妻と参加
- 主婦として調理、洗濯を再開したいと、生活行為向上リハ
体操教室のほか、一人で美容院に行ったり、夫の移動支援で買い物に出かけるように

2) 株式会社創心會・デイサービス事業（岡山県倉敷市・岡山市等／通所介護等）

(1) 事業所の基本情報

事業種別：通所介護(デイサービス)

エリア：岡山県倉敷市・岡山市・笠岡市など

利用者数：2024 名(デイサービス事業全体)

平均要介護度：1.49

(2) 社会参加の活動内容

同じ法人グループ内に、就労継続支援 A 型、B 型事業所があり、連携して働く場づくりをしている。デイサービス内では、リハビリに一環として、仕事で必要となる作業を訓練し、その後、本格的に作業ができるようになってきた人については、就労継続支援 B 型などへ移行、福祉就労として継続的に仕事をしてもらうようにしている。

<主な活動内容>

- ネギの加工
- 段ボール箱の組み立て
- 総務関係の事務作業
- パン製造販売

(3) 活動の推進理由および課題

リハビリを通じて、生活機能を回復される利用者が増えたと同時に、その先の出口がなく、自立や社会参加が促進されない事に気づき、2010年から社会参加・就労に力を入れるようになった。また、医療保険、介護保険制度の枠を超えて、地域社会の中での居場所・出番・役割を創る仕組みを構想し、必要な事業はそれぞれ法人を立ち上げながら開拓してきた。

デイサービスの利用中に、仕事で必要となる作業の訓練をしており、謝金は発生していないので、介護保険制度上の制約や課題はない。有償ボランティアと謝金が発生する場合には、介護保険利用時間外などにしてもらう。生活機能を回復し、就労意欲の高い人が就労できる機会が、グループ法人の外にも広がるとより広がりがあるが、現在のところはグループ法人内でのマッチングとなっている。

(4) 関係する主体

- 農業生産法人 合同会社ど根性ファーム
- 株式会社リンクスライブ（就労継続支援 A 型、B 型）
（上記はいずれもグループ法人）

(5) 活動の効果・成果

- 介護保険サービスの利用者が、作業を通じて、福祉就労に移行するケースは多い
- 中にはパン屋で働いていた男性で、一般の会社に就職が決まった人もいる
- 夫（利用者）が福祉就労を始め、妻（介護者）のパートの時間を減らすことができた
- 利用者・家族が、介護サービス利用の先にある目標、出口の話を意識するようになった
- 利用者の自己肯定感につながっていると感じる

3) 社会福祉法人佛子園・新橋邸（石川県輪島市／サービス付き高齢者向け住宅等）

(1) 事業所の基本情報

サービス付き高齢者向け住宅（6戸）

(2) 社会参加の活動内容

自立の高齢者が、法人の運営するレストランで給仕係の仕事をしている。

現在は、要介護の人は働いていないが、グループ法人内で雇用を創出していきたい。

(3) 活動の推進理由および課題

運営する社会福祉法人佛子園では、子どもから高齢者、障害や疾病の有無、国籍等に関わらず地域に暮らすすべての人たちの共生拠点づくりをしている。法人内で生まれる様々な仕事も担えるようにしていきたいと考えている。

(4) 関係する主体

- レストラン

(5) 活動の効果・成果

- 現在は、要介護の人が働いていないので、不明

4) NPO 法人つどい・共生型の各種事業／総出事業（滋賀県長浜市）

（1）事業所の基本情報

事業種別：通所介護

エリア：滋賀県長浜市

平均利用者数：22 名(1 日平均)

平均要介護度：要介護 1～2

（2）社会参加の活動内容

同じ NPO 法人で、就労継続支援 B 型事業所や、放課後児童クラブなども運営している。デイサービスの利用者には、普段からできることは自分でしてもらっていて、農作業や加工品づくり、喫茶の給仕などをしてもらっている。

<主な活動内容>

- 喫茶の給仕
- 耕作放棄地での農作業
- ハスの加工品づくり

（3）活動の推進理由および課題

2011 年からデイサービスを開始。地域の人の困りごとが持ち込まれるようになり、幅広い事業展開をしてきた。

放課後児童クラブ、障がい児長期休暇預かり、就労継続支援 B 型事業所総、出事業（引きこもりなど、はたらきづらさを抱えた若者×耕作放棄地）など。

黒田地域に産業をつくりたいというのが、根幹の想い。耕作放棄地をなんとかしたい、いろんな人が働く場、仕事を作りたい。自立支援なので、できることは自分でするのが当然地域の中に、いろんな人がごちゃまぜになって、働ける場所を作りたい。

介護保険事業の中で、有償ボランティアとして報酬をもらうことは、県では認められないという判断だった。働いてもらった人には、金太郎マネーという独自のポイントを発行し、事業所で買い物に行った時などにポイントで買えるようにしている。（事業所の負担）

制度に合わせようとすると、制約も多いので、2018 年、合同会社を設立し、事業を開始した。放棄されていたビニールハウスでシイタケ栽培をしている。

(4) 関係する主体

- 耕作放棄地（農業関係者）
- 地元住民（喫茶の利用）
- 京都の料亭（ハスの葉の購入）

(5) 活動の効果・成果

- B型を利用する若者と高齢者の相性はよい
- 職員の名前は、覚えていない高齢者も、若者の名前を覚えていたりする
- 「ともに同じ場にいることの豊かさ」
- 認知症の人が、別の認知症の人に作業の指導をする場面も見られる

5) NPO 法人シニアライフセラピー研究所・かめキッチン（神奈川県藤沢市／通所介護等）

（1）事業所の基本情報

事業種別：通所介護

エリア：神奈川県藤沢市

利用者数：1日平均 6.5 人

平均要介護度：1.5

（2）社会参加の活動内容

デイサービスの利用者も、地域のボランティアや障害者がまざって働ける環境を作る

地域のレストランで提供する惣菜を一緒に作る

障害や属性に関係なく、業務内容・貢献度に応じて謝金が支払われる（有償ボランティア）

介護保険の利用者の支払い実績としては1時間あたり謝金200円～300円

<主な活動内容>

- レストランで提供する料理の調理
- 総務関係の事務作業
- 他の人に、仕事内容を教える

（3）活動の推進理由および課題

介護保険の利用者や障害者など属性に関わらず、やりたいことを実現するために様々な事業を展開してきた。（ボランティア事業28、収益事業12）2008年頃から、デイサービスでは、働きリハビリを取り入れてきた。2018年6月、かめキッチンを開業。

専門職のスタッフの意識が課題。事業拡大期に、スタッフを多く雇用し、教育を試みたが、過剰なケアをしてしまい、自立支援にならなかった。地域ボランティアもやることがなくなると感じ、離れてしまうようになった。専門職は、必要最小限の関わりをして、地域ボランティア、障害者、デイサービスの利用者同士でやりとりがされるようにしている。

介護保険利用者が、有償ボランティアとして対価を受け取ることについては、厚労省通知などもあり、県でも認めてもらっている。全社協の福祉総合保険に加入している。

保健所には、有償ボランティアとして働く可能性のある人全員を従業員として登録している。

(4) 関係する主体

地域ボランティア

障害就労継続支援事業（同法人で運営）

地域住民（レストランの利用者、子育て中の親子などが多く来店）

(5) 活動の効果・成果

- 地域のボランティアとの交流
- お客さんと来店している親子連れや地域の人との交流

6) 株式会社浪漫・よかあんべ（鹿児島県霧島市・始良市等／小規模多機能型居宅介護等）

(1) 事業所の基本情報

名称：共生ホーム よかあんべ
地域サポートセンター よいどこい
事業種別：小規模多機能型居宅介護
エリア：鹿児島県始良市・霧島市
利用者数：28名
平均要介護度：1.85

(2) 社会参加の活動内容

旅カレッジは、他の事業所、スポーツクラブ、旅行会社と協働して、毎年海外旅行に出かける（台湾や韓国）旅行に行くことという目標に向けて、体を動かしたり、言葉や文化を学んだり、仲間を作ったりしている

<主な活動内容>

- 地域の清掃活動
- 自治会と協働した祭りの運営
- 旅カレッジ
- クロネコヤマトのメール便の配達

(3) 活動の推進理由および課題

重度の人が多いため、就労というよりは社会参加、地域とのつながりをつくることを重視
平均の要介護度が4を超えた時期もあった
10年経過し、初期からの利用者を看取り、要介護の軽い方も利用されるようになり
クロネコでの就労の件も実施することになった

(4) 関係する主体

- 自治会
- スポーツクラブ
- 旅行会社
- クロネコヤマト

(5) 活動の効果・成果

- ごみ拾いや地域の夏祭りを通じて、地元の人たちとの交流が生まれる
- 旅カレッジ 旅行を通じて、本人に自信がつく、家族に気づきが生まれる。
- 「もうすこし在宅生活をつづけてみようか」という気持ち
- 旅行をするために、散歩をして体力の維持に努めるなど、目標ができる

7) 株式会社ユニティ・リハケアガーデン（鹿児島県霧島市・始良市等／通所介護等）

（1）事業所の基本情報

名称：リハケアガーデンネクスト

事業種別：通所介護

エリア：鹿児島県霧島市

利用者数（1日平均）： 3時間コース 18名

6時間コース 30名

平均要介護度： 3時間コース 支援2～介護1

6時間コース 介護1～介護2

（2）社会参加の活動内容

デイサービスの利用は、3時間と6時間で、下記のような社会参加・就労が盛り込まれている。1回の就労時間は、1時間程度。外にでる人もいれば、室内で作業をする人もいる。

- ホンダ自動車の車内清掃
- 中華料理店ふきんやおしぼりたたみ
- 弁当屋の箱のスタンプ押し
- ローソン商品の仕分け
- 小学校での鉄棒のペンキ塗り、窓ガラス拭き、下校時のあいさつ係
- 地元地域の草取り
- クロネコヤマトのメール便の配達 など

（3）活動の推進理由および課題

代表の濱田さんの祖父が利用していたデイサービスで、夕方になると突っ伏していた。何でもやってしまい、意欲や身体機能の低下させる悪循環に問題意識を持ち、起業する。代表やスタッフの知り合いや同級生などのツテで、仕事をする先をひとつずつ開拓してきた。

担当のケアマネなどからは、「外ででて怪我をしたらどうするのか」など不安視する声もあったが、目的をきちんと説明し、活動内容などもニュースレターなどを使い、丁寧に説明するようにして理解を得られるようになってきた。現在は、無償のボランティアとして実施しているが、張り合いにつなげるために、有償ボランティアでできるようにしていきたいと考えている。厚労省の通知などもでていますが、前例があまりないことから県の担当者なども詳しい情報を持っていないようだった。有償となる場合、契約を利用者個人とするのか、事業所としてするのか課題。個々に契約だと、活動できる人が限定されてしまうので、事業所が契約することになると思うが、謝礼のお金の扱いを、事業所のお金とは別に管理する必要があるので、事務的に注意が必要ではないかと思う。

企業（仕事の発注主）側でも、高齢者などに仕事をお願いできる形にすることに慣れていないこともあり、

業務の分解をどのようにするのも課題のひとつ。

(4) 関係する主体

自動車販売店、コンビニ、中華料理店

小学校、教育委員会

(5) 活動の効果・成果

- 特に小学校での活動は、子供たちとも交流になるので、楽しみにしている
- 要介護2の利用者が、活動をしている間に改善し、最終的に保険外（卒業）になった
- 卒業した人が、週4日、ボランティアとしてデイサービスで働くようになった

8) アール・ケア（岡山県玉野市／通所介護）

（1）事業所の基本情報

名称： デイサービスセンター アルフィック

事業種別： 通所介護

エリア： 岡山県玉野市（岡山県南部に10事業所を展開）

利用者数： 定員40名

平均要介護度： 1.8（2014-2018年）

（2）社会参加の活動内容

介護保険事業の中で、就労や社会参加活動という形では実施していない。

（3）活動の推進理由および課題

リハビリ特化型のデイサービスで、身体機能を向上させることで、身の回りのことや以前のような生活を送ることができることを目指している。

（4）関係する主体

- 利用者と家族

（5）活動の効果・成果

- 脳血管障害の60代男性 畑仕事が再開できたことにより、自宅の役割を持って生活リズムができた
- 60代男性 妻と共通の趣味であるゴルフの練習に行けたことにより、買い物などの外出も習慣になった
- 80代女性 リハビリにより夫の一回忌に自分の足でお寺やお墓に行くことができた

9) 品川区立東五反田地域密着型多機能ホーム（小規模多機能とグループホーム）

（1）事業所の基本情報

名称：品川区立東五反田地域密着型多機能ホーム

（運営は、社会福祉法人新生寿会（きのこグループ））

事業種別：小規模多機能型居宅介護・認知症対応型共同生活介護

エリア：東京都品川区

<小規模多機能>（2018年2月現在）

登録定員 25名 現在登録者 25名

通いの平均は10名程度 訪問が多い

平均要介護度 2

<グループホーム>（2018年2月現在）

定員 18名 現在入居者 18名

平均要介護度 2.4

（2）社会参加の活動内容

- 玉ねぎの販売（敷地内の屋外スペース）
- 駄菓子屋
- 東五反田食堂（コミュニティ食堂：実施主体は地域の別団体）
- 夏祭り・イベント（ファームエイド）の開催

（3）活動の推進理由および課題

施設長の鈴木さんは、グループが東京に拠点を持った15年前に就職し、認知症にケアに携わってきた。法人全体で、重度の認知症やBPSDがある認知症の人のケアに力を入れてきたが、軽度の人を中心に「まだできることがある」「自分でお金を持ちたい」という声に向き合えてこなかった側面があると思う。1年半前に、新しい施設で、施設長になったタイミングで、新たなチャレンジをしていきたいと思った。

日頃から買い物など積極的に外出をしており、外出すること自体に制度的な制約はない。

自分でお金を持ちたいという希望を叶えるため、働いた人に謝金を支払いたいと思っているが、品川区と相談した結果、前例がないので難しいという判断。

・厚労省通知は、通所系が対象であること

・グループホームは24時間介護サービスの対象となっており、謝金の支払いの是非が問われる可能性があり、区立の施設としてはリスクの伴う判断は難しい。

などが判断理由。

お金を伴わない形は実施可能との判断なので、現在は、販売した売上は活動後、食べ物、飲み物を買ってきて、打ち上げをしている。

(4) 関係する主体

- 地域住民（玉ねぎを買いに来る）
- 玉ねぎ農家
- 地域の子供たちや保護者（駄菓子屋を利用）
- コミュニティ食堂を主催する地域団体
- 自治会
- 品川区

(5) 活動の効果・成果

- 寝ていることが多かったが駄菓子屋の店番をするようになってから、しゃっきりとするようになった 駄菓子屋が始まる前の時間から、そろばんを準備して待機するようになった（小規模多機能の男性利用者）
- 高齢者ばかりだった頃、施設内での食事の支度などを手伝ってもらっていたが、しだいに疲れた、しんどいという言葉が増えてきた。その後、駄菓子屋で子どもたちが通うようになると、毎日やってくるのが楽しい様子（小規模多機能の女性利用者）
- 玉ねぎの販売をした人は、地域の人と交流ができて、いきいきとしていた。後日、「またアレをやるんだったらやりたい」という声をもらった。

10) 株式会社おおきに・仕事&役割付きシェアハウス SUMIKA (奈良県桜井市/住宅型有料老人ホーム)

(1) 事業所の基本情報

- サービス付高齢者住宅 (インタビュー時には、開設予定 2019年3月現在まで事業は未開始)

(2) 社会参加の活動内容

- 食事の配膳、下膳
- 館内の清掃
- 外部のオムツ卸会社の在庫整理

有償ボランティアとして、1回あたり500円を支払い予定 (1時間半~2時間程度)

(3) 活動の推進理由および課題

同じ法人で運営するデイサービスで、利用者が働く活動 (革製品づくり、木工作業、食堂での調理、接客など) を実施してきた。サービス付高齢者でも同様に活動できるのではないかと考えた

(4) 関係する主体

- 外部のオムツ卸会社

(5) 活動の効果・成果

- まだ実施していない

1 1) 銀木犀 <船橋夏見> (千葉県船橋市 / サービス付き高齢者向け住宅)

(1) 事業所の基本情報

事業種別：サービス付き高齢者向け住宅

エリア：千葉県船橋市

2019年5月オープン予定

(2) 社会参加の活動内容

仕事付きサービス付き高齢者向け住宅

レストラン「恋する豚研究所 lunch table」が併設

入居者がレストランの仕事を有償とする（最低賃金以上の支払いを予定）

レストランは、地域に解放され、地域住民などが利用する

<主な活動内容>

- 厨房での作業
- 給仕

(3) 活動の推進理由および課題

運営する株式会社シルバーウッドでは、地域に開かれた場づくりを実施してきた。

他の銀木犀では、施設内に駄菓子屋を開き、地域の子どもやその親の世代がやってくる場所になっている。

駄菓子屋で接客、会計をするのが入居されている人。

「仕事付き」サービス付き高齢者向け住宅は、これまでも取り組みの延長上にある。

既存の介護制度の枠組みではなく、レストラン事業など、一般のビジネスの枠組みの中に福祉的要素を入れていきたい。

(4) 関係する主体

社会福祉法人福祉楽団・恋する豚研究所（レストラン事業の暖簾分け）

地域住民（レストランの利用）

(5) 活動の効果・成果

2019年5月オープン予定

4 結果と考察

1) 「社会参加」「就労」の位置づけ

今回、インタビューした全ての事業所は、自立支援のための活動を当たり前にしており、何か特別なことをしているという認識をなかつた。社会参加や広義のハタラクというものは、オプションな価値ではなく、これが本来の介護サービスの目的ではないかという意見も多く聞かれた。

また、個々の利用者の社会参加というだけでなく、介護事業所自体が、地域の地域（自治会などの身近な単位）の一員となっていく過程に、「社会参加」「就労」が要素として位置付けられる側面もある。

要介護度に応じて、「社会参加」なのか「就労」なのか力点は違うものの、介護サービスを利用し始めると、地域や友人との関係が切れてしまうといったように、地域や役割と切り離れた形で介護サービスが存在してきたことに対する問題提起とも言える。

2) 事業種別・要介護度別による差異

- 介護事業種別による違いは大きくはなかつた
- 本格的な就労については、就労移行支援 B 型事業と連携するケースが多い
- 報酬支払いの是非について、通所系に比べてグループホームなどがより保守的な解釈になる可能性はある
- 要介護度 3、4 でも就労しているケースもあるが、全体的には要介護度が重い場合は、就労というよりは社会参加・地域とのつながりの維持という点が重視されている

3) 活動の展開プロセス

「社会参加」「就労」といった活動は、日々の業務改善などで自然発生的に生まれてくることはまれで、経営者や施設長クラスの信念と強いリーダーシップが必要であることがわかつた。

- 経営者が起業したり、現場責任者が異動のタイミングなどで、開始しているケースが多い
- 利用者の「働きたい」「地域に貢献したい」「稼ぎたい」などの声きっかけという場合と、（明確な声はなかつたが、）ケアの延長上で地域とつながりを維持・つくるを体現していこうとしている場合の両者がある

4) 活動内容の開拓

活動内容の開拓は、以下のようなパターンがあつた。

- 知り合いを通じて外部企業に依頼する
- 地域の人を招き入れる駄菓子屋
- 法人グループ内で調達（就労移行支援 B 型事業などと連携）
- 事業所内の作業（清掃、洗濯物たたみ、調理など）

5) 報酬の有無・契約関係

- 有償ボランティアとして謝金を受け取ることができるのかについて、自治体ごとの解釈の余地があり、明確に禁止されていない場合も前例にないことで実施するのに時間がかかるケースがあった
- 謝金なしでも実施していて一定の成果はあるが、若干の報酬が発生する方が張り合いにつながるケースが多い（自分で使えるお金を持ちたいというニーズも）
- 利用者と企業（仕事の発注先）との間に事業所が介在する場合の契約やお金のやりとりに注意が必要

6) 働き方のパターン

働き方には、以下のようなパターンがあった。介護サービスの利用中に働くことは、より積極的な社会参加や就労などにつながるきっかけとしても機能していることがわかった。

- 介護サービスの利用時間中に活動
- 介護サービスの利用時間中に活動を経て、B型事業所などに移行
- 介護サービスの利用時間中に活動を経て、利用日以外に、ボランティア活動や就労する

7) 人員体制

- 人員配置に関して課題を抱えているところはなかった
- 「お世話をする」型の介護職の働き方をしようとするから人手が足りないという認識になるのではないかという指摘が多かった
- 利用者や地域のボランティアが、事業所内での仕事を引き受けることで、専門職が本来の職務に専念できるという好循環も生まれていた

第3章 介護サービス事業所の職員のための研修プロトタイプ作成（調査2）

1 目的

本章は、介護サービス事業所の職員が、利用者の社会参加活動を適切に実施し、よりよい効果を生み出すために必要な視点や行動、スキル等の要素を明らかにし、人材育成のための研修のプロトタイプを作成することを目的とする(調査2)。そのために、モデルケースとして、利用者の社会参加活動にいち早く取り組み、全国の先進事例として知られるデイサービス DAYS BLG!を運営する前田隆行氏（NPO 法人つながりの開理事長）へのインタビューや参与観察から、職員に必要な視点や行動、スキル等の要素を抽出し、モデル化を試みる。その後、それらの要素とモデルについて、同じく利用者の社会参加活動に取り組む2名のモデルケース（野々村光子氏、川村美津子氏）に対してシャドウイングを行って修正と改善を図る。最後に、完成した要素とモデルに基づき、実際に観察された複数の事例を当てはめた解説事例集を作成することで、利用者の社会参加活動を実施するにあたって、介護サービス事業所の職員が実際にどのように現場で考え、動けばよいのかを学ぶことができる研修プロトタイプとし、研修の到達目標や実施方法等についても検討をくわえる。

2 調査の対象と方法

1)職員研修に必要な要素の抽出とモデル化

介護サービス事業所の職員が、利用者の社会参加活動を適切に実施し、よりよい効果を生み出すために必要な視点や行動、スキル等の要素を明らかにするため、以下の対象と手続きにより調査を行った。

(1) 対象

前田隆行氏（NPO 法人つながりの開理事長）を調査対象とした。前田氏が運営するデイサービス DAYS BLG!は、利用者の社会参加活動にいち早く取り組み、全国の先進事例として知られている。DAYS BLG!は定員 10 名のデイサービスであり、利用者は朝集合すると、全員でテーブルを囲みながら「今日やりたいこと」を話し合いながら決める。「やりたいこと」にはいくつかのメニューがあり「カーディーラーでの洗車」や「広報誌の配布」、「包丁研ぎ」等の仕事も含まれる（報酬が支払われるものも含む）。これらの活動を通じて地域とのつながりや仲間とのつながりを強めることを重視した事業を展開している。なお、利用者の多くは身体機能は自立した状態にあるが、認知症を有している場合も多く、要介護度としては2～3の利用者が多い。

(2) 手続き

前田氏に対して2回（1回1時間程度）の半構造化面接を行った。面接は、実際の利用者が社会参加活動に取り組んだ事例を想定してもらいながら、①具体的にどのように利用者のニーズを把握し、②どのように場の設定や関係者の合意形成を図りながら実現させたのかについて対話を重ねながら進めた。前田氏の発言は発言録として記録した。なお、面談は臨床心理士である研究者が実施した。

面接後は発言録に対して主題分析を行い、利用者の社会参加活動を実施するために必要な視点や行動、

スキル等を質的に分類し、人材育成に必要な要素として抽出、さらにそれらの要素をモデル化した。これらの要素とモデルについては、信頼性と妥当性の検証の一環として前田氏に確認を依頼した。

2) シャドウイングによる要素とモデルの修正

上記 1) にて抽出した要素とモデルの修正を図るため、前田氏とは異なる以下の対象 2 名のモデルケースについてシャドウイングを行い、修正と改善を行った。

(1) 対象

川村美津子氏（認定特定非営利活動法人つどい理事長）及び野々村光子氏（社会福祉法人わたむきの里福祉会・東近江圏域働き・暮らし応援センター“Tekito-”・東近江圏域障害者就業・生活支援センター センター長）を調査対象とした。川村氏は介護保険制度施行後、居宅介護支援事業所（ケアプランつどい）、通所介護事業（ディサービスつどい・七条つどい・いまいきつどい）、農園事業（きんたろう村のうえん）、障害者等日中一時預かり事業（つどいきッズ）、放課後児童クラブ（つどいジュニア）、地域交流ルーム（Live つどい、きっちるんるん）、障害 B 型作業所（つどい庵）など領域別福祉事業に止まらず、幅広い事業を運営している。川村氏の事業展開の特徴としては、地域住民や家庭からの要請を重んじていることにある。例えば、居宅介護支援事業所については、母親の介護問題が生じて立ち上げている。また、障害福祉事業については地域に暮らす 1 人の障害者のために事業を開始した。さらに、農園事業については地域住民が川村氏に「何かに活用できないか」と相談をしたことにより始まっている。そして、それらの事業を繋ぎ合わせ高齢者や障害者の社会参加を企画、実施している。

野々村氏は 2002 年 5 月に制度化された障害者就業・生活支援センターにて立ち上げ時から勤務している。障害者就業・生活支援センターとは、地域において、就業面と生活面の一体的な相談・支援を行うことを目的とし、障害のあるひとの自立・安定した職業生活の実現を目指す支援機関であるが、野々村氏は“障害のある人”に止まらず、ひきこもり等、地域に住む人全てに対し就労支援を実施してきた。その中で、受け皿をなす企業側にも積極的に働きかけを行い、就労支援を軸としたコミュニティビジネスまでも手掛けている。

(2) 手続き

川村氏、野々村氏、それぞれに対して 1.5 日間のシャドウイングを実施し 2 名の人生観や職業観等を含めつつ、行動について観察した。

観察後は、2 名の発言録や行動に対して主題分析を行い、利用者の社会参加活動を実施するために必要な視点や行動、スキル等を質的に分類し、人材育成に必要な要素として抽出、さらにそれらの要素をモデル化した。また 2 名の活動に汎用性を持たせるために特定の要素を抽出しモデル化した。

3) 要素とモデルに基づく解説事例集の作成

上記 2) にて修正を行った要素とモデルに基づき、介護サービス事業所の職員が利用者の社会参加活動を実施するにあたって、現場でどのように考え、動けばよいのかを学べるように、対象とした以下の3つの事業所で実際に観察された複数の事例を当てはめた解説事例集を作成した。さらに、解説事例集をもとに、研修の到達目標や実施方法等についても検討をくわえた。

(1) 対象

通所サービス施設 A、介護予防・日常生活支援総合事業 通所型サービス B、通所リハビリテーション施設 C を調査対象とした。A は、定員 10 名、都市近郊部にある通所サービス施設であり、利用者の社会参加や役割の獲得に向けて、仕事や地域活動などのさまざまなサービスメニューを用意し、利用者自身がそれらを選ぶことで活動を実施している施設である。B は定員 35 名、要支援 1・2 の認定を受けた方及び事業対象者を受け入れている事業所であり、利用者の日常生活を中心に考え、地域で生活し続けることを目的にし、生活圏域における課題を解決することで主体的な活動を支援している。2 時間の利用時間中に個別計画を基に日常生活に視点を置き、運動器機能向上プログラムおよび口腔機能向上プログラムを実施している。C は定員 50 名の通常規模型通所リハビリテーション事業所で利用時間区分は利用者に合わせて 7 コース設定している。送迎時の居宅内介助に加え、送迎車乗降、自宅内・外の活動プログラムも通所リハビリテーションサービスの一環として位置づけており、社会参加適応訓練の多様化を図っている事業所である。

(2) 手続き

A 施設については 4 日間の参与観察を行い、その中で観察された利用者の社会参加活動について事例対象とした。また、事例対象については担当スタッフに対して面談を行い、どのような意図を持って関わりをもっていたのか等についてさらに情報を収集し、解説事例として作成した。B、C については、職員と事例検討会を開催し、好事例に対し、職員の行動にどのような意図があったかを振り返る形で情報収集し、解説事例としてまとめた。

3 調査内容

1) 職員研修に必要な要素の抽出とモデル化

前田氏に対する半構造化面接に基づき得られた発言録をもとに分析を行った結果、図 3-1 に示したとおり、利用者の社会参加活動を実施するために職員に必要とされる視点や行動、スキル等の要素として、以下の①人を識る力、②場をつくる力、③人と場をつなげる力、④仲間づくりにつなげる力、⑤継続する力の5つが示された。

①人を識る力は、主に現場で利用者個人と向かい合う観点から求められるもので、利用者の思いや価値観、関心領域等に関するアセスメント力と、利用者の日常や活動等の能力に関するアセスメント力から構成され、それぞれ傾聴と情報収集のスキルと、認知機能、身体機能、ADL 等に関する知見と見極めのスキルが必要とされた。

②場をつくる力は、主に現場で利用者個人と向かい合う場面に比べ、経営的な観点からも求められるもので、就労等の社会参加や利用者の思いや能力が発揮される場を設計する力と、場を事業所／法人内外で開拓する力から構成された。また、それぞれに柔軟な発想力と、情報収集及び共通課題を抽出するスキルが必要とされた。

③人と場をつなげる力は、主に現場で利用者個人と向かい合う観点から求められるもので、②で設計された場において求められる作業や手順を分解する力と、分解した作業や手順と①の本人の思いや能力をマッチングさせ、活動をシミュレートする力から構成された。

④仲間づくりにつなげる力も、主に現場で利用者個人と向かい合う観点から求められるもので、①～③を通じて、利用者同士／利用者とスタッフ／利用者と地域の人等との仲間づくりを促し、居場所をつくる力から構成され、人と人をつなげるファシリテーションのスキルが必要とされた。

最後に⑤継続する力は、主に経営的な観点から求められるもので、①～④の一連の取組を継続させて事業として成立させるために、スタッフへの教育力と地域に対するブランディング力から構成された。さらに、それらは、コミュニケーションとOJTのスキル、市役所や包括支援センター、ケアマネジャー等とのコミュニケーションスキルが必要とされた。

なお、上記の要素とモデルについて前田氏からは確認が得られている。

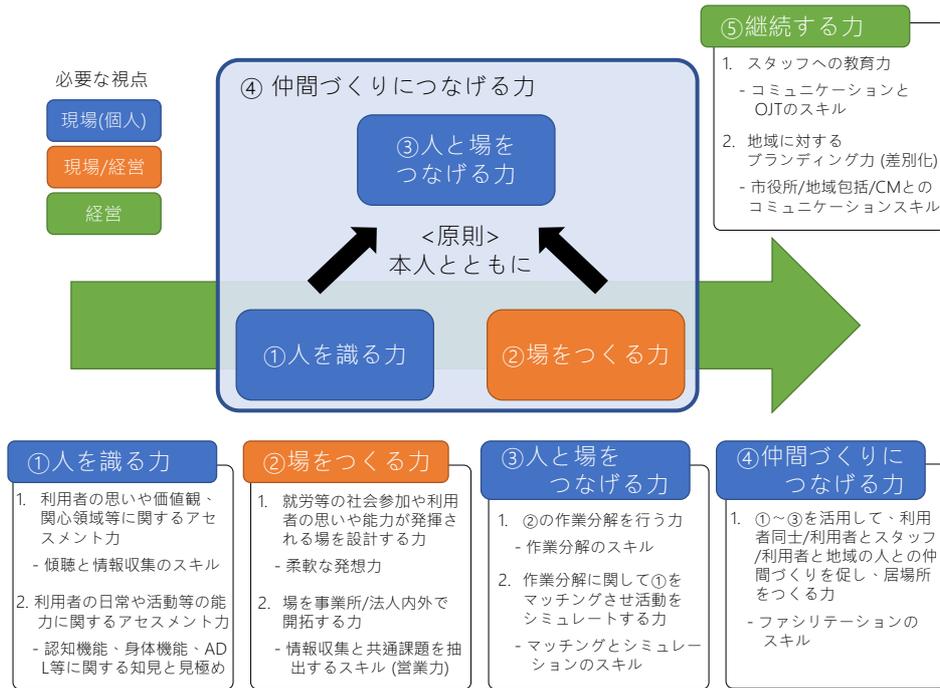


図 3-1 利用者の社会参加活動等を可能にするために職員に求められる要素

2) シャドウイングによる要素とモデルの修正

上記 1) にて抽出した要素とモデルについて、前田氏とは異なる 2 名のモデルケース（野々村光子氏、川村美津子氏）についてシャドウイングを行い、修正と改善を行った結果、図 3-2 に示した要素とモデルが作成された。要素としては、以下の①本人の思いに共感する力、②本人の状態を把握する力、③場を開発／用意する力、④場を整える力、⑤本人と場を繋げる力、⑥地域での自立や参加につなげる力（地域共生の視点）、⑦継続する力の 7 つが示された。

①本人の思いに共感する力は、本人の思いや価値観、関心領域等に関するアセスメント力であり、傾聴と共感／情報収集のスキルが必要とされる。②本人の状態を把握する力は、本人の日常や活動等の能力に関するアセスメント力であり、認知機能、身体機能、ADL 等に関する知見と見極めのスキルが必要とされる。これら 2 つは主に利用者本人と個人として向かい合う際に必要な要素である。

③場を開発／用意する力は、本人の望む活動の場や適した環境を事業所内外で開発／用意する力であり、地域資源に関する情報収集と地域での共通課題を抽出するスキル（営業力）が必要とされる。④場を整える力は、本人の思いや能力が発揮されるように場を調整する力であり、柔軟な発想スキル、例えば仲間づくりの場や居場所としての場、地域とのつながりの場へと調整し変換するスキルが必要とされる。これら 2 つは主に場や環境に関連して必要な要素であり、特に③はより経営的な観点が必要となる要素である。

⑤本人と場をつなげる力は、①②の利用者本人に対する要素と、③④の場や環境に対する要素を結びつける位置づけであり、場での活動や役割を分解する力と、分解した活動や役割を本人の思いや状態とマッチングさせ、シミュレートする力から構成され、それぞれに作業分解のスキルと、マッチング及びシミュレーションのスキルが求められる。この

過程において①②と③④は互いに関連し合い、相互に修正と変化が起こりうる。

そして⑥地域での自立や参加につなげる力は、①～⑤の要素や相互作用を通じて、利用者本人の機能や役割の回復とともに、本人／家族／スタッフ／地域の人とでコミュニケーションを促し、社会参加に位置づける力であり、地域共生の視点とそのためファシリテーションのスキルが求められる。

最後に⑦継続する力は、一連の活動を通じて事業を成立させ持続可能性を担保するために必要な要素であり、スタッフへの教育力と地域に対するブランディング力から構成され、それぞれコミュニケーションと OJT のスキル、市役所や包括支援センター、ケアマネジャー等とのコミュニケーションスキルが必要とされた。

なお、上記の修正版における要素とモデルについても前田氏から確認が得られている。

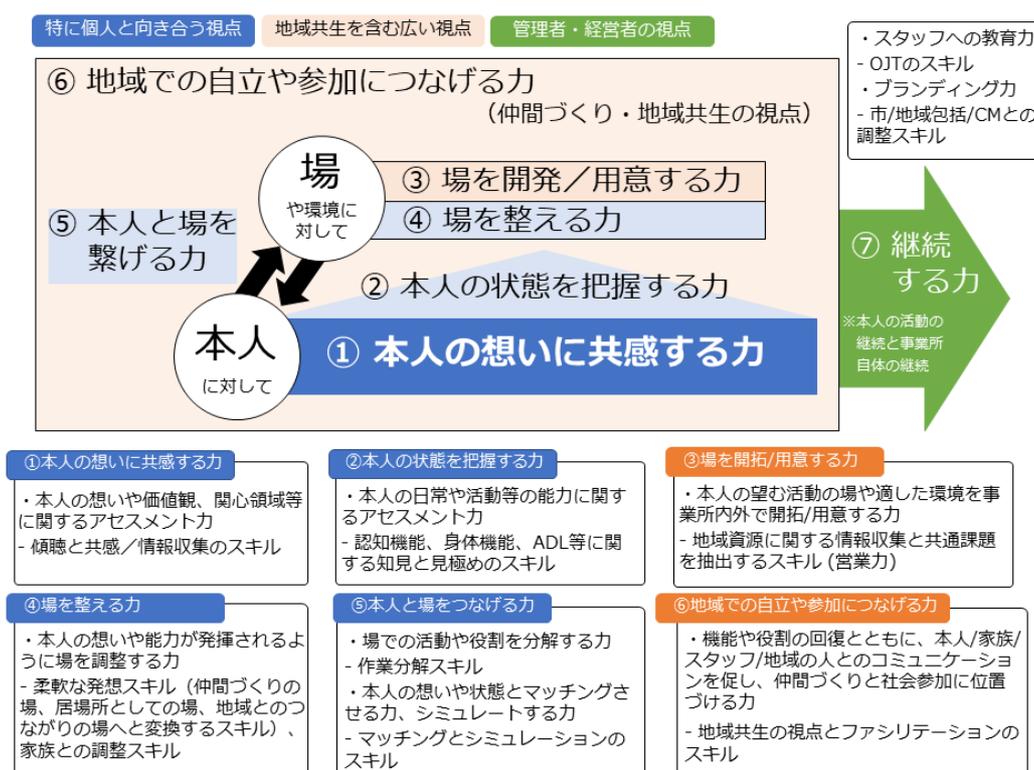


図 3-2 利用者の社会参加活動等を可能にするために職員に求められる要素 修正版

3) 要素とモデルに基づく解説事例集の作成

上記 2) にて修正を行った要素とモデルに基づき、介護サービス事業所の職員が利用者の社会参加活動を実施するにあたって、現場でどのように考え、動けばよいのかを学べるように、3つの施設にて実際に観察された複数の事例をもとに、以下の解説事例集を作成した。なお、事例は個人の特定を避けるために主旨を損なわない範囲で一部改変を行っている。

特に事例 1 では、先述した 7つの要素とモデルに基づいて、一通りの概要を理解することを目標とした事例として解説をする。事例 2 と 3 は、さらに詳細な場面に基づいた事例として解説することで、より具体的なノウハウを理解することを目標とする。

事例 1 :

通所サービスに新規に参加し得意のお好み焼きづくりを通じて仲間づくりと社会参加につながった事例

【事例概要】

本事例は、新規に通所サービスに通うことになった 70 歳代男性（A 氏）である。軽度の認知症を有しており、短期記憶に困難はみられるが、身体機能は自立されている。以前は飲食店を経営していた経験があり、性格も社交的で明るく振る舞う姿が印象的であった。飲食店を経営されていたことをもとに、初回利用時から約 1 週間後に昼食をお好み焼きにして一緒に作ろうとスタッフが提案を行い、お好み焼きづくりを通じて他利用者とのつながりが生まれ、さらに活動の輪が広がり社会参加につながった事例である。以下に、本人とのコミュニケーションの中で本人のやりたいことを把握し、実現に向けて介入したプロセスを記す。

【基本情報】

・年齢・性別・要介護度：70 歳代 男性 要介護 1

・病歴：認知症

【生活歴】

複数の飲食店を経営していた経験があり、人のために働くことや人と接することが好き。仕事をしたいという本人の希望があったことと、同居家族が日中に人と交流する活動を望んだことから通所サービスの利用が開始となった。

① 本人の想いに共感する力

A 氏が以前飲食店を経営しており、どんな料理が得意であるかは、事前見学の際に家族から聴取されていた。それでも、本人の口から直接聞くために「どんな仕事をされていましたか？」と尋ねることで、飲食店経営時代のエピソードが本人の口から直接聞くことができた。本人はかつての自分の活躍を楽しそうに話すとともに、その時に人から感謝されたこと、人の役に立てたことをにこやかに話していた。特に、自分の得意料理だったお好み焼きは評判がよく、多くの人に褒めてもらっていたことを語っていた。それら想いを本人の口からきちんと聞いたうえで「お好み焼きをお昼に作ってみませんか」という提案につなげた。一方、A 氏は通所サービスに新規に参加して日も浅く、緊張しつつも努めて笑顔でスタッフや他の利用者と接する姿がみられていたことから、想いに共感したうえで、何らかの活動を通じて仲間づくりになる機会をうかがっていたため、お好み焼きづくりを絶好の機会として考えていた。

ポイント：家族からだけでなく、本人と必ず話をする。家族から聞かれる話であっても、本人しか知らない、本人ならではの情報や思いが必ずあることから、本人のことを知りたい、本人の口から聴きたいという姿勢で接することが重要。

② 本人の状態を把握する力

A 氏に「お好み焼きをつくりませんか？」と提案したところ、即答で「やりたい」と自信を持った返答があった。身体機能はまったく問題がなく、記憶障害に関する多少の補助があれば十分にやれると判断できたことから、やれることを前提にその後の具体的なお好み焼きの作業工程を組み立てた。

ポイント：会話や動作から本人の日常の様子を推察し、さらに本人がどのくらいの自信を持っているのかを反応から見極めることが重要。本人が望むことを「できる」前提で話を進めながら反応を見極めてエンカレッジすることも重要（例：みんなでやりましょう。一緒にやりましょう等）。

ポイント：すべてができなくても、ところどころでもやってみることができることが重要。「ここではやりたいことができる」という安心感が伝わるのが最も重要。

③ 場を開発／用意する力

A 氏の希望である「お好み焼きづくり」の実現に必要な物理的・空間的・環境的・人的要素をリストアップすると、調理器具や道具等の問題はなかったが、材料の買い出しや調理作業の順序や人数等で工夫が必要となった。その日の他の利用者全員がお好み焼きづくりに参加したいとは限らなかったり、全員が参加してしまうと周囲に気を使いすぎてしまう A 氏にとっては作業しやすい環境ではないかもしれないと考えられたため、お好み焼きづくりと並行した別の活動の場も用意するとともに、2つの活動の流れとその時のスタッフの人員配置も設計した。

ポイント：一つの場を独立して設計せず、最低2つの場を同時に設計することで、選択肢がある状態をつくるのが重要。それらの場での人や役割、作業の流れやつながりをできるだけ細かく想定することが重要。

④ 場を整える力

お好み焼きづくりにおいて A 氏が主体性を発揮できるよう、A 氏の経歴を他利用者にも紹介したり、記憶障害による部分をメモ等でさりげなく補助したり、場の中心として自信を持って役割を担えるように関わりを工夫した。A 氏の活躍が目に見えるように、また周囲の助けも A 氏に届くように場を調整した。

ポイント：何のために本人のやりたいことを実現しようとしているのかから、ぶれないことが重要。本人のやりたいことを実現することで周囲とのつながりを感じることで、そこから自分を取り戻していくためだということを忘れない。

⑤ **本人と場を繋げる力**

お好み焼きづくりという場に本人が具体的に参加できるよう、以下のような観点から作業と役割を分解した。さらに A 氏の状態像と分解した作業工程をマッチングさせながらシミュレーションし、もし作業が難しかった場合のためにいくつかの分岐を用意した。

ポイント：まず一連の流れを担ってもらうことから始める。そこで、つまづく部分や難しい場合は、作業工程をさらに分解して出来るところを担ってもらう。また、サポートがあれば出来る部分については、瞬時に判断してサポートしていく。また、必要であれば「係」として工程を単純作業にして担ってもらうことも考える。

表 3-1 作業分解の例（お好み焼きづくり）

<p><大項目> ① お好み焼きの具材を決める ② 材料の仕入れ ③ 具材の下ごしらえ ④ 焼く ⑤ 取り分ける</p>	
<p><小項目></p>	
<p>① 具材決め</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何故、お好み焼きをするのかストーリーを説明 ・何を入れるか話し合う ・メモを取る ・何人分を作るか予算を考慮しながら決める ・調理器具や道具を準備 <p>② 材料の仕入れ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーへ徒歩で行くのか、車で行くのか、参加者の様子で決める ・カゴを持つ ・カートを押す ・売り場を探す ・メモを見ながら材料をカゴへ入れる ・途中で追加材料を提案 ・メモの材料と籠の中の商品を照合 ・レジで支払い ・商品をビニール袋へ入れる ・ビニール袋を持つ <p>③ 具材の下ごしらえ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・袋から材料を取り出す ・主に野菜材料を水で洗い流す ・まな板と包丁を使って材料を適当に切る ・野菜切り器で材料を切る ・手指で材料を切る ・山芋を擦ってとろろ状態にする ・卵を割る ・お好み焼き粉、卵、山芋、水を混ぜる（以下、粉） <p>④ 焼く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホットプレートとコンセントをつなぐ ・ホットプレートの電源を入れる ・ホットプレートに油を流し入れる ・粉をお玉で掬う ・お玉からホットプレートに粉を入れて広げる ・豚肉を粉の隣で焼く ・粉の裏面に焦げ色が付いたらキャベツ等の野菜を載せる ・隣で焼いた豚肉を野菜の上に乗せる ・焼きそばを豚肉焼いていた場所に広げる ・焼きそばに水を掛ける ・豚肉の上に焼きそばを載せる（以下、上側） ・焼きそばを焼いていた場所に新しい粉を入れて広げる ・ヘラを用いて焼いていた上側を一気に持ち上げる ・新たらしい粉の上に持っている上側を引っくり返して新しい粉に載せる ・数分待つ ・ヘラで上から押し付ける ・おたふくソースを掛ける ・マヨネーズを掛ける ・鯉節を載せる ・青のりを掛ける 	<p>⑤ 取り分け</p> <p>焼き上がったお好み焼きをヘラで持ち上げ お皿に載せる 包丁でお好み焼きを半分に分ける 行き届いていない人の所へ持っていく</p> <p><分岐の例></p> <p>①—お好み焼きの具材を決める → 具材のイメージが難しい ↓ ・お好み焼きの写真を見ながら話をしてみる ・スーパーのチラシを見ながら考えてもらう</p> <p>②—材料の仕入れ → メモを見ながら材料をカゴに入れることが難しい ↓ ・買い物カゴを持ってもらう ・カートを押してもらう ・材料を手渡して確認 ・「お好み焼き」というフレーズを何度も会話に自然な形で入れていく ・必要な材料を店員に聞いて確認 ・財布を手にとって相手の視界に入れる ・「ビニール袋に入れる」を担っていただく</p> <p>③—具材の下ごしらえ → 何をどう準備してよいか判断できない ↓ ・包丁係→「まな板と包丁を使って材料を適当に切る」 ・野菜切り器係→「野菜切り器で材料を切る」「山芋を擦り下ろす」 ・直接手で→「手指で材料をちぎる」「もやし」の根を取る ・卵係→「卵を割る」 ・混ぜ係→「お好み焼き粉、卵、山芋、水を混ぜる」</p> <p>④—焼く → 手順が理解できない ↓ ・粉をお玉で掬ってホットプレートに落とす係 ・粉を広げる係 ・キャベツ等の野菜を手で掴んで載せる係 ・焼きそばに水を掛ける係 ・ヘラで上から押し付ける係 ・おたふくソースを掛ける係 ・マヨネーズを掛ける係 ・鯉節を載せる係 ・青のりを掛ける係</p> <p>⑤—取り分け → 取り分けることが苦手 ↓ ・④の得意な係を引き続き担ってもらう ・お好み焼きを一個／一人にする ・他の人が取り分ける指示をする ・お茶入れや箸を準備する ・監督</p>

⑥ 地域での自立や参加につなげる力（地域共生の視点）

お好み焼きづくりは無事に終わり、その日の昼食を利用者とスタッフ全員でお好み焼きを食べることができた。ここでは周囲から A 氏のお好み焼きづくりに称賛の声が集まり、その場をともにする仲間としての連帯感を生むことができた。A 氏も周囲とのつながりを実感するとともにとても喜び、自信を回復することができていた。今回をきっかけとして、より多彩な活動にも「仲間とともに」積極的に取り組まれることが期待できた。そのことを通じて地域へのつながりもさらに生まれると考えられた。

ポイント：活動の意味や成果をひとつの側面のみから捉えるのではなく、より大きな視点や複数の側面から意味づけて捉えることが重要。本人だけでなく、周囲にどのような影響をもたらしたのかを考慮すると、地域での自立や参加につながることを期待できる場合が多い。

⑦ 継続する力

今回の A 氏の事例について、スタッフ間で意図を共有しながら活動を進めたり、振り返りを重ねることで A 氏の次のお好み焼きづくりの場が実現するだけでなく、他の利用者の想いを実現するためのトレーニングになることが期待できた。また、今回の事例をケアマネジャーや家族とも共有することで、他とは異なる事業所の強みを理解してもらうことにつながることが期待できた。

ポイント：継続性を担保するためには、スタッフの共通理解が重要である。また、事業としての継続性につなげるためには、A 氏のような一つの事例をケアマネジャー等ともきちんと共有し、事業所の特徴を理解してもらうことが重要である。

事例 2 :

集会所でのゲートボールに再び参加することを目指している事例

【事例概要】

本事例は大腿骨頸部骨折を受傷後、集会所でのゲートボールに通いたいという思いがある 80 歳代の男性(B 氏)である。B 事業所を週 1 回利用しているが自宅では座って過ごしていることが多く体力が低下しており目標を達成できずにいる。本人の想いを理解し合意した目標を立て、課題解決に向けて介入したプロセスを以下に記す。

【基本情報】

- ・年齢・性別・要介護度：80 歳代 男性 要支援 1
- ・家族構成：妻と 2 人暮らし 長男は遠方に住み関わりはほとんどない

【生活歴】

- ・国家公務員として勤務していた
- ・47 歳 胃癌を患い、手術にて胃を 3/4 切除した
- ・49 歳 痛風を発症、逆流性食道炎も指摘され定期的に受診していた
- ・58 歳で退職 その後 3 年間は契約社員として仕事を行っていた
- ・78 歳 自宅玄関框で転倒し右大腿骨頸部骨折、人工骨頭置換術を施行
その後、リハビリにより杖歩行まで可能となり退院となった
- ・退院してからは活動性が低下し、疲れやすくなっており B 事業所の利用が開始となった
- ・現在の BMI は 15.9 本人も痩せてきていることを気にしている

① 本人の想いに共感する力

B 氏は開始当初から面接場面で集会所でのゲートボールに参加したいという想いを述べていた。

もともと B 氏は国家公務員として働いていた時に毎日同僚とお酒を飲んでから帰宅するほど社会的であった。退職後に現在の住まいへ転居してからは職場の同僚との交流もほとんどなくなり、町内の老人会などの交流もほぼないが、週 2 回のゲートボールを趣味として継続していた。

一方で、自分のことを自分で決め簡単には思いを変えない性格でもあり、周囲からの提案には理解したと話しても自分の想いと異なると行動は伴わない一面もあった。現在の生活では十分な活動量が得られていないことも理解されており、自身で対策を考えるがその対策が自身の状態像とはかけ離れていることが多い。

B 氏との面接場面で集会所でのゲートボールへ参加したいという想いを叶えるためにどのように目標を合意形成したかプロセスを次頁に記す。

～本人の想いに共感する力～

面接場面で B 氏が『ゲートボールに月 1 回は行きたい』という目標を立ててきたことへの合意形成のプロセス

(面接時期は夏 数日前に買い物に行き転倒したという報告を受けたうえでの面接場面)

B 氏「ゲートボールは調子が良くなったらまた行きたいと思っている」

職員「ゲートボールはどこでやっているのですか？」

B 氏「集会所。そこまで**転ばないで行ければいいな**と思っているんだ、前は行っていたからね。」

職員「なるほど。自宅からは 1.5 キロくらいありそうだし少し遠いですね。

ゲートボールをして往復歩くとなるとかなりの運動量だし、今の体の状況だと少しきつさもあるかもしれませんね。

疲れ具合によっては片道だけバスやタクシーを使うことも考えなくてはいけないかもしれませんね。

そういえば最近も歩いて買い物に行っていますか？」

B 氏「近くのコンビニか生協までは行っているよ。コンビニまでは近いから問題ないけれど生協までは大変だ。」

職員の疑問：現在の能力の限界点は？

職員「どのくらいの距離がありますか？」

B 氏「コンビニまでは 250m くらい、生協までは 1 Km くらいかな。生協まで行くと帰りは疲れてふらふらするね。」

職員の疑問：ふらふらするのはなぜか？

職員「たくさんの物を買ってリュックが重いせいもありますか？」

B 氏「生協は料理用でたくさんの食材を買うから重くなって帰りが危険だよ。」

職員の疑問：なぜ生協にこだわるのか？

職員「コンビニでは済ませられませんか？」

B 氏「コンビニは昼飯とかちよとしたものならいいけれど、**生協まで行かないと品物がそろわないんだ。**」

職員の疑問：なぜ安全に生協に行けないのだろう？

職員「確かにそうですね。生協の帰りは具体的に何が大変と感じていますか？」

B 氏「**リュックが重くて前かがみになって足が止まらなくなっちゃうんだ。**」

職員「手に買い物袋を持つよりはリュックの方がバランスをとりやすいし、何かあったときに反応しやすいですよ。

重さに耐えきれなくて踏ん張りがきかないんでしょうね。

職員の疑問：なぜ転倒したのだろう？

この前買い物の途中で転んだと聞いたけれど途中で休憩しながら歩いていましたか？」

B 氏「あの時は疲れもあって足がもつれる感じがしたんだ。」

途中で休めばよかったけれど、**疲れていたし暑かったから熱中症にならないよう早く帰りたくて休憩しなかった。**
もう少し買う量を少なくしたり短い距離ならいいんだろうな。」

職員の考察：対策をとる必要性は感じているが、職員が考える対策とB氏の考える対策にずれがある

職員の疑問：代替手段でも満足できるのか？

職員「確かに早く帰りたい気持ちもわかります。おっしゃるとおり買う量も歩く量も調整が必要そうですね。

生協の宅配を利用してみるのはいかがでしょうか？」

B氏「**買い物は俺の役割なんだ。妻は料理専門。だからできる限りは続けたいんだ。**」

職員の考察：買い物には**使命感**を感じている

職員の疑問：どのように課題を認識されているのか？

職員「続けるためには今後何が必要だと思いますか？家で体操とかしていますか？」

B氏「やっぱり歩く力だな。あと体力も。**家では何もしないで座っている時間が長いです。草取りからしてみるか。**」

職員の考察：家での活動量が増えるのはいいことだが、
草取りは転倒リスクが高い行為ということは認識されていない
自身で考える対策は現状のレベルに合っていない

職員「草取りも大事だけれど安全に外出ができるようにまずは自宅で動く量も増やしていかなければいけないし自宅でできる体操も見直しましょう。」

B氏「そうだな。」

職員「それならまずはここから3か月の目標は『買い物を安全に行える』でいかがでしょうか。

ゲートボールにも行きたいだろうけれどまずは近い距離から安定して歩く力をつける必要がありますし。

コンビニに行く回数を増やしたり商品をうまく活用したりも調整が必要そうですね。

春先までにしっかりと力をつけてまたゲートボールに行けるようになるといいですね。

そのためにこれからいろいろと一緒に考えていきましょう」

B氏「そうだな。」

ポイント：本人がどのような仕事をしてこられたのか、どんな立場で仕事に関わられたのか、何を大切に生きてきたかなどを把握することが本人の想いを理解するうえで重要である

ポイント：本人が叶えたい想いの背景、本人なりのこだわりを知る

② 本人の状態を把握する力

集会所でのゲートボールに参加するために現状では何ができていて何ができていないのかを工程ごとに分析した。B 氏の場合、『会場までの移動』において、集会所が自宅から 1.5 km 先と遠いため歩いていくことが困難である。

また、『ゲートボール中の動作』においてはボールを取る際にしゃがんだ状態から立ち上がろうとするとバランスを崩し転倒しやすいことが推察された。

ポイント：「ゲートボールに行けない」と評価するのではなく「一連のゲートボールに行くという活動のどの工程ができないのか」を把握する

③ 場を開発／用意する力

ゲートボール中の動作の安定を図る目的と通所サービス中に B 氏が輝ける場としての意味合いで実際場面を想定したゲートボールを行う場を作った。

ポイント：実際場面を想定した練習場面で行うことで、集会所でのゲートボールを再開する自信にもつながる

④ 場を整える力

職業歴から多くの部下に対して自分の決断をもとに指示を出し働いてきたことがうかがえる。通所サービス中にゲートボールを行う場面では B 氏が他の利用者に教える場作りをしたほうが B 氏はより生き生きと活躍できる場につながるのではないかと考え、場面づくりを行った。

ポイント：③で開発した場において本人が活躍するためにはどのような物理的・人的環境を用意したらよいか考え、場を設定する必要がある

⑤ 本人と場をつなげる力

思いを叶えるために何か対策を考えなくてはいけないことは B 氏も理解されているが、具体的な対応策については自身の状態からかけ離れているものを思いつかれることが多い。普段の生活の中で B 氏が行える自主トレーニングメニューや日中の過ごし方等を一緒に考える。

ポイント：本人の思いを叶えるために普段の生活の中で何ができるかを一緒に考え、対策をとる必要がある

⑥ 地域での自立や参加につなげる力

現状では会場まで歩いていくことが困難であるため思いをかなえられずにいる。しかし、移動手段の課題がクリアできれば地域での活動に参加できると考えられる。集会所でのゲートボールに通うことを想定した自主練習や移動手段の提案を行うことによりゲートボールだけでなく他の地域での活動にも参加しやすくなる可能性がある。

ポイント：本人の思いをかなえた後の活動の広がりも意識しながら地域での自立につなげる

⑦ 継続する力

集会所でのゲートボールは 12～3月の間、休業となる。目標を達成したのちも集会所のゲートボールが休止する冬期期間は活動性の低下が懸念される。そこで体力を落とさないように季節に合わせて日常生活の中での過ごし方を変える提案をすることで年間を通して体力を維持できれば、冬の間ゲートボールが休業しても春になれば再開できるというリズムで継続していくことが可能と考えた。

ポイント：本人の思いを叶えるだけでなく、長い目で継続していくために必要な支援を考える必要がある

事例 3 :

主婦として調理動作を再獲得した事例

【事例概要】

本事例は高次脳機能障害の影響で調理動作に介助が必要な 60 歳代の女性(C 氏)である。C 氏は漠然と病前のように主婦としての役割を果たしたいと思っていたが、具体的なところまでは思いを表出することが困難であった。そこで C 事業所の職員が思いを具体化し、家族との調整をしながら場を整え、思いを実現した。以下にそのプロセスを記す。

【基本情報】

- ・年齢・性別・要介護度：60 歳代 女性 要介護 2
- ・家族構成：夫と 2 人暮らしで長男は近隣に住んでいるが、長女は遠方で家庭を持っている
夫は不動産会社を経営している

【生活歴・病歴】

- ・結婚後、夫が経営する不動産会社の役員としてフルタイムで就労していた
- ・子供が生まれてからは繁忙期に夫の仕事を手伝う程度であった
- ・58 歳で市街地に転居 転居後は地域の体操教室や書道教室にも通っていた
- ・60 歳でくも膜下出血、脳梗塞を発症し、軽度の右片麻痺、注意障害・記憶障害のほかに行動を企画できない、2 つのことを同時に進行できないといった症状を呈し、急性期病院と回復期病院合わせて 1 年入院した
- ・退院直前の状態としては歩行時に方向転換でふらつく以外は概ね日常生活は自立していたが、入院中に転倒したことや危険認識の乏しさから転倒リスクが高いと判断され回復期病院入院中はセンサーマットを使用しており、車いすで移動していた
- ・退院直後より自宅環境への適応及び本人が望む家事動作獲得のため C 事業所の利用開始となる

① 本人の想いに共感する力

出産後は繁忙期に夫の仕事を手伝う程度で専業主婦として 2 人の子供を育てた。夫婦関係は独立していてお互いにそれぞれが好きなことを行い、一緒に出かけることはほとんどなかった。

関わる中で C 氏は楽天的で前向きな性格であることがみえてきた。

また、夫は入院中の様子を見ているとまた転ぶのではないかと、思いもしない行動をしたりするのではないかと不安から C 氏を日中 1 人で留守番させないために週 3 回通所サービスを使ってほしいと考えていた。C 氏ができることはしてほしいが、何よりも転ばず生活してほしいという想いであった。

ポイント：本人がどう生きてきたのか、何を大切に生きてきたのかを知ることは本人の想いに共感することにつながるため、生活歴の詳細な聴取は必要である

② 本人の状態を知る力

C氏は家事動作の中でも特に調理動作ができるようになりたいと考えていたことを職員が引き出した。この経緯については後述するが、『調理』という行為についてC氏の状態を以下にまとめる。

【調理】

- ・道具・材料の準備：効率よく道具を運ぶことができず何度も道具や材料をとりまく物の運搬は屋内であれば可能
- ・材料を切る：包丁は問題なく使える
野菜に泥が付いていても気にせずまな板にのせ切ってしまう
立って行う作業は20分が限界
- ・材料を調理し、味をつける：次に何を入れたらよいか手順で戸惑う
煮えていなくても気づかずそのまま盛り付けようとする
- ・盛り付け運ぶ：盛り付けた皿を持ったままの移動はできるが不安定さはあり

ポイント：「調理ができない」と評価するのではなく「一連の調理という行為のどの工程ができないのか」を把握する

③ 場を開発／用意する力

C氏は家事のどの行為を担いたいかははっきりとイメージできていない様子であった。そこでC氏が興味のあるものを具体的に想起することを目的に事業所の中でC氏と同じ片麻痺のメンバーを集めグループで調理活動を行った。その場は長年片麻痺で自宅でも調理をしているメンバーにリーダーを担ってもらい片手でもできることを視覚的に認識できる環境を設定した。

その後もC氏が座る場所の近くに調理の本を配置し、「待っている間この本でも読みませんか？」と声かけをする等家事動作を視覚的に認識する環境づくりを行った。C氏から「これを作りたい」「これならできるかも」という発言が聞かれるようになった。

ポイント：視覚的に情報として入りやすい環境を設定することで本人の想いを表出しやすくなる。

④ 場を整える力

通所サービス中の調理練習を行った際の様子を見てC氏が調理活動を行えないことは高次脳機能障害の、行動を企画する、2つ以上の行動を同時に遂行することが困難であるという症状が一因であると職員は判断した。一方で、自主トレーニングメニューは口頭で説明すればすぐに習得し習慣化できており学習効果は高いとみていた。これらのことから、通所サービス利用中に事業所内のキッチンで繰り返し練習を行うことより、病前から使い慣れている、また、ゆくゆくはそこでの調理を想定している自宅の台所で繰り返し練習を行うことが有効であるだろうと判断した。C氏と職員とで自宅へ行き、自宅で調理練習を行えるように計画した。

ポイント：強みを生かしながら本人の思いが実現できる場を調整する。

⑤ 本人と場をつなげる力

段階的に C 氏が達成度を高めていき、その様子を毎月のリハビリテーション会議で夫にもケアマネジャーにも理解してもらうことで夫の思いが変わっていった。夫に援助してほしい部分は具体的にリハビリテーション会議の場面で伝えていった。夫にはリハビリテーション会議の際に本人の調理したものを無理して食べていないか、味が変わっていないか等確認するようにした。

ポイント：家族やケアマネジャーに的確に本人の状態や何を援助して欲しいかを伝えることで本人の思いを実現する協力を得る。しかしこの際に家族の負担にならないように留意しなくてはならない。

⑥ 地域での自立や参加につなげる力

自宅での調理練習はまずは味噌汁を作ることから始め徐々に工程を増やしたり、品数を増やしたりして難易度を段階的に高めていった。

また、自宅で行う調理練習に同行する職員は当初、作業療法士であったが、達成度が高くなるにつれて介護職が同行し C 氏に手順を教えてもらう形をとったり、C 氏ひとりで作ってもらって 1 時間半後に職員が様子だけ確認しに行ったりと関わりをもつ職員を段階的に変化させた。さらに徐々に関わる時間を週 3 回から週 2 回、週 1 回と減らしていった。

このように段階的に自宅での調理活動が自立できるように関わり定着化を図り、最終的には主食、味噌汁、主菜、副菜を一度に作るできるようになった。また、仕事の関係で長男が同居するようになった時には夫と長男とメニューを分けて用意するといった応用的なこともできるようになった。

ポイント：通所サービスの終了を見据えながら関わる職員・時間・頻度、調理の難易度を段階的に高めることで本人は自信をつけ自立にいたった。

⑦ 継続する力

当初の目標であった調理活動が定着化した頃に遠方に住む長女は出産を間近に控えていた。C 氏から「次は孫守りができるように頑張らなきゃ」と意欲的な発言が聞かれた。最終的には目標を達成したことにより通所リハビリテーションの介入は終了となった。終了後 1 ヶ月経った頃に担当ケアマネジャーに様子を確認すると終了後も継続して自宅での調理活動を行えているとのことだった。

ポイント：自信をもって調理動作が行えるようになったことで、通所サービスを終了し、より応用的なことにも活動の範囲を広げる意欲にも繋がった。

4 結果と考察

本章(調査2)は、介護サービス事業所の職員が利用者の社会参加活動を適切に実施できるように必要な要素を明らかにし、人材育成のための研修のプロトタイプを作成することを目的とした。結果として、先進的な取組を牽引するモデルケース3例から7つの要素が抽出され、それらを実際の事例に当てはめて解説することで研修のプロトタイプとすることができた。以下、本調査の考察として、1) 事例の総括、2) 研修の到達目標と実施方法、3) 今後の課題の3点について論じる。

1) 事例の総括

モデルケースから抽出された7つの要素を実際の事例に当てはめてみると、特に「①本人の想いに共感する力」と「②本人の状態を把握する力」の2つが極めて重要な要素であると考えられた。例えば、事例1では家族からの情報だけではなく、利用者本人の口から直接想いを語ってもらうことで、より深く本人の想いに共感することを可能とし、さらに本人の望む活動を実現するための起点としていた。同時に、本人の想いに共感するプロセスを通じて、本人が見せる言葉遣いや表情等の反応から本人の状態像を把握する機会ともしていた。事例2や事例3では、詳細な聞き取りを行う場面や本人の思いを引き出せる環境を用意して本人の思いを理解し共感する場づくりを行っていた。また、事例1～3を通じて、上記のような本人と職員とのコミュニケーションによって、結果的に本人の活動に参加するための意欲が高まったり、自信を持ったりする様子もうかがえた。これは、2つの要素に関連して職員が「本人の視点」を徹底して本人と向かい合うことにより信頼関係が生まれ/強固になり、そのことが本人の後押しとなっていると考えられた。これらのことから、2つの要素は7つの要素の中でも土台、あるいは出発点ともいえる要素であることが各事例から明らかとなった。

一方、「③場を開発/用意する力」「④場を整える力」「⑤本人と場を繋げる力」の要素は、①と②を受けて、実際に作業や役割などの活動の場の設定を行い、利用者本人の参加を可能とするための分析的(技術的)視点が特に必要とされる要素と考えられた。その際、事例からは「柔軟性」が重要なポイントになることがうかがえた。例えば、事例1では、お好み焼きの作業工程を細かく分析するとともに、本人がどの段階で参加が難しい様子がみられたとしても、そこから別の作業や役割へ移れるようにいくつもの分岐をシミュレートしていた。事例2や事例3では、本人の思いを叶えるためにどの行為のどの部分をどう行いたいのか合意できるポイントを共有し、その合意したポイントに向かうために本人の強みを生かしながらいかに場をつくり整えるかが考えられていた。これらのことから、③④⑤の要素については、単なる作業分解等の分析だけではなく、①と②を踏まえ、利用者本人の状況に応じて柔軟性を持って取り組むことの重要性が示唆された。

さらに「⑥地域での自立や参加につなげる力(地域共生の視点)」では、ひとつの活動のプロセスや成果を、目の前の利用者本人に視点を合わせながらも、より広い視点、例えば他の利用者やスタッフ、家族あるいは地域の人とどのような相互関係があったのか(あるのか)/影響を与えあっているのか(与えるのか)、本人を取り囲む環境を見渡して分析することが重要なポイントと考えられた。このことは、例えば事例1ではお好み焼きづくりを通じて事業所内での「仲間づくり」を促進し、そこから「仲間とともに」地域での活動に繋げていこうという明確な狙いがあったことに代表される。ほかにも、事例2では、集会所でのゲートボールという活動にとどまらず他の地域活動への参

加へと幅を広げられる可能性がある。事例 3 では、家族の協力を得ながら段階的に通所サービス職員の関わりを変化させることで本人の思いを叶え本人が望む生活ができるようになり、本人は自信をつけより応用的なことへ挑戦できた。

最後に、「⑦継続する力」に関しては、各事例からひとつの活動をイベント的に単発で終わらせるのではなく、いかに継続的な取組として継続するのか、あるいは事業所として継続性を担保するのかといった観点の重要性がうかがえた。そのために、事例 1 では OJT を組み合わせてスタッフ間での情報共有を行い、特定のスタッフによる活動の実施という属人的な範囲を超えて再現性を高めるとともに、他の利用者の場合にも応用できるようにスタッフ教育を行っていた。事例 2 ではその場限りの対応策を考えるのではなく、年間を通してどう生活していくかということを見据えて関わるのが重要であることが示された。また、事例 3 から介入当初から通所サービスの終了を見据えて関わることで地域につないだ後も自信をもって地域で活躍できることが示された。

以上のことから、本調査においてモデルケース 3 例より抽出、作成された 7 つの要素は、各事例を通して、①②という土台となる要素のもとに、③④⑤の分析的（技術的）な要素が加わり、さらに⑥⑦というより広く社会的な要素により構成されることが確認された。これらの要素を本調査で示したように事例的に提示することにより、介護サービス事業所の職員が利用者の社会参加活動を実施するための研修プロトタイプとして十分に活用されることが期待できると考えられた。

2) 研修の到達目標と実施方法

今回作成した、事例に基づいた研修プログラムは、あくまでもプロトタイプとしての試案である。そのため、具体的に研修プログラムに落とし込むにはさらに検討すべき事項が多くある。一方で、今回のものを解説事例を用いたファーストステップの研修として考えた場合、到達目標として少なくとも以下の 3 点が考えられる。

- (1) 利用者の社会参加活動を実施するためには少なくとも 7 つの要素があることを知る
- (2) 7 つの要素を事例に基づいて学ぶことで、具体的なイメージを持って理解する
- (3) 特に「①本人の思いに共感する力」と「②本人の状態を把握する力」について実践できるようになる

これらの到達目標を達成するための研修の実施方法については、特に模擬事例を通して本人の思いを探るケーススタディ研修等を加えて実施することが有用であると考えられる。また、B 事業所、C 事業所で行った事例検討会では、その後に職員から「気づくことが多かった」「有意義な時間だった」「普段無意識に行っていることを意識化できた」という感想が寄せられた。ケアの振り返りはケアの質を高める、ケア職の仕事への満足度を高める上で重要であるため、研修の要素として座学などの OFF-JT と、ケア職の事例の振り返りといった OJT の組み合わせが必要と考えられる。

3) 今後の課題

前述したように、今回作成したのは研修プロトタイプであり、これを実際の事業所の職員を対象に実施していくためには具体的なカリキュラム等の詳細を検討・追加していく必要がある。しかし、今回介護サービス事業所の職員に求められる7つの要素が明らかとなったことは、今後ますます拡大することが予想される利用者からの社会参加活動に対するニーズに応える最初の一步となるものであろう。引き続き、研修プログラムの充実・検証・拡大が期待される。

第4章 多様な介護サービス事業所における社会参加活動の利用者にとっての効果を含む社会的価値の評価モデルの構築及び検証（調査3）

1 目的

本章(調査3)では、介護サービス利用者の就労を含む社会参加活動の取組みが生み出す利用者にとっての効果に関する社会的価値の評価モデルの構築、および検証を目的に調査を行なった。

2 調査の対象と方法

1) 調査の対象

調査1の対象事例の中から、就労を含む社会参加活動の取組みを行っている以下の事業所を対象とした。

- 事例① 医療法人社団 東北福祉会 せんだんの丘（デイケア）
- 事例② 株式会社 創心會（デイサービス）
- 事例③ 株式会社 ユニティ（デイサービス）
- 事例④ NPO 法人 つどい（デイサービス）
- 事例⑤ NPO 法人 シニアライフセラピー研究所（デイサービス）
- 事例⑥ 株式会社 アール・ケア（デイサービス）
- 事例⑦ 社会福祉法人 新生寿会 グループホーム東五反田（グループホーム）
- 事例⑧ 株式会社 浪漫（小規模多機能居宅介護）

2) 調査方法

(1) 評価モデル構築のための調査（9月～12月）

- ・ 1) の8事例の事業所のWebサイトや資料、文献調査
- ・ 事業所訪問による代表者、担当者へのヒアリングおよび利用者の活動の様子、就労や社会参加の場の見学（事例1、2、5、6、7）

(2) 評価モデル構築（9月～12月）

以下について主に文献、事例調査を実施。

- ・ 介護保険事業における社会的インパクト評価
- ・ 高齢者の社会参加について
- ・ 介護保険事業における指標・測定方法

(3) 評価モデルの検証と改善（12月～2月）

- ・ 検討委員会での協議（12月25日）
- ・ 慶応義塾大学経営管理研究科准教授 後藤励氏へのヒアリング（1月9日、29日）

上記の過程で、当初3類型にしていた評価モデルを2類型に集約し、初期アウトカムの整理を行った。加えて、評価モデルごとに以下を実施した。

① 評価モデル1

評価モデルの妥当性を確認するために以下を行なった。

■ 実施日時

- アンケート実施前のロジックモデル、指標・測定方法、アンケート票についてのヒアリング調査（1月23日オンライン）
- アンケート調査（2月1日～2月15日）
- アンケート実施後のフィードバック調査（2月26日オンライン）

■ 対象者

- 事例③ 株式会社 ユニティ 代表取締役 濱田桂太郎
- 事例④ NPO 法人 つどい 理事長 川村美津子
- 事例⑧ 株式会社 浪漫 代表取締役社長 黒岩尚文（本事業委員）
- 医療法人 真正会 本部付部長 岡野英樹（本事業委員）

*アンケート調査の実施はグループ法人である霞が関南病院デイホスピタル

② 評価モデル2

評価モデルの妥当性を確認するために以下の対象者に対し、ロジックモデル、指標・測定方法、アンケート票についてのヒアリング調査を実施した。

■ 実施日時 2月12日 オンライン

■ 対象者

- （事例6）株式会社アール・ケア 取締役 小馬 誠士
- 岡山市保健福祉局医療政策推進課医療福祉戦略室 日下裕介氏

3 調査内容

1) 評価モデル構築のための調査（巻末資料 P. 73～P.81 参照）

- (1) 対象事例ごとに、社会的インパクト評価におけるロジックモデルを使用し、取り組みにより出現している/出現が期待される成果を受益者（利用者、介護保険事業所、職員、利用者の家族、地域）ごとに整理。
- (2) ヒアリングにて、成果出現の因果関係や長期アウトカムにつながる事業所の理念や活動目的等を確認し、対象事例別のロジックモデルを確定。

2) 評価モデル構築

(1) ロジックモデル

対象事例別のロジックモデルの特徴を比較・分析した上で、ロジックモデルを以下の2つに類型化した。

表 4-1 評価モデル

評価モデル1 地域との連携により利用者の自立支援、社会参加、就労を可能にしているモデル ● 事業所が介護福祉施設の枠を越え、地域社会のハブ的組織になり、利用者の自立支援、社会参加、就労の取り組みが地域活性化につながっているケースもある（②、④、⑤）。 ● 利用者の介護度は軽度～中度	①せんだんの丘
	②創心會
	③ユニティ
	④つどい
	⑤シニアライフセラピー研究所
	⑦グループホーム東五反田
	⑧浪漫
	評価モデル2 事業所の先進的な取り組みにより利用者の自立支援、社会参加を可能にしているモデル ● 利用者の介護度は軽度～重度

その上で、評価モデル1、2の一般的なロジックモデルを作成した。

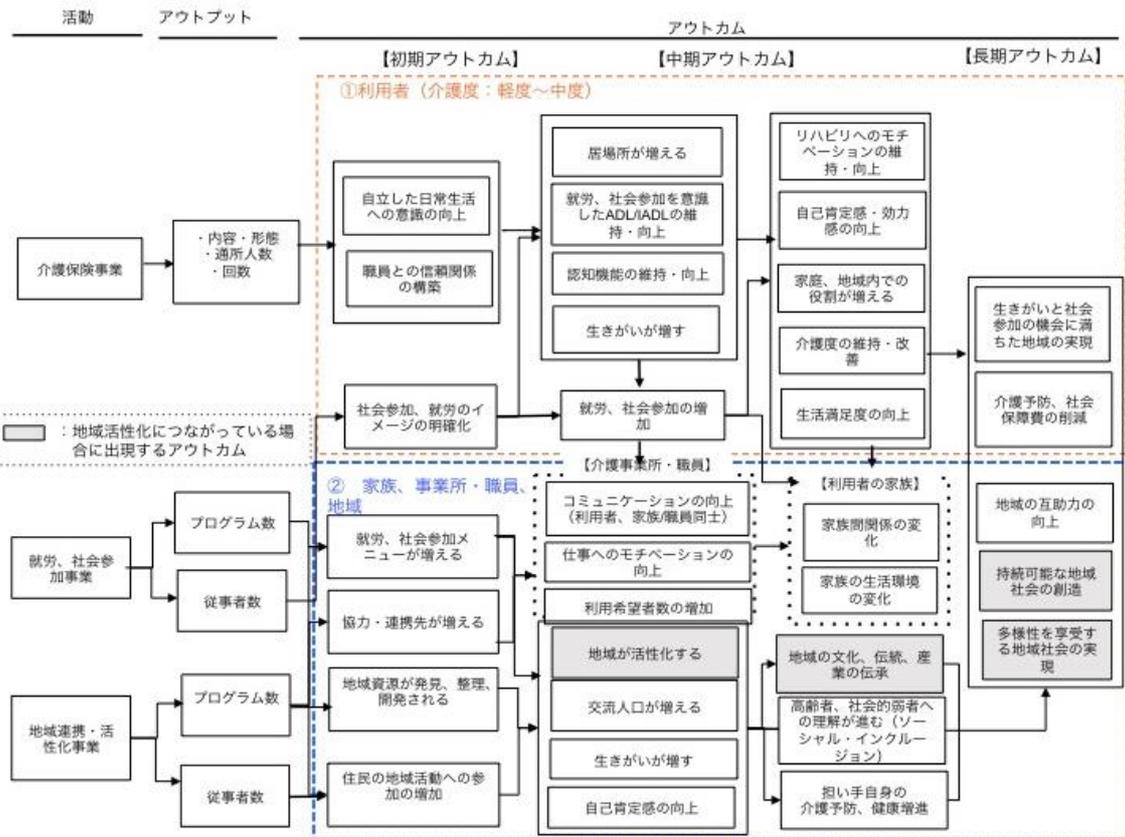


図 4-1 評価モデル1 ロジックモデル

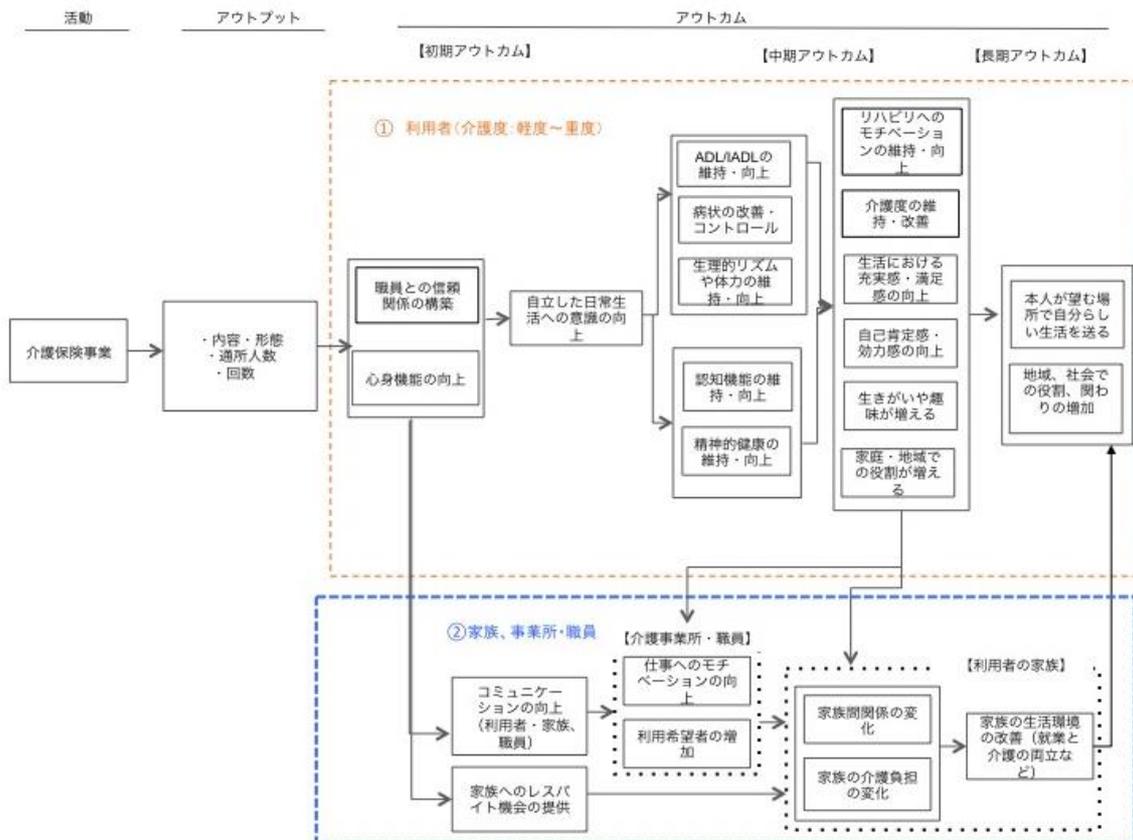


図 4-2 評価モデル 2 ロジックモデル

(2) 指標・測定方法

評価モデル 1,2 のアウトカムに対応する指標・測定方法を検討した。介護保険事業所で使用されている既存の指標・尺度等を充当するとともに、独自設問の設計を行った（青字は評価モデルの検証、改善作業の結果、追記・修正したもの）。

表 4-2 評価モデル 1 指標・測定方法

受益者	アウトカム (*グレーのセルは地域活性化につながっている場合に出現するアウトカム)	指標	測定方法	評価デザイン	評価デザイン作成上の検討内容
①利用者	自立した日常生活への意識の向上	身の回りのことはできる限り自分でやろうという意識の向上<独自設問>	アンケート調査(利用者)	前後比較	
	職員との信頼関係の構築	信頼関係があるか<独自設問> 信頼関係の裏付けとなる個別具体的な項目の追加	アンケート(利用者、事業所)	前後比較	
	社会参加、就労のイメージの明確化	自分が関わる地域活動、仕事をイメージできるか<独自設問>	アンケート(利用者、事業所)	前後比較	
	居場所が増える	気軽集える場、参加できるグループや活動の数の変化<独自設問>	アンケート調査(利用者)	前後比較	
	就労、社会参加を意識したADL/IADLの維持・向上	事業所で使用している項目・尺度 バーサル・インデックス FIM など	アンケート調査(事業所)	前後比較	データ入手が可能か
	認知機能の維持・向上	事業所で使用している項目・尺度 長谷川式簡易知能評価スケール(HDS-R)など	アンケート調査(事業所)	前後比較	データ入手が可能か
	生きがいが増す	生きがい意識尺度(kigai-9)	アンケート調査(利用者)	前後比較	
	就労、社会参加の増加	就労者数 社会参加プログラムへの参加者数	アンケート調査、ヒアリング(事業所)	前後比較	データ入手が可能か
	リハビリへのモチベーションの維持・向上	リハビリを行うことへの意欲、やる気の向上<独自設問> バイタリティ・インデックス	アンケート(利用者、事業所)	前後比較	
	自己肯定感・効力感の向上	ローゼンバーグ自尊感情尺度	アンケート調査(利用者)	前後比較	
	介護度の維持・改善	介護度の変化 日常生活における活動量や生活空間の変化<独自設問> ライフスペースアセスメント	アンケート調査(事業所)	前後比較	データ入手が可能か
	家庭、地域内での役割が増える	家庭、地域内でできることの数<独自設問>	アンケート調査(利用者、家族)	前後比較	
	生活満足度の向上	EQ5D-5L	アンケート調査(利用者)	前後比較	
②地域	就労メニューが増える	プログラム数、連携企業、施設、メニュー数	アンケート調査、ヒアリング(事業所)	前後比較	
	協力・連携先が増える	協力・連携団体数	アンケート調査、ヒアリング(事業所)	前後比較	
	地域資源が発見、整理、開発される	利用者や地域住民の取り組みにより発見された、新たに生み出された地域資源(人的ネットワークやコミュニティ、人々が集まる場など)があるか<独自設問>	アンケート調査、ヒアリング(事業所)	前後比較	
	住民の地域活動への参加の増加	・地域活動の数、参加者数の変化<独自設問> ・参加する地域活動の数、頻度の変化<独自設問>		前後比較	
	地域が活性化する		アンケート調査、ヒアリング(事業所)	前後比較	
	交流人口が増える	移住者など地域外の人を受けける行事や仕組みなどの数の変化<独自設問>		前後比較	
	生きがいが増す	生きがい意識尺度(kigai-9)	アンケート調査(地域住民)	前後比較	
	自己肯定感の向上	ローゼンバーグ自尊感情尺度	アンケート調査(地域住民)	前後比較	
	地域の文化、伝統、産業の伝承	事業所で行っている地域の文化や伝統、産業などを、普及・教育・共有するような取り組みの数の変化<独自設問>	アンケート調査、ヒアリング(事業所)	前後比較	
	高齢者、社会的弱者への理解が進む(ソーシャル・インクルージョン)	地域住民の高齢者支援パワー尺度	アンケート調査(地域住民)	前後比較	
	担い手自身の介護予防、健康増進	地域の活動に関わるようになったことによる変化(体、頭を使う機会が増えたなど)<独自設問>	アンケート調査(地域住民)	前後比較	
	介護予防、社会保障費の削減	介護度等から試算した金額		前後比較	データ入手が可能か
	生きがいと社会参加の機会に満ちた地域の実現		事業所ヒアリング	前後比較	
	地域の互助力の向上		事業所ヒアリング	前後比較	
	持続可能な地域社会の創造 多様性を享受する地域社会の実現		事業所ヒアリング	前後比較	
③介護事業所・職員	コミュニケーションが向上する(利用者、家族/職員同士)	コミュニケーション頻度<独自設問> 事業所内、職員同士での社会参加、就労による利用者の成果の共有度合い<独自設問>	アンケート調査(事業所・職員)	前後比較	
	仕事へのモチベーションが向上する	仕事に対する楽しさ、やりがいの変化<独自設問>	アンケート調査(事業所・職員)	前後比較	
	利用希望者数の増加	利用希望者数	アンケート調査(事業所)	前後比較	データ入手が可能か
④利用者家族	家族間関係の変化	関係性尺度 Zarit介護負担者尺度短縮版	関係性尺度 ・Zarit介護負担者尺度短縮版の平均値は14点(8-40点)	前後比較	
	家族の生活環境の変化	家族の介護時間の変化とその割合<独自設問> 自宅における見守り、介助時間の変化、生活における変化<独自設問> 精神的・肉体的負担感の増減<独自設問>	・60%が介護時間に変化なしと回答 ・は33%が精神的な負担が減ったと回答 ・31%が肉体的な負担が減ったと回答 ・回答者の50%が「自分の時間が増えた」と回答	前後比較	

表 4-3 評価モデル 2 指標・測定方法

受益者	アウトカム	指標	測定方法	評価デザイン	評価デザイン作成上の検討内容
①利用者	職員との信頼関係の構築	信頼関係があるか<独自設問> 信頼関係の裏付けとなる個別具体的な項目の追加	アンケート調査(利用者)	前後比較	
	心身機能の向上	事業所で使用している項目・尺度	アンケート調査(事業者)	前後比較	データ入手が可能か
	自立した日常生活への意識の向上	身の回りのことはできる限り自分でやろうという意識の向上<独自設問>	アンケート調査(利用者)	前後比較	
	ADL/IADLの維持・向上	事業所で使用している項目・尺度 バーサル・インデックス FIM など	アンケート調査(事業者) 事業者ヒアリング	前後比較	データ入手が可能か
	病状の改善・コントロール	事業所で使用している項目・尺度	アンケート調査(事業者) 事業者ヒアリング	前後比較	データ入手が可能か
	生理的リズムや体力の維持・向上	事業所で使用している項目・尺度	アンケート調査(事業者) 事業者ヒアリング	前後比較	データ入手が可能か
	認知機能の維持・向上	事業所で使用している項目・尺度 長谷川式簡易知能評価スケール (HDS-R) など	アンケート調査(事業者) 事業者ヒアリング	前後比較	データ入手が可能か
	精神的健康の維持・向上	事業所で使用している項目・尺度 高齢者用うつ尺度短縮版 老年期うつ病評価尺度(GDS15) WHO-5精神的健康状態表など	アンケート調査(事業者) 事業者ヒアリング	前後比較	
	リハビリへのモチベーションの維持・向上	"リハビリを行うことへの意欲、やる気の向上<独自設問> バイタリティ・インデックス"	アンケート(利用者、事業者)	前後比較	
	介護度の維持・改善	介護度の変化 日常生活における活動量や生活空間の変化<独自設問> ライフスペースアセスメント	アンケート調査(事業者)	前後比較	データ入手が可能か
	生活における充実感・満足度の向上	EQ5D-5L	アンケート調査(利用者)	前後比較	
	生きがいや趣味が増える	生きがい意識尺度(ikigai-9)	アンケート調査(利用者)	前後比較	
	自己肯定感・効力感の向上	ローゼンバーグ自尊感情尺度	アンケート調査(利用者)	前後比較	
	家庭、地域内での役割が増える	家庭、地域内のできる回数<独自設問>	アンケート調査(利用者、家族)	前後比較	
	本人が望む場所で自分らしい生活を送る		インタビュー(利用者、家族)		
地域、社会での役割、関わりの増加		インタビュー(利用者、家族)			
②介護事業所・職員	コミュニケーションが向上する(利用者、家族/職員同士)	コミュニケーション頻度<独自設問> 事業所内、職員同士での社会参加、就労による利用者の成果の共有度合い<独自設問>	アンケート調査(事業者)	前後比較	
	仕事へのモチベーションが向上する	仕事に対する楽しさ、やりがいの変化<独自設問>	アンケート調査(事業者)	前後比較	
	利用希望者数の増加	利用希望者数	アンケート調査(事業者)	前後比較	データ入手が可能か
③利用者家族	家族へのレスパイト機会の提供	関係性尺度 Zarit介護負担者尺度短縮版	アンケート調査orインタビュー	前後比較	
	家族間関係の変化	家族の介護時間の変化とその割合<独自設問>	アンケート調査(家族)	前後比較	
	家族の介護負担の変化	自宅における見守り、介助時間の変化、生活における変化<独自設問>	アンケート調査orインタビュー	前後比較	
	家族の生活環境の改善	精神的・肉体的負担感の増減<独自設問>	アンケート調査orインタビュー	前後比較	

3) 評価モデルの検証と改善

(1) アンケート票の作成 (巻末資料 P. 82~P.100 参照)

上記の指標・測定方法をもとに、社会参加の取り組みの受益者として設定した①利用者、②介護事業所、③介護事業所の職員、④利用者の家族、⑤地域住民、それぞれへのアンケート票を作成した。

(2) アンケート調査の実施

評価モデル 1 に関しては、モデルとしての有用性、妥当性を確認するために、評価のモデルの検証と改善における調査に協力いただいた 4 つの事業所 (事例 3、4、8、霞が関南病院デイホスピタル) 実際にアンケート票への回答にご協力いただき、以下の検証を行った。

- ① アンケートの設問内容は理解し易いものか
- ② 設問数は妥当か
- ③ 採用した尺度、測定方法は汎用性の高いものか (事業所にて一般的に使用されているものか)
- ④ アウトカムの測定に必要なデータの収集は行われているのか、またそのデータは外部への提供が可能なものであるか

なお、評価モデル上の評価デザインは前後比較としているが、今回は時間的制約もあり、振り返り調査での実施となり、長期アウトカムの一部は調査対象外、また一部のアウトカムについては現状確認のみとなった。

(3) アンケート調査結果概要 (巻末資料 P. 103~P.117 参照)

- ① 利用者アンケート
 - ・ 回答者数 : 18 名 (問により一部欠損あり)
 - ・ 年齢層 : 60-80 代、平均年齢は 78 才
 - ・ 男女比 : 同数
- ② 介護事業所
 - ・ 回答者数 : 4 事業所
- ③ 介護事業所の職員アンケート
 - ・ 回答者数 : 20 人 (問により一部欠損あり)
 - ・ 年齢層 : 20-60 代、平均年齢は 40 才
 - ・ 男女比 : 男性 35%、女性 65%
- ④ 利用者家族アンケート
 - ・ 回答者数 : 16 人 (問により一部欠損あり)
 - ・ 年齢層 : 40-80 代、平均年齢は 65 才
 - ・ 男女比 : 男性 31%、女性 69%
 - ・ 利用者との同居率 : 81%
- ⑤ 地域住民アンケート
 - ・ 回答者数 : 17 人 (問により一部欠損あり)
 - ・ 年齢層 : 30-70 代、平均年齢は 65 才
 - ・ 男女比 : 男性 26%、女性 74%
 - ・ 利用者との関係性 : 37%がご近所さん

表 4-4 評価モデル 1 の回答結果概要

受益者	アウトカム (*グレーのセルは地域活性化につながっている 場合に出現するアウトカム)	指標	回答結果概要	評価デザイン
①利用者	自立した日常生活への意識の向上	身の回りのことはできる限り自分でやろうという意識の向上<独自設問>	・94%が「向上した」と回答	振り返り調査 (活動参加前)
	職員との信頼関係の構築	信頼関係があるか<独自設問>	・94%が「あると思う」と回答	現状確認
	社会参加、就労のイメージの明確化	自分が関わる地域活動、仕事をより明確にイメージできるか<独自設問>	・50%がイメージが「できる」と回答 ・55%がイメージがより明確に持てる様になったと「思う」と回答(事業所職員)	現状確認 振り返り調査 (一年前)
	居場所が増える	気軽に集える場、参加できるグループや活動の数の変化<独自設問>	・59%が「増えた」と回答	振り返り調査 (活動参加前)
	就労、社会参加を意識したADL/IADLの維持・向上	事業所で使用している項目・尺度 バーサル・インデックス FIM など	・2事業所がデータがある、提供が可能と回答	振り返り調査 (活動参加前)
	認知機能の維持・向上	事業所で使用している項目・尺度 長谷川式簡易知能評価スケール(HDS-R)など	・2事業所がデータがある、提供が可能と回答	振り返り調査 (活動参加前)
	生きがいが増す	就労者数 生きがい意識尺度(ikigai-9)	・平均値は33点(45点~9点)	現状確認
	就労、社会参加の増加	就労者数 社会参加プログラムへの参加者数		評価対象外
	リハビリへのモチベーションの維持・向上	リハビリを行うことへの意欲、やる気の向上<独自設問>	・59%が「向上した」と回答(利用者) ・59%が「向上した」と回答(事業所職員)	振り返り調査 (活動参加前)
	自己肯定感・効力感の向上	ローゼンバーグ自尊感情尺度	・平均値は26点(40点~10点)	現状確認
	介護度の維持・改善	介護度の変化	・事業所からのデータ入手は不可	振り返り調査 (活動参加前)
	家庭、地域内での役割が増える	家庭、地域内でできることの数<独自設問>	・62%が「増えた」と回答(利用者) ・50%が「できることが増えた」と回答(利用者家族) ・50%が地域での活動の数、頻度は「変わらない」と回答(利用者家族)	振り返り調査 (活動参加前)
	生活満足度の向上	EQ5D-5L	・平均値は0.723(1.000~-0.025)	現状確認
②地域	就労メニューが増える	プログラム数、連携企業、施設、メニュー数	・2事業所が「増えた」と回答	振り返り調査 (一年前)
	協力・連携先が増える	協力・連携団体数	・社会参加、就労メニューを実施するための協力・連携先は2事業所が「増えた」と回答 ・地域活動、行事を実施するための協力・連携先は3事業所が「増えた」と回答	振り返り調査 (一年前)
	地域資源が発見、整理、開発される	利用者や地域住民の取り組みにより発見された、新たに生み出された地域資源(人的ネットワークやコミュニティ、人々が集まる場など)があるか<独自設問>	巻末資料参照	振り返り調査
	住民の地域活動への参加の増加	・地域活動の数、参加者数の変化<独自設問> ・参加する地域活動の数、頻度の変化<独自設問>	・3事業所が「変わらない」と回答 ・47%が「増えた」と回答(地域住民)	振り返り調査
	地域が活性化する			評価対象外
	交流人口が増える	移住者など地域外の人を受け入れる行事や仕組みなどの数の変化<独自設問>	2事業所が「増えた」、「変わらない」と回答	振り返り調査 (一年前)
	生きがいが増す	生きがい意識尺度(ikigai-9)	平均値は29点(45点~9点)	現状確認
	自己肯定感の向上	ローゼンバーグ自尊感情尺度	平均値は26点(40点~10点)	現状確認
	地域の文化、伝統、産業の伝承	事業所で行っている地域の文化や伝統、産業などを、普及・教育・共有するような取り組みの数の変化<独自設問>	3事業所が、行っている地域の文化や伝統、産業などを普及・教育・共有するような取り組みの数に「変化なし」と回答	振り返り調査 (一年前)
	高齢者、社会的弱者への理解が進む(ソーシャル・インクルージョン)	地域住民の高齢者支援パワー尺度	平均値は37点(50-10点)	現状確認
	担い手自身の介護予防、健康増進	地域の活動に関わるようになったことによる変化(体、頭を使う機会が増えたなど)<独自設問>	62%が「会話が増えた」と回答	振り返り調査
	介護予防、社会保障費の削減	介護度等から試算した金額		評価対象外
	生きがいと社会参加の機会に満ちた地域の実現			評価対象外
	地域の互助力の向上			評価対象外
	持続可能な地域社会の創造			評価対象外
多様性を享受する地域社会の実現			評価対象外	
③介護事業所・職員	コミュニケーションが向上する(利用者、家族/職員同士)	コミュニケーション頻度<独自設問>	・80%が利用者との会話の頻度が「増えた」と回答。 ・25%が利用者の家族との会話の頻度が「増えた」と回答。 ・69%が職員との会話の頻度が「増えた」と回答。	振り返り調査 (活動参加前)
	仕事へのモチベーションが向上する	仕事に対する楽しさ、やりがいの変化<独自設問>	75%が仕事に対する楽しさ、やりがいが「増えた」と回答	振り返り調査 (活動参加前)
	利用希望者数の増加	利用希望者数	全ての事業所が「増えた」と回答	振り返り調査 (一年前)
④利用者家族	家族間関係の変化	関係性尺度 Zarit介護負担者尺度短縮版	・関係性尺度の平均値は22点(32-8点) ・Zarit介護負担者尺度短縮版の平均値は14点(8-40点)	現状確認
	家族の生活環境の変化	家族の介護時間の変化とその割合<独自設問> 精神的・肉体的負担感の増減<独自設問>	・60%が介護時間「変化なし」と回答 ・33%が精神的な負担が「減った」と回答 ・31%が肉体的な負担が「減った」と回答 ・50%が「自分の時間が「増えた」と回答	振り返り調査 (活動参加前)

(4) アンケート票、指標の改善

アンケート調査の結果を受けて、以下を行った。

- ・ 指標として使用できる具体的な尺度を明示（表 4－2、4－3 指標・測定方法の青字箇所参照）
- ・ アンケートの設問内容の改定案を検討（表 4－2、4－3 指標・測定方法の青字箇所および巻末資料 P.101～P.102 参照）

4 結果と考察

- 1) 今回の調査対象事例の多くは、利用者の社会参加、就労を可能にするために積極的に地域との関係づくりを行っている点特徴的であった。介護サービスを利用している状況下において地域と接点を持つことが、サービス修了後に自宅、地域に戻った後も社会参加、自立した生活を継続するために重要な要素であると考えられる。
- 2) 社会参加、就労の取り組みにおいて成果を生み出している事業所の中には、障害者やひきこもりの若者、発達障害児など、社会的弱者の社会参加、就労への支援を行ない、その枠組みの中で高齢者の社会参加、就労を実現させている事例も見られた。また、評価モデル 1 のロジックモデルの長期アウトカムに記載した「持続的な地域社会の創造」、「多様性を享受する社会の実現」といった、地域社会、共生社会の実現におけるプロセスにおいて、高齢者の社会参加、就労を捉えている事業所もあり、高齢者の社会参加においては介護サービスの枠組み、福祉領域を越えた発想や取り組みが必要であると考えられる。
- 3) 評価が事業所の過度な負担にならないよう、ADL、IADL、認知機能、精神的健康等の確認は、事業所が使用しているデータを充当するという設計にした。データの指標や尺度は複数存在するため、文献調査およびヒアリング調査にて事業所にて使用が確認されているものを本調査の指標・測定方法として複数、掲載した。なお、アンケート調査協力事業所においても、独自の尺度により測定を行っている、上記に関してのデータを継続的に収集していない、事業所も存在していることから、収集および外部へのデータの提供が困難なケースも多くあると想定される。データの測定、提供方法については更なる検証が必要である。
- 4) 本調査においては利用者の介護度などは指定せず、認知症の人も対象としたが、アンケート調査協力事業所より、認知症の人の場合は以下の懸念が挙げられた。
 - アンケートの質問内容の理解が難しい
 - 質問を理解する、回答する上で職員のサポートが必要である場合があり、その介入が回答の信頼性に影響を与える可能性がある認知症の人への調査実施の場合は、質問内容および実施方法に更なる検討が必要であると考えられる。また、利用者のデータの活用範囲については認知症の人に限らず、慎重に判断する必要がある。
- 5) 本調査においては、アンケート調査協力事業所と接点のある人を「地域住民」とし、高齢者の社会参加が地域に及ぼす成果の測定を試みた。今後、地域、社会へのインパクトをより広く測るには、環境経済学の評価手法にある非使用者価値/使用者価値の観点から、事業所とは直接関係のない地域住民に対する成果の調査、評価にも踏み込めるとよいのではないかと考える。それにより、介護事業所による社会参加の取り組みがドーナツ状に広がっていくといったスピルオーバー効果を測ることができると考える。
- 6) 今後、高齢者の社会参加、就労の取り組みによる社会的価値をより広く検証するには、事業所のある地域および利用者が介護サービスの利用を修了した後の生活拠点となる地域の調査が必要と考えられる。
- 7) 今後、介護保険サービス利用時間外での高齢者の地域における社会参加、就労がもたらす成果の検証を行う場合は、上述の地域住民の再定義・範囲設定、地域調査の必要性に加え、指標や測定方法についても福祉領域

を越えた更なる検討が必要であると考えられる。

第5章 得られた示唆と課題

本事業は、認知症のある人を中心に、広く介護サービス利用者の特性や能力を活かした就労を含む社会参加、活躍の場づくりを介護サービス事業所が推進できる環境整備を目的として3つの調査を行い、その成果を本報告書及び手引きとして整理した。本章では、いくつかの視点から示唆と今後の課題をまとめておく。

1 地域共生の視点

1) 自立と尊厳を支えるケアの視点

- 利用者の自立と尊厳を支える支援の一環として、家庭・事業所・法人グループ及び広く地域での社会参加活動（参加・ハタラク）を提示できるケアの視点が不可欠である。
- 地域で利用者が役割を持ち、活躍することができるためには、利用者本人の機能や役割の回復とともに、本人／家族／スタッフ／地域の人がつながり、対話を深め、社会参加に位置づける力が重要となる。

2) 今後の課題

- 「お世話型」のケアを行う事業所では、社会参加活動を展開すれば人手不足になるという懸念が生じがちであるともいわれ、改めて自立と尊厳を支えるケア、地域共生の視点の介護サービス事業所における浸透は喫緊の課題である。
- 他方、先進事業所の聞き取りでは、社会参加は利用者本位、介護保険の理念からすると当然のことにもかかわらず、引き続き保険者等の理解が十分でないことも指摘され、介護保険サービスの一環としての参加・ハタラク場づくりについて、より明確に示していく余地がある。

2 参加・ハタラクの開始／継続のための環境整備

1) まずやってみる

- まだ取り組んでいない事業所では既存の人員体制で新たな活動を始めることが負担になるのではないかとの不安がみられるが、利用者の参加・ハタラク、事業所として地域における参加を推進しているところでは、職員の満足度も高まっている。
- 利用者の生きいきとした生活を実現するためのメニューのひとつとして、まず地域での社会参加活動をやってみることが、利用者にとって効果をもたらすのみならず、職員のモチベーション向上にもつながる可能性がある。開始にあたってハードルを高くせず、まずやってみて、利用者や職員等のフィードバックを得ながらすすめることよい。

2) 事業所を越えた地域全体としての継続性

- 介護サービス事業所の地域での社会参加活動は広がりを見せているものの、通所系サービス等が中心となっており、先進的な取組みが地域全体に展開する動きはまだあまりみられていない。ただし一部の地域においては「はたらく」を手がかりに介護福祉サービス事業所と地域の企業等及び自治体が協働する動きも生まれている。

- 本来は介護サービス事業所の種別を越えて本人の思いや能力の発揮が社会参加活動をつうじて促されることとどまらず、介護サービスの時間内に介護サービス事業の一環として行われる社会参加活動ではなく、その時間外あるいはサービス終了（休止）後も継続してはたらくことができる環境が望ましく、そうした地域での活動や社会企業家による事業のビジネスモデルにも注目する必要がある。
- 介護サービス事業所においては、特に利用者にとっての効果を中心に活動の社会的価値の見える化が取り組みの開始及び継続にとって重要であり、本事業における仮説ロジックモデルの構築及びその検証を基礎資料として、評価のポイントを絞り、実用化を検討する余地がある。ただし、効果の検証には、事業所における評価データの収集・保存の習慣づけが不可欠となる。

3) 今後の課題

- 厚生労働省からの事務連絡（「若年性認知症の方を中心とした介護サービス事業所における地域での社会参加活動の実施について」平成 30 年 7 月 27 日付）の引き続きの周知に加え、通所系サービスや小規模多機能型居宅介護等にとどまらず、入所系サービス等における事例の収集及び展開方法の整理が必要となる。その際、入所施設における居室内の清掃や洗濯物たたみ等のような入居者の生活に連続した活動については、有償の社会参加活動とみなすべきではないのではないか等という意見もあり、こうした区別についても今後考え方を検討することが求められる。
- 介護サービスの利用者にとって社会参加活動がどのような効果をもたらすのかについては、さらに実態把握を進めるとともに評価のあり方を検討することが期待される。
- 1 つの介護サービス事業所や法人グループにとどまらず、地域全体として取り組みを広げている事例やその基盤となる仕組み、また介護サービス事業所以外（時間外・サービス休止・終了後）での介護サービス利用者（あるいは利用していた人）の参加・ハタラク場となっている活動や事業の事例収集とともに、介護サービスからそうした活動へと移行することによる効果の検証も取り組みの継続性・持続可能性を高めるうえでも意義がある。

3 職員の人材育成と経営者のリーダーシップ

1) 社会参加活動を支える職員に求められる力

- 利用者の社会参加活動等を可能にするためには、職員に①本人の想いに共感する力、②本人の状態を把握する力、③場を開発／用意する力、④場を整える力、⑤本人と場を繋げる力、⑥地域での自立や参加につなげる力（地域共生の視点…前述）、⑦継続する力の 7 つが求められることがわかった。

2) 人材育成のあり方

- 7 つの力を身に着けるためには、Off-JT と OJT の組み合わせが不可欠であり、特に実際の支援事例の振り返りを通じた研修が有効と考えられる。

- 事業所のある地域、利用者が住む地域の資源を知り、イメージすることが社会参加活動の推進に繋がる。介護保険サービスの利用を終了した後の生活をイメージできるような研修が求められる。
- また、介護サービスにおいて 1 対 1 ではなく 1 対多数の構図を前提として、集合体におけるダイナミクス等を理解し活用できる支援手法を身に着けることも効果的であると考えられる。

3) 今後の課題

- 既存の各種研修プログラム等も検証しつつ、上記 7 つの力を身に着けるために効果的なカリキュラム等の構築・展開が求められる。
- 他方、社会参加活動の展開には経営者や施設長の信念と強いリーダーシップが必要であることがわかっており、2 に示した効果検証に加え、法人・事業所の意思決定者、現場管理者への研修のあり方の検討も重要となる。

資料編：

調査2

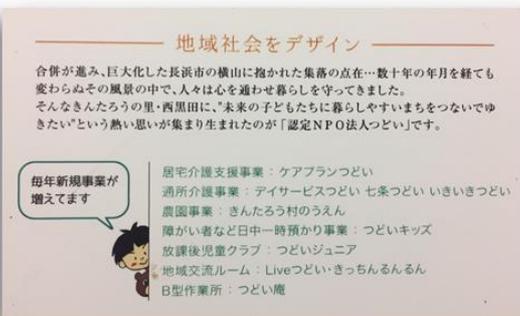
■資料2-1 シャドウウィングレポート

シャドウウィング 対象者 1人目



川村 美津子 氏

滋賀県長浜市の酒屋を営む家にて、一人娘として生まれ育つ。
地元の公立小学校、中学校を卒業し、農学高校に進学、農業関係の全国大会にも出場し、成績は常に上位だった。
その後、高校の進路担当者の勧めがあり滋賀銀行に就職。5年間勤め、消防士の夫と出会い結婚する。その後は、実家の酒屋を経営したが、近所にディスカウントストアが立ち、経営不振となり閉店。
介護保険施行時期だったこともあり、2000年にヘルパーを取得、その後通信制の大学に通い社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士等の資格を取得する。
その間、長浜市の社会福祉協議会にて高齢者の体操教室の担当、長浜市役所にて介護予防ケアマネジメント業務、接骨院で介護支援専門員として勤務する。
その時期に、母親が認知症になりデイサービスと居宅介護支援事業所を立ち上げる。その後、現在の事業を地域にニーズに従いながら様々な事業を実施。
地元からの要望や困りごとがあれば、すべて自分が担うという強い意志が見られる。



果たしている機能

元々、酒屋を営んでいたことから地域には知り合いが多い。
現在は様々な事業を運営しているが、動機は家族や地域、あるいは他人の困りごとの解決のためである。
介護事業については、母の介護問題から生まれ、障害者支援事業、子育て支援事業も同様である。「金太郎村のうえん」や、「総出事業」、現在チャレンジしている椎茸ハウスは「廃業するから使い道はないか?」と尋ねられたことからスタートした。
つまり、川村氏が地域のハブ的人材であり、地域の様々な困りごとが川村氏の元に相談が来るようになる。その上で、日頃から関わりを持つ人たち(障害者や高齢者)の活躍の場が開拓できないかと発想を繋げている。

それがどのように身に付けられ継承されているか

川村氏は、元々酒屋を経営しており、幼少期から多様な人たちとのコミュニケーションを図る機会が多かった。抜群のコミュニケーション能力は、それが影響しているものと考えられる。(本人は三方よし精神と語っていた)その中で、地域の困りごとや課題を耳にし、さらに関心を持つ能力が備わっている。(サザエさんの三河屋的存在)川村氏も事業を拡げていくなかで「経営的感覚」で職員に指導をしていた時期もあった。その時期は、経営が立ち行かなくなってきており非常につらかった。しかし、「職員が楽しければ売り上げも上がる」と発想を転換したことにより事業も安定してきた。それからは、他人の夢を育てるという役割に徹している。その結果、職員の離職率は少なく、事業も安定している。

キーワード

あんたのお陰や ・ たのむで ・ 感謝しているで

シャドウイング 対象者 2人目



野々村 光子 氏

滋賀県 蒲生郡(東近江の隣町)にて生まれ育つ。家族は両親と弟の4人暮らし。父は大手企業(京セラ)に勤務しており、ほとんど自宅には戻ってこなかった。母は滋賀県職員であった。幼少時代に母が障害者作業所を自宅で始めたことから、自宅には常に障害者があり、共に生活していた。小学校の人権学習の時間に共に暮らしている障害者が学校に来たことで、その人達が「障害者」だということを知った。その後は幼稚園教諭になることを決め、大学に進学し地元の幼稚園の内定をもらっていた。その時、母親からの紹介で地元の障害者施設へボランティアに行く機会があり「精神障害者」に出会う。うつ病である本人が「また就職したい」という気持ちに憧れて、内定を断り作業所に就職する。その後、京都府の労働局に転職し障害者のハローワークの仕組みづくり、草津市の行政職員を経験し、障害者就業・生活支援センターの制度が施行されたことに伴い現在の業務に従事することになった。

社会福祉法人 わたむきの里 福祉会
東近江圏域 働き・暮らし応援センター “Tekito-”
東近江圏域 障害者就業・生活支援センター

支援ワーカー
センター長 野々村 光子
精神保健福祉士

〒523-0015 滋賀県近江八幡市上田町1288-18
 前出産業ビル 2F
 TEL 0748-36-1299
 FAX 0748-36-1344
 携帯:090-9544-4590
 e-mail:watamukinosato@etude.ocn.ne.jp



Tekito-

生活、就労…全てその人の24時間の中に存在するもの。
 だからライフスタイルはその人のもの。
 だったら、そのスタイルがその方にとってちょうど**適当**である方がよい。
 そして、そんな24時間の積み重ねの毎日に地域の風が通り過ぎその風を感じられるゆとりが持てる**テキト**ーさが存在するならもっとうまい…と思います。

【広辞苑 応援センター】

果たしている機能

一貫して「ハタラク」というキーワードから地域への働きかけが生まれてきている。「ハタラク」ためには、本人が働けるような支援をすることであり、働ける地域環境をつくるということである。また、利用者のナラティブや過程を大切にしながらも、地域を取り巻く環境を十分に理解しようとしている。「ひきこもりは地域の宝、ひきこもっている力は凄い」と繰り返し発言しながら、地域を耕してきた。企業に訪問の際には、まずはトイレを必ず借りるという。理由(は)トイレの清掃を自社職員が実施しているか、アウトソーシングしているか企業の特徴を把握し特徴を掴む。また、企業へは「障害者の人を雇用してくれませんか？」と伝えない。「地域の企業として生き残っていきましょう！」と伝えている。企業が上で障害者が下という関係ではなく、同位置ということである。とにかく地域の噂(ロコミ)を大切にしている。

それがどのように身に付けられ継承されているか

幼少期から障害者と共に生活していたこと障害者を「少し〇〇が苦手な人」という考え方をもっている。野々村氏が所属している障害者就業・生活支援センターとは、主に手帳を所持している障害者の就業支援と就業する上で生活の支援を提供する相談機関である。野々村氏は2002年から障害者就業・生活支援センターに勤務しているが、当初から「手帳を持っている人」だけの支援には当たっておらず、ひきこもり者の就職支援も実施していた。一方、地域には「働き手」が不足しており、企業へは「あなたの会社を守る」という意識を持ち紹介していった。これらの意識は「地域愛」から生まれるものではないかと考えている。現在は、これらの実績が地域から認められ、地域の多様な困りごとが野々村氏に寄せられるようになっていく。野々村氏は一見関係の無いような情報も、マッチングを果たし、楽しくおかしく対応している。その姿に引き寄せられるように多くの住民や企業、専門職が野々村氏の元に集まっているように感じた。

キーワード

おもろいやん ・ ほなまたな ・ いつもありがとな

■滋賀県長浜市 NPO 法人つどい及び東近江市 働き・暮らし応援センターTekito-シャドウウィングスケジュール

1日目

スケジュール	事業内容	項目
9:00	NPO 法人つどい 川村氏と合流	①
9:30	事業全体の説明	②
11:00	きんたろう農園の訪問	③
	ディサービス つどい 訪問	
	ディサービス 七条 つどい 訪問	
14:00	昼食	—
15:00	事務所での作業	④
18:00	終了	—

2日目

スケジュール	事業内容	項目
9:00	合流	—
9:30	事務所での作業	—
10:30	しいたけ農園 訪問	⑤
11:30	終了	—
13:00	東近江市 働き・暮らし応援センターTekito 野々村氏と合流	—
13:30	百済寺 訪問	⑥
14:00	CHAKKA 訪問	⑦
15:00	わたむきの里 福祉会 訪問	⑧
16:30	被後見人 訪問	⑨
18:00	終了	—

3日目

スケジュール	事業内容	項目
9:00	合流	—
9:30	薪遊庭 訪問	⑩
10:30	西川 動物病院 訪問	⑪
11:30	野菜花 昼食	—
13:00	終了	—

■シャドウウイング報告書

○1 人目 川村 美津子氏

(プロフィール)

川村氏は、長浜生まれ、長浜育ち。実家は酒屋を経営しており、一人娘として育つ。地元の小学校、中学校を卒業し、農学高校に進学、農業関係の全国大会にも出場し、成績も常に上位だった。その後、高校の進路担当教員の勧めがあり滋賀銀行に就職。5年間勤め、消防士の夫と結婚する。その後は、酒屋を経営し売り上げを上げていった。近所にディスカウントストアが立ち経営不振となり店を閉める。

その後、平成12年ヘルパーを取得、その後通信制の大学に通い社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士等の資格を取得する。その間、長浜市の社会福祉協議会にて高齢者の体操教室の担当、長浜市役所にて介護予防ケアマネジメント業務、接骨院で介護支援専門員として勤務する。その頃、母親が認知症になりデイサービスを立ち上げる。その後、現在の事業を地域にニーズに従いながら様々な事業を実施。その間、ビジネスパートナーの死でうつ病になった時期もあった。

地元からの要望や困りごとがあれば、すべて自分が担うという強い意志が見られ、チャレンジ精神も旺盛である。

○2 人目 野々村 光子 氏

(プロフィール)

滋賀県 蒲生郡出身。両親と弟の4人暮らしの家で育つ。父は大手企業（京セラ）に勤務しており、ほとんど自宅には戻ってこなかった。母は滋賀県職員であった。

幼少時代に母が障害者作業所を自宅で始めたことから、自宅には常に障害者がおり、共に生活していた。小学校時に、人権学習の時間に共に暮らしている障害者が学校に来たことで、その人達が「障害者」だということを知った。

「福祉」の道には進まず、大学卒業後は幼稚園教諭になることを決め、地元の幼稚園の内定をもらっていた。母親からの紹介で地元の作業所へボランティアに行く機会があり「精神障害者」に出会う。うつ病である本人が「また就職したい」という気持ちに憧れて、幼稚園を断り作業所に就職する。その後、京都府の労働局に転職し障害者のハローワークの仕組みづくり、草津市の行政職員を経験し、障害者就業・生活支援センターの制度が施行されたことに伴い現在の業務に従事することになった。

・川村 美津子 氏

10月29日（1日目）

① 合流後、車中での会話

週に2日ほど川村氏の事業所の手伝いをしてきている地域おこし協力隊が任期を終えることになったが住む家がないことについて、知り合いの不動産仲介業者に相談している。検討して頂けることになり「あなたに話せて幸せや」と発言。

以前、川村氏は酒屋を経営、不動産仲介業者は以前ガラス店を経営していた。そのときからの知り合いで相談した。場合によっては自分が保証人にもなるということもある。

「いきあたりばちりで、なんとかなる！働けないのに働けないのは長浜市の損失や！」とのこと。組織を超えた人脈が豊富ある。

② 事業全体の説明

「人の夢は断らない、叶えたい。」「生産性は業務にあたっている職員が楽しければあがっていく。」と繰り返し、口にしていた。

説明は、地元で美容師として働く「きりはた氏（30歳頃）」も同席した。川村氏が利用する美容室（3回目）で勤務している。川村氏から呼びかけがあり参加したとのこと。きりはた氏に「なぜ参加したいのか」聞いたところ「地域のために何かしたいという思いはあったが、具体的に何をしてもよいか分からなかった」とのことであった。自分の仕事の延長線上で活動したいとのことであった。

③ 各事業所の訪問

介護保険事業である通所介護事業所「ディサービスつどい」、通所介護事業所「七条つどい」「いきいきつどい」「きんたろう農園」の訪問。

職員、利用者と家庭の話を中心にしている。とにかく、本人の身体的な課題などは話題にあげていなかった。ハタラクについて尋ねたところ「働けるくらいの意欲がなければ自宅では暮らせない。多様な人たちの夢を叶えるために100の仕事を作りたい。」と返答。

また、ボイストレーニング教室も実施しており、それは地域住民との関係性を構築するためのツールだと言う。「体調が良くなると人生が開かれる。開かれる過程において仲間が生まれる。生血が通った地域づくりを実施したい」とのことであった。

また、障害者の作業所の開設理由については「特別支援学校の卒業生が3箇所の作業所を断られた。これはやるとしかないと考えた。採算が取れるかは、考えておらず一生懸命で周りを変えるしかないと考えた。

ディサービスの隣に蔵があり、それを地域住民と共にDIYを実施。また、子どもの合宿などを展開している。また、総出事業で実施している蓮の花プロジェクトでは、大手飲食店などとの契約が果たせている。これも、「お釈迦さまや神様へ感謝」と発言されている。

常に感謝しながら、自分が楽しみながら業務にあたっている姿が印象的であった。

④ 事務所へ戻る

請求書を作成しながら、スタッフと以下の会話をしている。自分の家庭の課題をおもしろく伝えながら全体で共有している。

書類の締め切りの件や年賀状、事業所の改装の件など、とにかく様々な人に電話や相談をしている。言葉の端々には「あんたが言うならしゃあないやろ。」「いつも感謝してるで。」「おおきに。ほな、たのむで。」など、感謝を伝える言葉が多く感じられた。

10月30日（2日目）

⑤ しいたけ農園 訪問

共に地域づくりをしている知り合いの伝手で、しいたけ農園を購入した。そこには、元上司（銀行時代）が関わっており、これも仏様のお陰だと言っていた。

現地では、元銀行員であった元上司が作業していた。元上司とは、今後の事業計画について会話をしていた。

しいたけは、間違って収穫してしまっても商品価値が下がらない、そのために認知症や障害者にとって取り組みやすい事業だと話していた。

⑥ 百済寺訪問

ナカポツセンター、生活困窮者自立支援事業で関わりを持っている利用者が作業にあたっている。利用者ともとても仲が良く、敬語ではなく友達感覚でコミュニケーションをとっている。百済寺は観光名所で、草刈りや枯れは掃除の事業を受託して業務に関わりをもっている。

⑦ Chakka 訪問

使用済みのろうそく（お寺、結婚式場など）と菜の花エコプロジェクトで実施している燃やしたもみがらを活用し、着火剤を作っている。当日は、作業が行われておらず見学のみであった。

⑧ わたむきの里福祉会 訪問

酒井施設長からわたむきの里福祉会の取り組みについてレクチャーを受ける。

地域に会社があることで、何ができるかを考えて実践をしている。また、地域全体を見渡して課題と利用者をどのようにつなぐことができるのかを考えるようにしている。

⑨ 被後見人訪問

37歳男性の自宅に訪問。被後見人に対し、弟のように接している。数年前までは、家族と同居し虐待を受けていたが現在は自立している。

10月31日（3日目）

⑩ 薪遊亭訪問

元大工であり、地域活動に関心を持った村山氏が経営する薪遊亭に訪問。利用者のことについて近況を話している。また村山氏が新しく購入した機材について「こんなん買って薪遊亭がつぶれてしまったらかなわんわー！たのむでー！」と話している。

⑪ 西川動物病院 訪問

5人程度の利用者と共に草むしりの仕事を実施している。

ナカポツセンターの職員と会話をしながら、お金の使いかたについて話している。野々村氏から「寄り添いではなく、場合によっては向き合いことが大切である」ということを教わった。

○2 人が果たしている機能、コンピテンシー

川村氏が果たしている機能は、地域、あるいは他人の困りごとから解決のための事業へとシフトしている。介護事業についても、母の課題から生まれており、障害者支援事業、子育て支援事業も同様である。その事業を運営する中で多様な人たちとの関わりから、川村氏が地域のハブ的人材となり、地域の様々な困りごとが川村氏の元に相談が来るようになる。そこで、日ごろから関わりを持つ人たちの活躍の場が開拓できないかと発想を繋げている。

一方、野々村氏については一貫して「ハタラク」というキーワードから地域への働きかけが生まれてきている。また、利用者のナラティブやハタラクまでの過程を大切にしながらも、地域全体を取り巻く環境を十分に理解している。「ひきこもりは地域の宝、ひきこもっている力は凄い」と繰り返し発言しながら、地域を耕してきた。企業に訪問の際には、まずはトイレを必ず借りるといふ。理由はトイレの清掃を自社職員が実施しているか、アウトソーシングしているかで企業の特徴を把握するという。また、企業へは「障害者の人を雇用してくれませんか？」と伝えない。企業へは「地域の企業として生き残っていきましょう！」と伝えている。企業が上で障害者が下という関係ではなく、同位置にあるものである。とにかく噂を大切にしている。

○それがどのように身に付けられ継承されているか

川村氏は、元々酒屋を経営しており、幼少期から多様な人たちとのコミュニケーションを図る機会が多かった。また、地域の困りごとや課題を耳にすることが多かったのだと考える。（サザエさんの三河屋的存在）

事業を拓げていくなかで「経営的感覚」で職員に指導をしていた時期もあった。その時期は、経営が立ち行かなくなってきており非常につらかった。しかし、「職員が楽しければ売り上げも上がる」と発想を転換したことにより事業も安定してきた。それからは、他人の夢を育てるという役割に徹している。その結果、職員の離職率は少なく、事業も安定している。

野々村氏は、幼少期から障害者と共に生活していたことが影響していると考え。障害者を「少し〜が苦手な人」というマインドがセットされており、本質を理解しているのだと考える。ただ、一方で、地域の企業への対話で「あなたの会社を守る」という意識は郷土愛から生まれるものではないかと考えている。これらの実績が認められ、地域の多様な困りごとが野々村氏に寄せられるようになっていく。野々村氏は一見関係の無いような情報も、マッチングを果たし、楽しくおかしく対応している。その姿に引き寄せられるように多くの住民や企業、専門職が野々村氏の元に集まっているように感じた。野々村氏と同様な実践を行えるものは少ないかもしれないが、企業側にとって、障害者やひきこもりが、必要な働き手だと認識をさせていることは一般化されていた。

○全体の振り返り

認知症の人が働くことを企業に相談した場合、一般企業側は慈善的な業務を与えられるという感覚が大きいのではないだろうか。野々村氏の取り組みは、委託事業は一般的な価格よりも高く設定している。このようなことが成り立つには、仕事として、業務を全うすることが大切である。ただし、場合によってはできなかった場合でも、きちんと企業を向き合い対話し続けたことにより、継続が出来ている。

つまり、利用者の社会参加を推進できる職員には、地域の力を知り、地域に不足している部分を見極めることが必要だと考える。

一方で、ハタラクことは「自立支援」に寄与することを忘れてはならない。そのために本人の力や思いを知ることは大切であり、そのことを企業側にも伝えることが必要である。しかし、関係性が構築されていない状況で、自立支援のみを伝えても企業は難色を示すと思われる。そのために、地域の凹凸を知り、そこに必要なリソース（利用者）としてコミットしていくことが大切である。企業側からすれば、川村氏、野々村氏はビジネスパートナーなのかもしれない。2人の実践からは、「地域をより良いものにしたい」つまり、地域共生の視点があり、その結果、自立支援の観点から「ハタラク」ことに繋がっていることを強く感じた。

調査3

■資料3-1 事例のロジックモデル

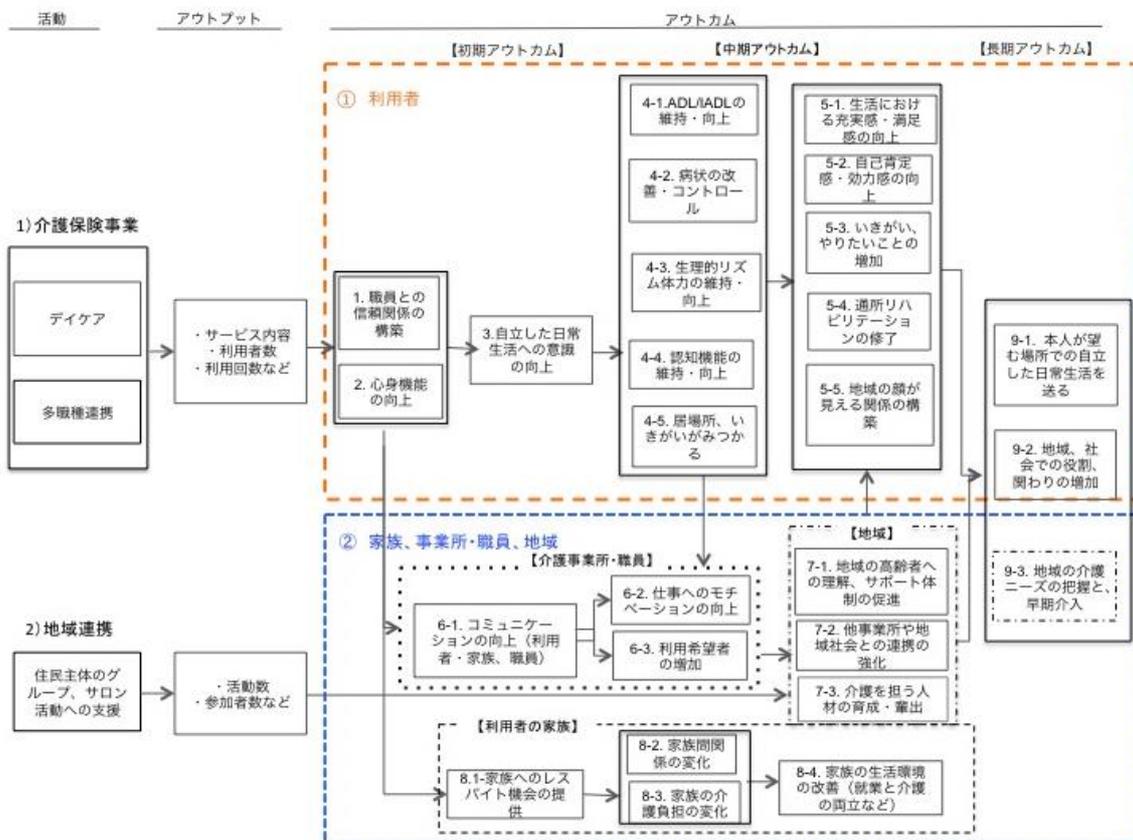
対象事例が取り組んでいる利用者の社会参加、就労の取り組みにおいて出現している（出現が期待される）成果を図示したものである。説明文においては、各事業所の特徴的な取り組みや成果について言及した。

なお本調査では、各事業所が展開している介護保険事業の中から一事業を基軸に、利用者の社会参加が生み出す成果をロジックモデルにて図式化したが、中期～長期アウトカムの実現にはその他の介護保険事業（訪問看護、居宅介護支援等）との連携による生み出されている場合が多い。

事例① 医療法人社団東北福祉会 せんだんの丘 デイケア

同法人のデイケアでは、利用前の段階において、一人ひとりの「やりたい生活行為」、「やるべき生活行為」は何かを整理し、利用開始後は、その向上のために訪問機能を強化し、実生活場面におけるアセスメントと指導を実施している。自立支援に向けた計画実施において、多職種でアセスメントを行い、情報・場面共有を行うことにより、初期・中期アウトカムに記載してある成果の出現がみられると考えられる。

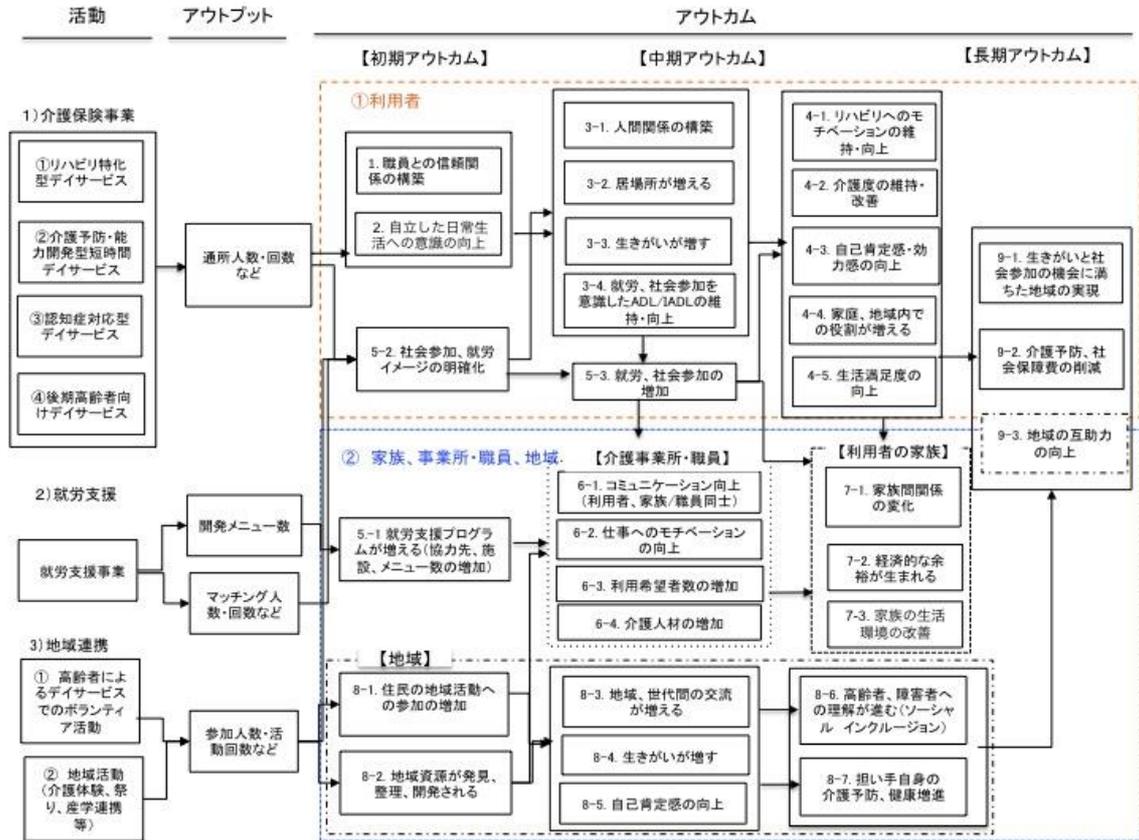
法人事業としては、介護予防通所介護および日常生活支援総合事業において地域の高齢者が元気な時期から関わりをもち始め、住民主体のサロンやグループ活動による高齢者の社会参加支援も行っている。これらの活動は利用者がデイケア修了後に地域に戻った際の居場所、社会参加の場にもなっており、地域との顔が見える関係づくり（5-5）となり、地域で安心して暮らすことができるといった長期アウトカムにおける成果につながっていくと期待できる（9-1、9-2）。また、元気な高齢者も含め、地域の高齢者に広くリーチしているため、利用者にとどまらない、地域への波及的な成果も考えられる（7-1~7-3、9-3）。



事例② 株式会社創心會 デイサービス ロジックモデル

同法人は、就労も含め、社会参加への支援を重要な要素としたケアを実施している。コンセプトの異なる4つのデイサービスでの、利用者の要望と課題に合わせたサービスの提供により、初期、中期アウトカムに記載されている成果の出現が考えられる。系列企業として就労継続支援B型事業所やリハビリケアセンター内に就労訓練の場としてのパン工房も持っており、初期段階から社会参加、就労のイメージが描き易いといえる(5-2)。就労や復職により一定程度の報酬を得られる様になり、家計に余裕が生まれるという成果が出ているケースもある(7-2)。

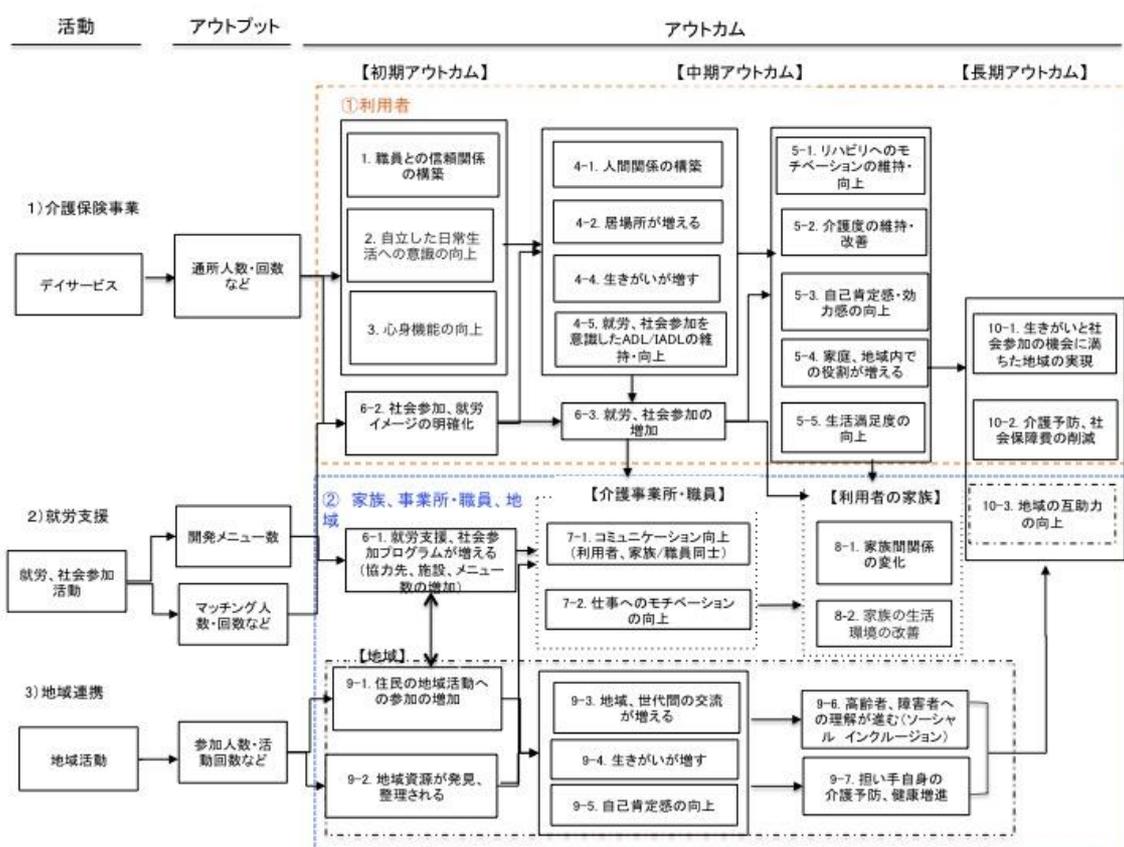
「開かれた施設づくり」、「利用者を地域の生活主体者と捉えたまちづくり」という思想のもと、地域住民や学校などと積極的に接点を持つ地域活動を展開し、地域への波及的成果も大きいと考えられる(8-1~8-7)。地域活動が、法人の理念に共感する介護人材を地域から生み出すことにもつながったケースもある(6-4)。積極的な社会参加支援、地域連携が長期アウトカムとして設定されている成果につながる事が期待される(9-1~9-3)。



事例③ 株式会社ユニティ デイサービス

「社会参加」を利用者（中重度者を含む）の思い、やりたいことが実現できる状況を創ることと広く捉え、役割創出、活躍できる場づくりに取り組んでいる。リハビリは個人の嗜好や趣味、それぞれの生活環境における自立した日常生活を意識した個別具体的なプログラムが行われている。これらのプログラムが自立、社会参加を意識したADL/IADLの維持・向上につながっていると考えられる（4-5）。

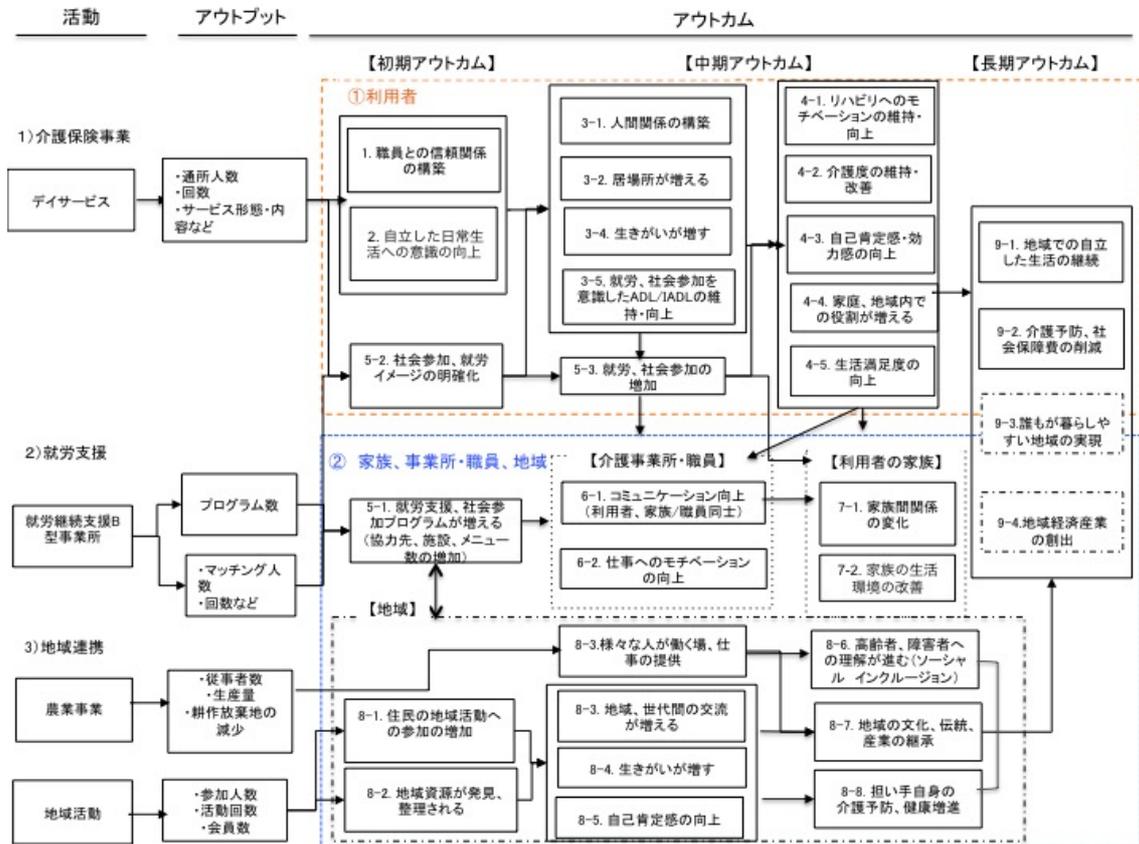
次のステップとして、利用者が地域で役割を持ちながら自分が望む生活を継続できるようになることを視野に、施設内外で様々な社会参加トレーニングを実施している。施設外でのトレーニングは企業や地域、学校など連携のもとに行っており、利用者自身への成果に止まらず、広く地域への波及的成果を生み出すことが期待できる（9-1～9-7）。デイサービス利用日以外にもボランティアとして地域のために活動するようになる利用者もあり、デイサービスでの活動が家庭、地域内での居場所や役割が増えることにつながっていると考えられ（4-2、5-4）、長期アウトカム（10-1～10-3）につながることを期待できる。



事例④ NPO 法人 つどい デイサービス

地域に産業を生み出したいという想いのもと、様々な人々（障害者、引きこもりの若者、高齢者など）が働くことのできる場、仕事づくりを行なっている。耕作放棄地での地域伝統の蓮栽培や農作物の加工品製造などの事業において、デイサービスの利用者も社会参加、働く機会を得ている。左記の活動をとおして、地域での役割を得て（4-4）、地域での自立した生活につながっていると考えられる（9-1）。

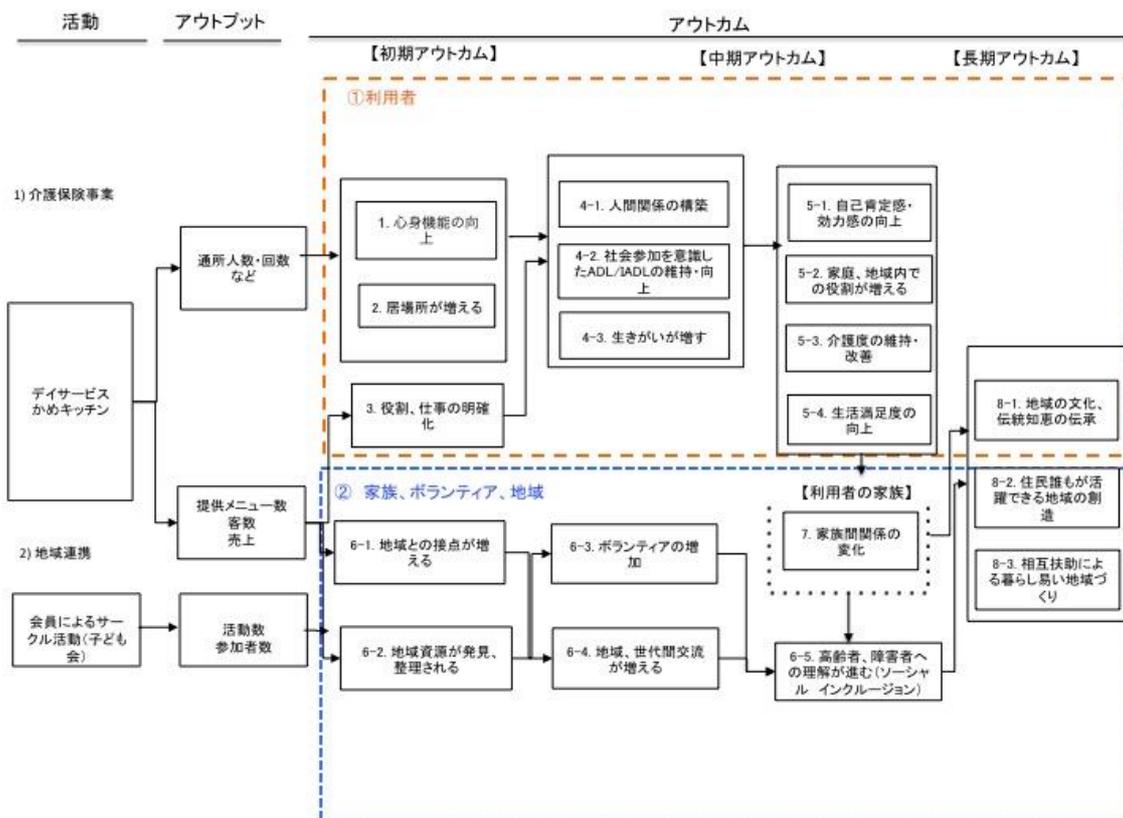
上記の事業に加えて、地域住民が集える場や活動を数多く提供しており、地域における波及的成果も生み出していると考えられる（8-1～8-8）。介護保険事業に留まらず、地域の課題解決、地域活性化を目指した事業展開、拡大をしており、地域づくりにつながる長期アウトカムの出現も期待できる（9-3、9-4）。



事例⑤ NPO 法人シニアライフセラピー研究所 デイサービス

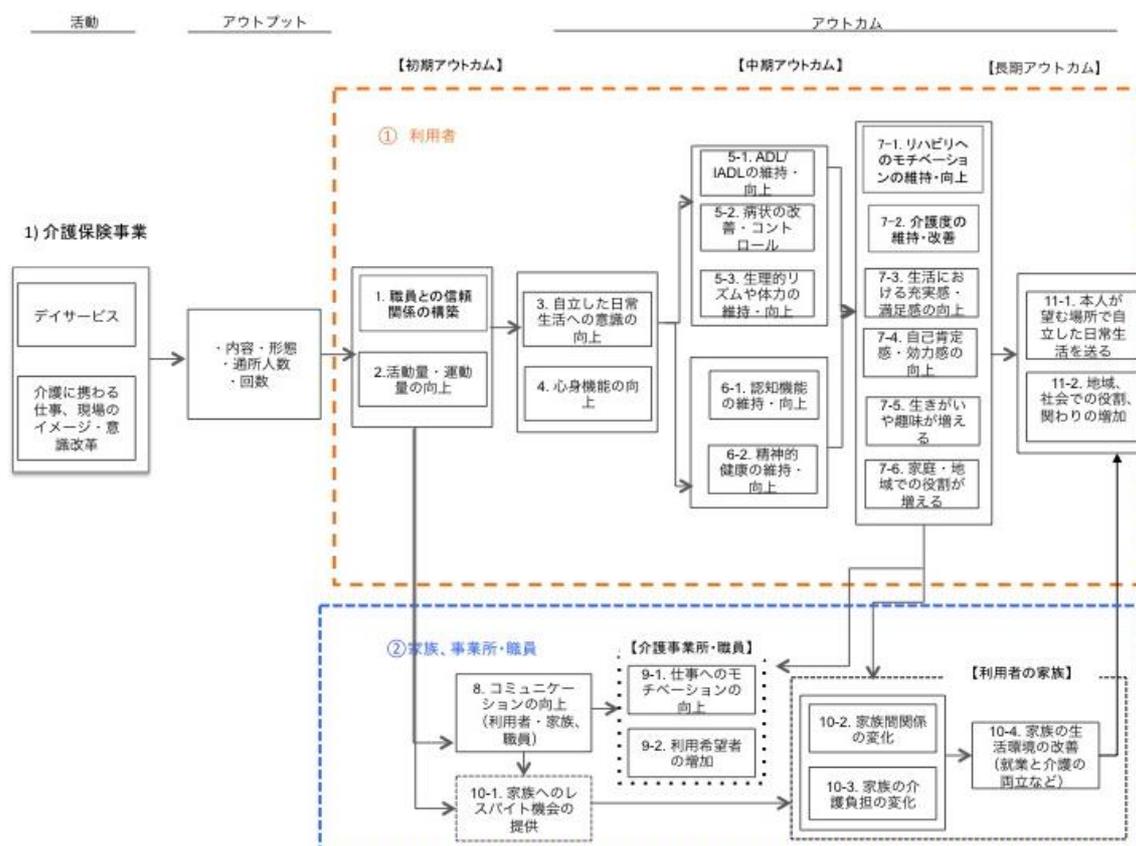
かめキッチンとは同法人が運営するカフェ・レストランである。「何か役割を持ちたい」、「人の役に立ちたい」というデイサービス利用者のニーズに応えると共に、調理を通してのリハビリを行っている。メニュー作りや調理作業は運動機能、高次機能の向上につながることから、ADL/IADL の維持・向上の成果が期待できる（4-2）。また、かめキッチンでの活動は有償ボランティア活動になっており、就労とリハビリの両方を実現している。かめキッチンで活動するようになってから、自宅でも料理をするようになったという事例もあり、家庭、地域内での役割が増えることにつながっている（5-2）と考えられる。

かめキッチンは地域住民が訪れる場であり、オープンキッチンで利用者の活動の様子を間近に見ることができる。また、同法人は地域住民を対象とした会員制の子ども会やサークル、ボランティアグループなども運営しており、地域に開かれた施設、活動作りを積極的に行っていることから、地域に与える成果も出現していると考えられる（6-1～6-5）。長期的には介護や福祉の枠を越えたまちづくり、地域づくりにつながるアウトカムの出現が期待できる（8-1～8-3）。



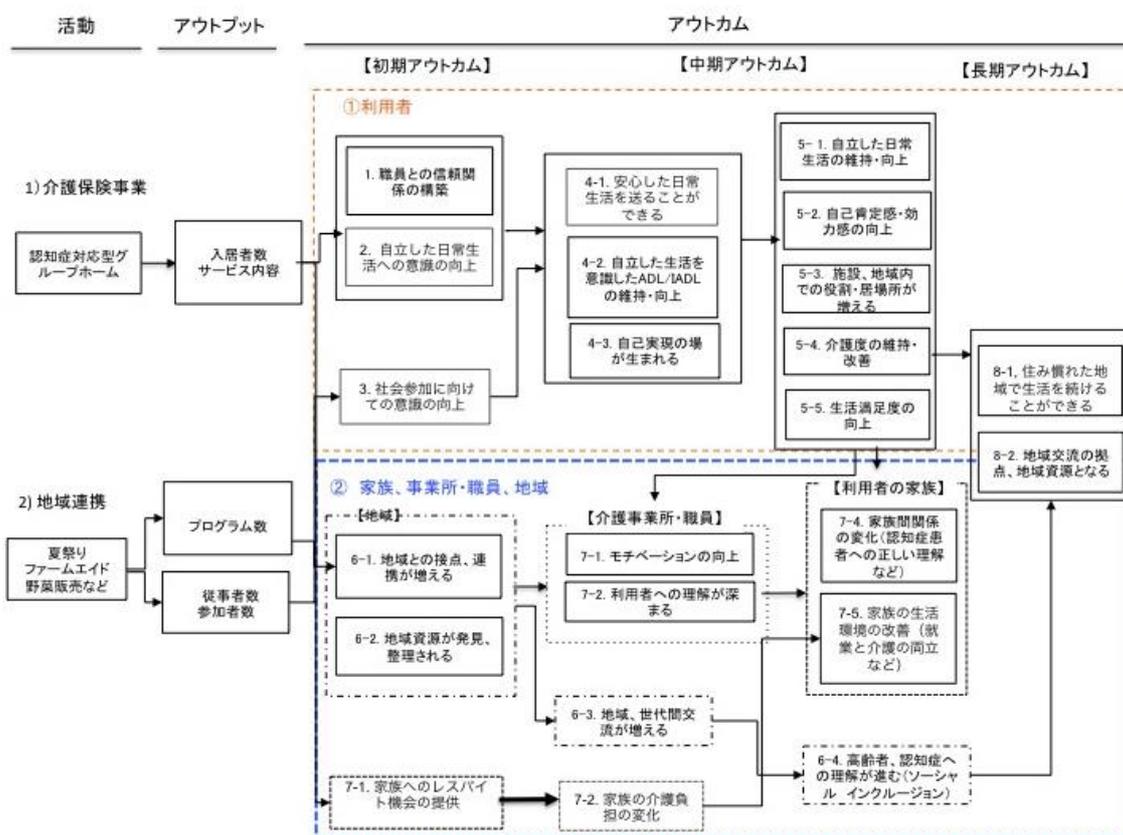
事例⑥ 株式会社アール・ケア デイサービス

同社のデイサービスは運動機能の維持、向上を主眼としたリハビリテーション特化型のデイサービスである。明るい施設環境と最新のマシントレーニング設備、機能訓練により活動量や運動量の向上を図りつつ（２）、身体機能向上を数値化し包括的に評価する手法により、心身機能や ADL/IADL の維持・向上といった身体面での成果（４、５－１～５－３）と共に、リハビリへの意欲向上や自己肯定感・効力感の向上など精神面での成果が生まれている（７－１～７－４）。これらの成果が、本人が望む社会参加（７－５、７－６）につながり、長期アウトカムにつながると考えられる（１１－１、１１－２）。なお、利用者の成果は事業所職員の仕事へのモチベーションの向上（９－１）、利用者家族の利用者に対する見方、意識の変化など、家族関係の変化（１０－３）といった成果にもつながっている。



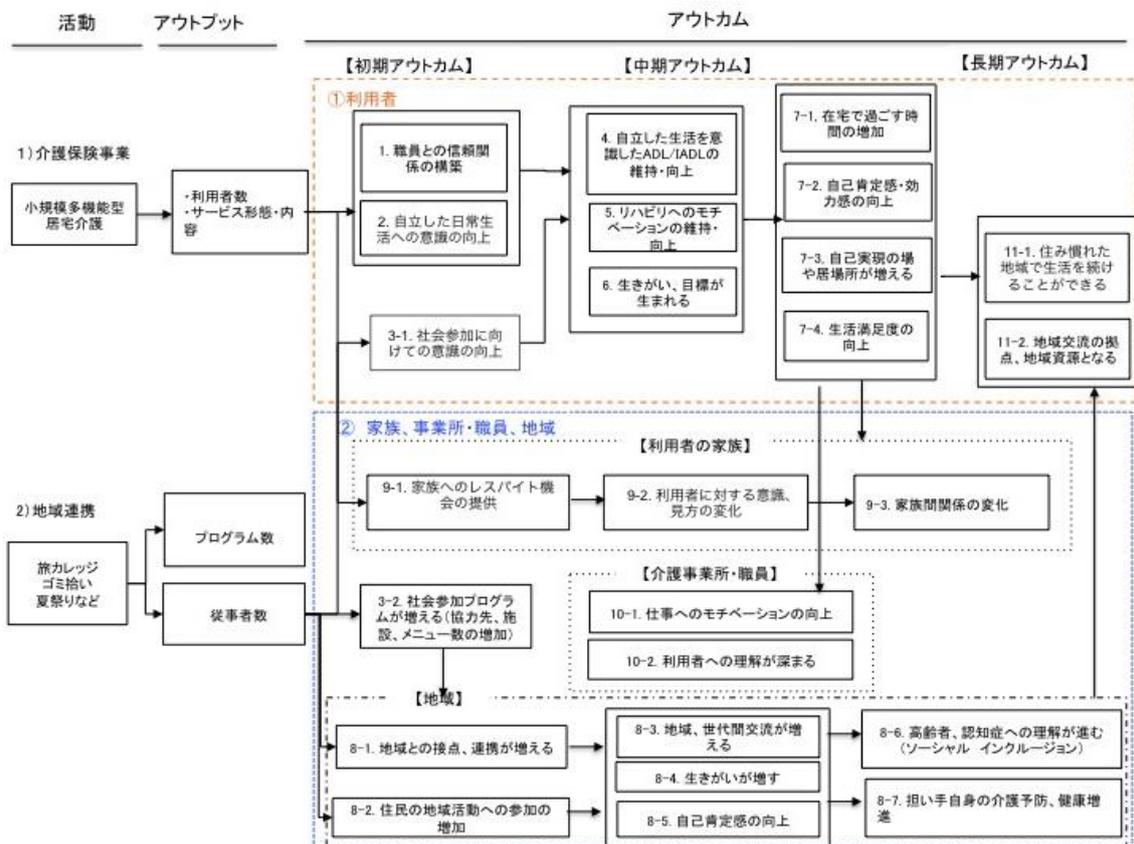
事例⑧ 社会福祉法人新生寿会 グループホーム東五反田

新しいグループホームであるが、開所当初から地域との接点を意識した施設づくりをしている。軽度の認知症の利用者の、「何か役割を持ちたい」、「経済活動がしたい（働きたい、お金を持ちたい）」というニーズがあったことから、地域活動を通じた社会参加プログラムを実施している。プログラムの参加を通して、利用者が自分自身の役割を見つけて生き生きしたり、今後の活動を楽しみに日々の生活に張り合いが生まれるなどの効果も出ており、中期アウトカムに設定している成果（4-1～4-3、5-1～5-5）につながっていると考えられる。地域活動の多くは、同法人の働きかけにより開始し、復活したものであり、都市部におけるコミュニティづくりにつながる成果も生み出していると考えられる。地域包括ケアシステムの構築を視野に入れ、積極的に町会、福祉施設、病院などの連携も行っており、長期アウトカムに設定している成果（8-1、8-2）の出現も期待できる。



事例⑨ 株式会社浪漫 小規模多機能型居宅介護事業

同事業所の利用者は要介護・要支援度が重度の人が多いため、社会、地域とのつながりづくりに重点を置いた社会参加活動を行なっている。高齢者、認知症の方々の旅行をサポートする「旅カレッジ」は、旅行を通じて本人に自信がつく（7-2）と同時に、利用者の旅先での様子を見て、家族に意識の変化や気づきが生まれ（9-2）といった成果を生み出している。旅行をするために散歩をして体力の維持・向上に努めるなど、リハビリへのモチベーションの維持・向上（5）、生活における生きがいや目標ができ（6）、自己実現の場や、生活満足度の向上につながっていると考えられる（7-3、7-4）。ごみ拾いや地域の夏祭りといった、地域との連携による地域活動も行なっており、この活動を通じて、地元の人たちへの波及的成果も生まれていると考えられる。（8-1～8-7）。自治会組織が比較的弱い地域なため、地域の活動は同事業所が核になっている側面もあることから、利用者の社会参加、地域との連携による活動が増えることで、長期アウトカムの出現も期待できる（11-1、11-2）。



■資料3-2 アンケート票

介護サービス事業における社会参加活動の適切な実施と効果の検証に関する調査研究事業

回答者 ID (事業者が記載してください)

試用版

利用者アンケート（評価モデル 1）

●あなたのことについてお伺いいたします●

問1. あなたの年齢についてお答えください。

	歳
--	---

問2. あなたの性別について、該当する方に○印をおつけください。

1) 男性	2) 女性
-------	-------

問3. 介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べて、家族や介護スタッフの支援を受けながらも、身の回りのことはできる限り自分ことは自分でやろうという意識が向上したと思いますか。

1. 思う	2. 思わない	3. 分らない
-------	---------	---------

問4. ご自身と介護スタッフ、職員との間に信頼関係はあると思いますか。

1. 思う	2. 思わない	3. 分らない
-------	---------	---------

問5. 自分が関わることのできる地域活動（地域での清掃活動や行事など）や、仕事をイメージすることができますか。

1. できる	2. できない	3. どちらでもない
--------	---------	------------

問6. 介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べて、気軽に集える場、参加できるグループや活動の数に変化はありましたか。

1. 増えた	2. 減った	3. 変わらない
--------	--------	----------

問7. 次のA~Iの質問について、それぞれあてはまる番号1つに○印をおつけください。

	とてもあてはまる	わりとあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ほとんどあてはまらない
A 自分は幸せだと感じることが多い →	1	2	3	4	5
B 何か新しいことを学んだり、始めたいと思う →	1	2	3	4	5
C 自分は何か他人や社会のために役立っていると思う →	1	2	3	4	5
D 心にゆとりがある →	1	2	3	4	5
E 色々なものに興味がある →	1	2	3	4	5

F 自分の存在は、誰かや何か(団体、組織など)のために必要だと思う →	1	2	3	4	5
G 生活が豊かに充実している →	1	2	3	4	5
H 自分の可能性を伸ばしたい →	1	2	3	4	5
I 自分は誰かに影響を与えていると思う →	1	2	3	4	5

問 8. 介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べて、リハビリを行うことへの意欲、やる気は向上しました。

1. 向上した	2. 低下した	3. 変わらない
---------	---------	----------

問 9. 次の A~J の質問について、それぞれあてはまる番号 1 つに○印をおつけください。

	強くそう思う	そう思う	そう思わない	強くそう思わない
A 私は、自分自身にだいたい満足している →	1	2	3	4
B ときどき、自分はまったくダメだと思うことがある →	1	2	3	4
C 私には、けっこう長所があると感じている →	1	2	3	4
D 私は、大半の人と同じくらいに物事がこなせる →	1	2	3	4
E 私には誇れるものが大してないと感じる →	1	2	3	4
F ときどき、自分は役に立たないと強く感じることもある →	1	2	3	4
G 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じる →	1	2	3	4
H 自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う →	1	2	3	4
I よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう →	1	2	3	4
J 私は、自分のことを前向きに考えている →	1	2	3	4

問 10. 介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べて、ご家庭でできる事(家事や身の回りのこと)に変化はありましたか

1. 増えた	2. 減った	3. 変わらない
--------	--------	----------

問 11. 地域での活動に関わっている方にお尋ねします。介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べ

て、関わる地域での活動の数や頻度に変化はありましたか

1. 増えた	2. 減った	3. 変わらない
--------	--------	----------

問12. あなたの移動の程度についてお聞かせください。あてはまるもの 1つに○印を記入してください。

1 歩き回るのに問題はない	→	
2 歩き回るのに少し問題がある	→	
3 歩き回るのに中程度の問題がある	→	
4 歩き回るのにかなり問題がある	→	
5 歩き回ることができない	→	

問13. あなたの身の回りの管理についてお聞かせください。あてはまるもの 1つに○印を記入してください。

1 自分で身体を洗ったり着替えをするのに問題はない	→	
2 自分で身体を洗ったり着替えをするのに少し問題がある	→	
3 自分で身体を洗ったり着替えをするのに中程度の問題がある	→	
4 自分で身体を洗ったり着替えをするのにかなり問題がある	→	
5 自分で身体を洗ったり着替えをすることができない	→	

問14. あなたのふだんの活動（例：仕事、勉強、家族・余暇活動）についてお聞かせください。あてはまるもの 1つに○印をおつけください。

1 ふだんの活動を行うのに問題はない	→	
2 ふだんの活動を行うのに少し問題がある	→	
3 ふだんの活動を行うのに中程度の問題がある	→	
4 ふだんの活動を行うのにかなり問題がある	→	
5 ふだんの活動を行うことができない	→	

問15. あなたの身体の痛みや不快感についてお聞かせください。あてはまるもの 1つに○印をおつけください。

1 痛みや不快感はない	→	
2 少し痛みや不快感がある	→	
3 中程度の痛みや不快感がある	→	
4 かなりの痛みや不快感がある	→	
5 極度の痛みや不快感がある	→	

問 16. あなたの不安やふさぎ込みについてお聞かせください。あてはまるもの 1 つに○印をおつけください。

1 不安でもふさぎ込んでいない	→	
2 少し不安あるいはふさぎ込んでいる	→	
3 中程度に不安あるいはふさぎ込んでいる	→	
4 かなり不安あるいはふさぎ込んでいる	→	
5 極度に不安あるいはふさぎ込んでいる	→	

● お忙しい中、アンケート調査にご協力頂き、誠にありがとうございました●

事業所アンケート（評価モデル 1）

問1. 一年前と比べて利用希望者数に変化はありますか。

1. 増えた	2. 変わらない	3. 減った
--------	----------	--------

問2. 一年前と比べて、社会参加、就労メニューの数に変化はありますか。

1. 増えた	2. 変わらない	3. 減った
--------	----------	--------

問3. 一年前と比べて、社会参加、就労メニューを実施するための協力・連携先の数に変化はありますか。

1. 増えた	2. 変わらない	3. 減った
--------	----------	--------

問4. 一年前と比べて、地域活動、行事を実施するための協力・連携先の数に変化はありますか。

1. 増えた	2. 変わらない	3. 減った
--------	----------	--------

問5. 一年前と比べて、事業者主催の地域行事、活動に地域、近隣住民の参加の数に変化はありますか。

1. 増えた	2. 変わらない	3. 減った
--------	----------	--------

問6. 一年前と比べて、活動に関わる人々（ボランティアなど）の数に変化はありますか。

1. 増えた	2. 変わらない	3. 減った
--------	----------	--------

問7. 一年前と比べて、新たな移住者や地域外の人々を受け入れる仕組みや行事などの数に変化はありますか。

1. 増えた	2. 変わらない	3. 減った
--------	----------	--------

問8. 一年前と比べて、事業所で行っている地域の文化や伝統、産業などを、普及・教育・共有するような取り組みの数に変化はありますか。

1. 増えた	2. 変わらない	3. 減った
--------	----------	--------

問9. 利用者や地域住民の取り組みにより発見された、新たに生み出された地域資源（人的ネットワークやコミュニティ、人々が集まる場など）などが具体的にありましたら、記入してください（任意、自由記述）。

--

●お忙しい中、アンケート調査にご協力頂き、誠にありがとうございました●

事業所職員アンケート（評価モデル 1、2 共通）

●あなたのことについてお伺いいたします●

問1. あなたの年齢についてお答えください。

	歳
--	---

問2. あなたの性別について、^{びいとう}該当する方に○印をおつけください。

1) 男性	2) 女性
-------	-------

問3. 利用者が介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べて、利用者との会話の頻度に変化はありましたか。

1. 増えた	2. 減った	3. 変わらない
--------	--------	----------

問4. 利用者が介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べて、利用者の家族との会話の頻度に変化はありましたか。

1. 増えた	2. 減った	3. 変わらない
--------	--------	----------

問5. 利用者が介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べて、職員同士のコミュニケーションに変化はありましたか。

1. 良くなった	2. 悪くなった	3. 変わらない
----------	----------	----------

問6. 利用者が介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べて、仕事に対する楽しさ、やりがいに変化はありましたか。

1. 増えた	2. 減った	3. 変わらない
--------	--------	----------

問7. 利用者の自立支援や社会参加、(就労)が進むことにより、ご自身の仕事に対する意識や考え方に変化があった場合、ご記入ください(任意、自由記述)。

--

●お忙しい中、アンケート調査にご協力頂き、誠にありがとうございました●

利用者家族アンケート（評価モデル 1,2 共通）

●あなたとご家族（利用者）とのことについてお伺いいたします●

問1. あなたの年齢についてお答えください。

	歳
--	---

問2. あなたの性別について、該当する方に○印をおつけください。

1) 男性	2) 女性
-------	-------

問3. あなたはご家族（利用者）と同居していますか？（あてはまる番号1つに○）

1. 同居している	3. 同居はしておらず、遠方に住んでいる
2. 同居はしていないが近くに住んでいる	4. その他

問4. あなたとご家族（利用者）との関係について、次のA～Hの質問について、それぞれあてはまる番号1つに○印をおつけください。

	あてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
A あなたに感謝やねぎらいのことばをかけてくれますか →	1	2	3	4
B あなたの注意を素直に聞いてくれますか →	1	2	3	4
C あなたを笑わせたり、喜ばせたりしますか →	1	2	3	4
D 一生懸命、仕事や家事をしてきた人ですか →	1	2	3	4
E ご家族（利用者）の態度に腹がたつことがありますか →	1	2	3	4
F ご家族（利用者）は、あなたに遠慮しますか →	1	2	3	4
G ご家族（利用者）が家にいることをあなたは喜んでいきますか →	1	2	3	4
H 繰り返し同じことを言うとき、あなたは聞きますか →	1	2	3	4

問5. あなたの気持ちについて、次のA～Hの質問について、それぞれあてはまる番号1つに○印をおつけください。なお、本人とはご家族（利用者）のことを指します

	思わない	たまに思う	時々思う	よく思う	いつも思う
A 本人の行動に対し、困ってしまおうとすることがありますか。 →	1	2	3	4	5
B 本人のそばにいと腹がたつことがありますか。 →	1	2	3	4	5
C 介護があるので家族や友人とつきあいがなくなっていると思いませんか。 →	1	2	3	4	5
D 本人のそばにいと、気が休まらないと思いませんか。 →	1	2	3	4	5
E 介護があるので自分の社会参加の機会が減ったと思うことがありますか。 →	1	2	3	4	5
F 本人が家にいるので、友達を自宅に呼びたくても呼べないと思ったことがありますか。 →	1	2	3	4	5
G 介護を誰かにまかせてしまいたいと思うことがありますか。 →	1	2	3	4	5
H 本人に対して、どうしていいかわからないと思うことがありますか。 →	1	2	3	4	5

問 6. 利用者が介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べて、あなたの自身の介護時間に変化はありましたか？

1. 減った 2. 少し減った 3. あまり変わらない 4. 少し増えた 5. 増えた

問 7. 問 6 で「変化があった（減った、増えた）」と回答された方は、具体的に1週間でどのくらい介護時間に変化がありましたか？（「③ あまり変わらない」と回答された方は回答不要です）

1 週間で _____ 時間くらい変化があった（減った、増えた）

問 8. 利用者が介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べて、あなたの介護に関する精神的な負担に変化はありましたか？

1. 減った 2. 少し減った 3. あまり変わらない 4. 少し増えた 5. 増えた

問 9. 利用者が介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べて、あなたの介護に関する肉体的な負担に変化はありましたか？

1. 減った 2. 少し減った 3. あまり変わらない 4. 少し増えた 5. 増えた

問 10. 利用者が介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べてご自身の生活環境に変化はありましたか？

か。(あてはまる番号全てに○)

1. 自分の時間が増えた	5. 仕事（パートを含む）を始めた
2. 自分の時間が減った	6. 仕事（パートを含む）をする時間が増えた
3. 家族で過ごす時間が増えた	7. 仕事（パートを含む）をやめた
4. 家族で過ごす時間が減った	8. 仕事（パートを含む）をする時間が減った
	9. 特に変化なし
	10.その他
	()

ご家族（利用者）について伺います。

問 11. 介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べて、ご家庭でできる事（家事や身の回りのこと）に変化はありましたか

- | | | | |
|-----------------|--------------|----------|--------------|
| 1. できることがとても増えた | 2. できることが増えた | 3. 変わらない | 4. できることが減った |
| 5. できることがとても減った | | | |

問 12. ご家族（利用者）が地域での活動に関わっている場合にお尋ねします。介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べて、関わる地域での活動の数や頻度に変化はありましたか

- | | | | | |
|-----------|--------|----------|--------|-----------|
| 1. とても増えた | 2. 増えた | 3. 変わらない | 4. 減った | 5. とても減った |
|-----------|--------|----------|--------|-----------|

●お忙しい中、アンケート調査にご協力頂き、誠にありがとうございました●

地域住民アンケート（評価モデル 1 のみ）

●あなたのことについてお伺いいたします●

問1. 一年前と比べて、地域での活動への参加数、頻度に変化はありましたか。
 関わりのある介護事業所主催の地域活動やイベントに限らず、その他の団体主催の活動や町内活動なども含めてお答えください。

1. とても増えた	2. 増えた	3. 変わらない	4. 減った	5. とても減った
-----------	--------	----------	--------	-----------

問2. 地域の活動に関わるようになったことにより、ご自身に変化はありましたか？(あてはまるもの全てに○)

1. 体や手先を動かす機会が増えた	5. 頭をつかう機会が増えた
2. 会話が增えた	6. 特になし
3. 生活にはりが出た	7. その他
4. 楽しみが増えた	()

(1) 上記の他に、地域の活動に関わっての感想など、何かありましたらご記入ください(任意、自由記述)

問3. 以下のそれぞれの項目について、該当するものを選択してください。

	とても思う	少し思う	思う	思わない	まったく思わない
A 地域の高齢者が抱えている問題は自分の問題でもあると思う →	1	2	3	4	5
B 地域の高齢者に関係のありそうな情報には気を付けておこうと思う →	1	2	3	4	5
C 何か地域のことを決めるときには高齢者の気持ちも尊重するべきだと思う →	1	2	3	4	5
D 地域に困っている高齢者がいたら見て見ぬふりはできないと思う →	1	2	3	4	5
E 何か役に立ちそうなものがあったら地域の高齢者に伝えようと思う →	1	2	3	4	5

F 地域の高齢者福祉の問題に対して、自分の意見を言えると思う →	1	2	3	4	5
G 「高齢者が暮らしやすい地域」にするためには自分の力が役に立つと思う →	1	2	3	4	5
H 自分が頼めば高齢者の支援活動の参加者を増やせると思う →	1	2	3	4	5
I 地域で行われている高齢者の支援活動に積極的に参加しようと思う →	1	2	3	4	5
J 地域の高齢者が困っていることを本人に代わって役所などに意見を言えると思う →	1	2	3	4	5

問4. 次のA～Iの質問について、それぞれあてはまる番号1つに○印をおつけください。

	とてもあてはまる	わりとあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ほとんどあてはまらない
A 自分は幸せだと感じることが多い →	1	2	3	4	5
B 何か新しいことを学んだり、始めたいと思う →	1	2	3	4	5
C 自分は何か他人や社会のために役立っていると思う →	1	2	3	4	5
D 心にゆとりがある →	1	2	3	4	5
E 色々なものに興味がある →	1	2	3	4	5
F 自分の存在は、誰かや何か(団体、組織など)のために必要だと思う →	1	2	3	4	5
G 生活が豊かに充実している →	1	2	3	4	5
H 自分の可能性を伸ばしたい →	1	2	3	4	5
I 自分は誰かに影響を与えていると思う →	1	2	3	4	5

問5. 次のA~Jの質問について、それぞれあてはまる番号1つに○印をおつけください。

	強くそう思う	そう思う	そう思わない	強くそう思わない
A 私は、自分自身にだいたい満足している →	1	2	3	4
B ときどき、自分はまったくダメだと思うことがある →	1	2	3	4
C 私には、けっこう長所があると感じている →	1	2	3	4
D 私は、大半の人と同じくらいに物事がこなせる →	1	2	3	4
E 私には誇れるものが大してないと感じる →	1	2	3	4
F ときどき、自分は役に立たないと強く感じることもある →	1	2	3	4
G 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じる →	1	2	3	4
H 自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う →	1	2	3	4
I よく、私は落ちこぼれたと思ってしまう →	1	2	3	4
J 私は、自分のことを前向きに考えている →	1	2	3	4

問6. あなたの年齢についてお答えください。

歳

問7. あなたの性別について、該当する方に○印をおつけください。

1) 男性	2) 女性
-------	-------

問8. あなたと介護事業所の利用者の方とはどのような関係ですか？（あてはまる番号すべてに○）

1. ご家族（本人との間柄：	4. ボランティア
2. ご近所さん	5. 特に関係性はない
3. 友人、知人	6. そ の 他
	（

●お忙しい中、アンケート調査にご協力頂き、誠にありがとうございました●

利用者アンケート（評価モデル 2）

●あなたのことについてお伺いいたします●

問 1. あなたの年齢についてお答えください。

	歳
--	---

問 2. あなたの性別について、該当する方に○印をおつけください。

1) 男性	2) 女性
-------	-------

問 3. 通所する前と比べて、家族や介護スタッフの支援を受けながらも、身の回りのことはできる限り自分ことは自分でやろうという意識が向上したと思いますか。

1. 思う い	2. 思わない	3. 分らない
------------	---------	---------

問 4. ご自身と介護スタッフ、職員との間に信頼関係はあると思いますか。

1. 思う い	2. 思わない	3. 分らない
------------	---------	---------

問 5. 今日を含め過去一週間の間にあなたがどう思ったかに基づいて、各々の質問に対して、「はい」か「いいえ」で答えてください。

	はい	いいえ
A あなたは、あなたの人生に、ほぼ満足していますか		
B これまでやってきたことや、興味があったことの多くを止めてしまいましたか		
C あなたは、あなたの人生は空しいと感じていますか		
D しばしば、退屈になりますか		
E あなたは、たいてい、機嫌がよいですか		
F あなたに、何か悪いことが怒ろうとしているのではないかと、心配ですか		
G たいてい、幸せだと感じていますか		
H あなたは、しばしば無力であると感じていますか		
I 外出して新しいことをするよりも、自宅にいるほうが良いと思いますか		
J たいていの人よりも、記憶が低下していると思いますか		
K 現在、生きていることは、素晴らしいことだと思いますか		
L あなたは、現在のありのままのあなたを、かなり価値がないと感じますか		
M あなたは、元気一杯ですか		
N あなたの状況は絶望的だと、思いますか		
O たいていの方は、あなたより良い暮らしをしていると思いますか		

問6. 次のA～Iの質問について、それぞれあてはまる番号1つに○印をおつけください。

	とてもあてはまる	わりとあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ほとんどあてはまらない
A 自分は幸せだと感じることが多い →	1	2	3	4	5
B 何か新しいことを学んだり、始めたいと思う →	1	2	3	4	5
C 自分は何か他人や社会のために役立っていると思う →	1	2	3	4	5
D 心にゆとりがある →	1	2	3	4	5
E 色々なものに興味がある →	1	2	3	4	5
F 自分の存在は、誰かや何か(団体、組織など)のために必要だと思う →	1	2	3	4	5
G 生活が豊かに充実している →	1	2	3	4	5
H 自分の可能性を伸ばしたい →	1	2	3	4	5
I 自分は誰かに影響を与えていると思う →	1	2	3	4	5

問7. 通所する前と比べて、リハビリを行うことへの意欲、やる気は向上しました。

1. 向上した	2. 低下した	3. 変わらない
---------	---------	----------

問8. 次のA～Jの質問について、それぞれあてはまる番号1つに○印をおつけください。

	強くそう思う	そう思う	そう思わない	強くそう思わない
A 私は、自分自身にだいたい満足している →	1	2	3	4
B ときどき、自分はまったくダメだと思うことがある →	1	2	3	4
C 私には、けっこう長所があると感じている →	1	2	3	4
D 私は、大半の人と同じくらいに物事がこなせる →	1	2	3	4
E 私には誇れるものが大してないと感じる →	1	2	3	4
F ときどき、自分は役に立たないと強く感じることもある →	1	2	3	4
G 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じる →	1	2	3	4

H 自分をもう少し尊敬 できたらいいと思う →	1	2	3	4
I よく、私は落ちこぼれだと思 ってしまう →	1	2	3	4
J 私は、自分のことを前向きに 考えている →	1	2	3	4

問9. 通所する前と比べて、ご家庭でできる事（家事や身の回りのこと）に変化はありましたか

1. 増えた	2. 減った	3. 変わらない
--------	--------	----------

問10. あなたの移動の程度についてお聞かせください。あてはまるもの1つに○印をおつけください。

1 歩き回るのに問題はない →	
2 歩き回るのに少し問題がある →	
3 歩き回るのに中程度の問題がある →	
4 歩き回るのにかなり問題がある →	
5 歩き回ることができない →	

問11. あなたの身の回りの管理についてお聞かせください。あてはまるもの1つに○印をおつけください。

1 自分で身体を洗ったり着替えをするのに問題はない →	
2 自分で身体を洗ったり着替えをするのに少し問題がある →	
3 自分で身体を洗ったり着替えをするのに中程度の問題がある →	
4 自分で身体を洗ったり着替えをするのにかなり問題がある →	
5 自分で身体を洗ったり着替えをすることができない →	

問12. あなたのふだんの活動（例：仕事、勉強、家族・余暇活動）についてお聞かせください。あてはまるもの1つに○印をおつけください。

1 ふだんの活動を行うのに問題はない →	
2 ふだんの活動を行うのに少し問題がある →	
3 ふだんの活動を行うのに中程度の問題がある →	
4 ふだんの活動を行うのにかなり問題がある →	
5 ふだんの活動を行うことができない →	

問13. あなたの身体の痛みや不快感についてお聞かせください。あてはまるもの1つに○印をおつけください。

1 痛みや不快感はない →	
2 少し痛みや不快感がある →	

3 中程度の痛みや不快感がある	→	
4 かなりの痛みや不快感がある	→	
5 極度の痛みや不快感がある	→	

問 14. あなたの不安やふさぎ込みについてお聞かせください。あてはまるもの 1 つに○印をおつけください。

1 不安でもふさぎ込んでいない	→	
2 少し不安あるいはふさぎ込んでいる	→	
3 中程度に不安あるいはふさぎ込んでいる	→	
4 かなり不安あるいはふさぎ込んでいる	→	
5 極度に不安あるいはふさぎ込んでいる	→	

●お忙しい中、アンケート調査にご協力頂き、誠にありがとうございました●

●事業所のことについてお伺いいたします●

問1. 一年前と比べて利用希望者数に変化はありますか。

- | | | |
|--------|----------|--------|
| 1. 増えた | 2. 変わらない | 3. 減った |
|--------|----------|--------|

●お忙しい中、アンケート調査にご協力頂き、誠にありがとうございました●

アンケート改定案

評価モデルの検証の過程で以下の改定案が出された。

① 利用者アンケート

問4. 「職員との信頼関係の構築」に関する問（評価モデル1,2 共通）

現行：ご自身と介護スタッフ、職員との間に信頼関係はあると思いますか。

1. 思う	2. 思わない	3. 分らない
-------	---------	---------

改定案：ご自身と介護スタッフ、職員との関係であてはまると思うもの○をつけてください。

(1) ご自身のことについて相談できますか。

1. できる	2. できない	3. 分らない
--------	---------	---------

(2) リハビリの内容や施設内でのことについてよく説明してくれますか。

1. してくれる	2. してくれない	3. 分らない
----------	-----------	---------

(3) 自分のことを理解してくれていると思いますか。

2. してくれる	2. してくれない	3. 分らない
----------	-----------	---------

改定理由：「信頼関係があるか」というのは漠然としているため。信頼関係の構築につながると考えられる要素を設問に設定し、その度合いを測る。

② 事業所・利用者アンケート

問3. 「介護度の維持・改善」に関する問（評価モデル1,2 共通）

現行：介護事業所の社会参加プログラム前後で介護度の維持・改善が確認できるデータはありますか。

1. ある	2. ない
-------	-------

改定案：日常生活における活動の維持、改善ができるデータはありますか。

1. ある	2. ない
-------	-------

改定理由：認定介護度を確認できるデータを提供いただくのは困難であることが予測されるため。事業所において日常生活における活動範囲の変化を測っている場合（ライフスペースアセスメントなど）はそのデータの提供が可能である場合が考えられるため。

③ 事業所・職員アンケート

追加設問：あなたが担当していない利用者の社会参加や自立による成果は、職員、事業所内で広く共有され

ていますか。

1. されている	2. されていない	3. 分からない
----------	-----------	----------

改定理由：職員同士、事業所内の「コミュニケーションの向上」を確認するため。

追加設問：利用者の社会参加や自立が進むことは、あなたの仕事のやりがいやモチベーションの向上につながっていますか。

1. つながっている	2. つながっていない	3. 分からない
------------	-------------	----------

改定理由：「仕事へのモチベーションが向上する」を確認するため。

④ 利用者家族アンケート

問3. 「家族へのレスパイト機会の提供」、「家族の介護負担の変化」に関する設問（評価モデル 1,2 共通）

現行：利用者が介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べて、あなたの自身の介護時間に変化はありましたか？

1. 減った	2. 少し減った	3. あまり変わらない	4. 少し増えた	5. 増えた
--------	----------	-------------	----------	--------

改定案：（利用者が介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べて、）ご家庭で、あなたが利用者を見守り、介助する時間に変化はありましたか？

1. 減った	2. 少し減った	3. あまり変わらない	4. 少し増えた	5. 増えた
--------	----------	-------------	----------	--------

改定理由：家庭での介護時間の変化に関する質問であることを明確化するため。

問7. 家族へのレスパイト機会の提供、家族の介護負担の変化

現行：問6で「変化があった（減った、増えた）」と回答された方は、具体的に1週間でどのくらい介護時間に変化がありましたか？（「③ あまり変わらない」と回答された方は回答不要です）

1週間	時間くらい変化があった（減った、増えた）
-----	----------------------

改定案：問6で「変化があった（減った、増えた）」と回答された方は、具体的に1週間でどのくらいの割合で変化がありましたか？（「③ あまり変わらない」と回答された方は回答不要です）

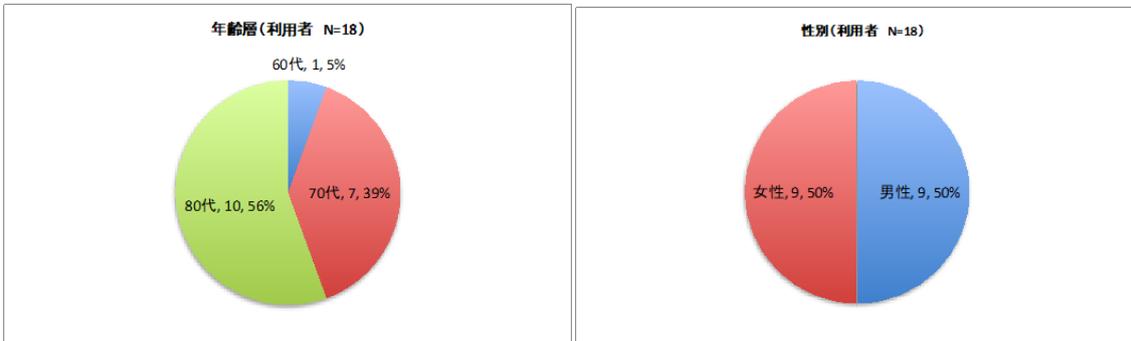
1週間	割くらい変化があった（減った、増えた）
-----	---------------------

改定理由：時間数では答え難いという意見が複数挙げられたため。

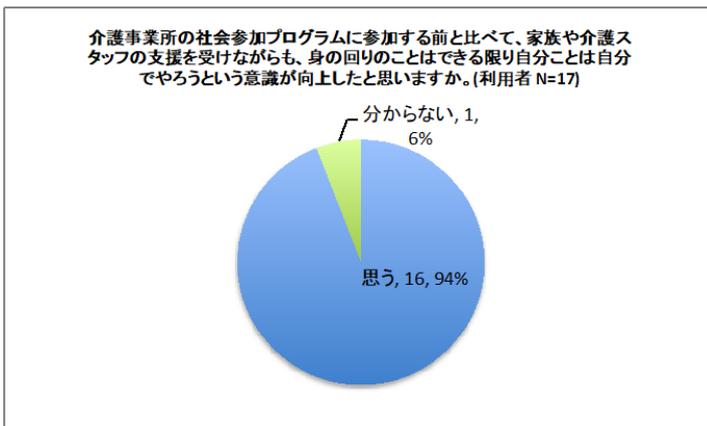
■資料3-3 アンケート分析結果

① 利用者に関するアウトカム

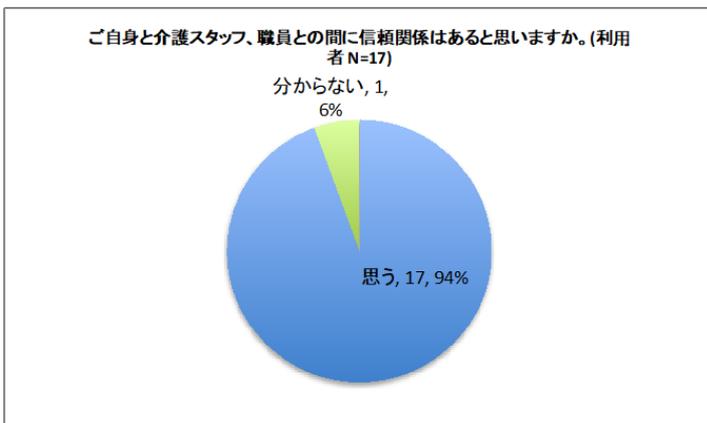
<回答者の属性>



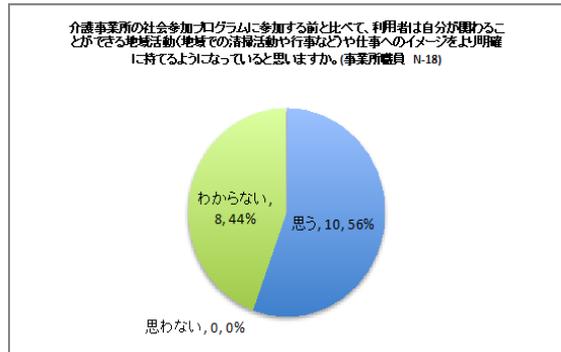
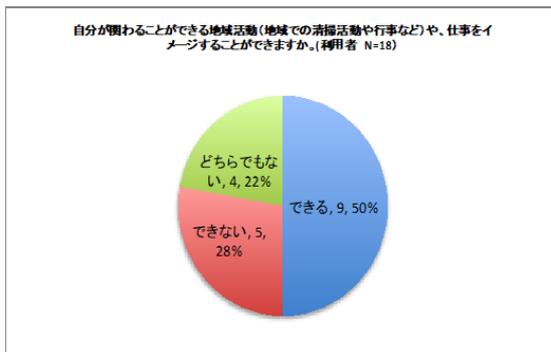
【自立した日常生活への意識の向上】



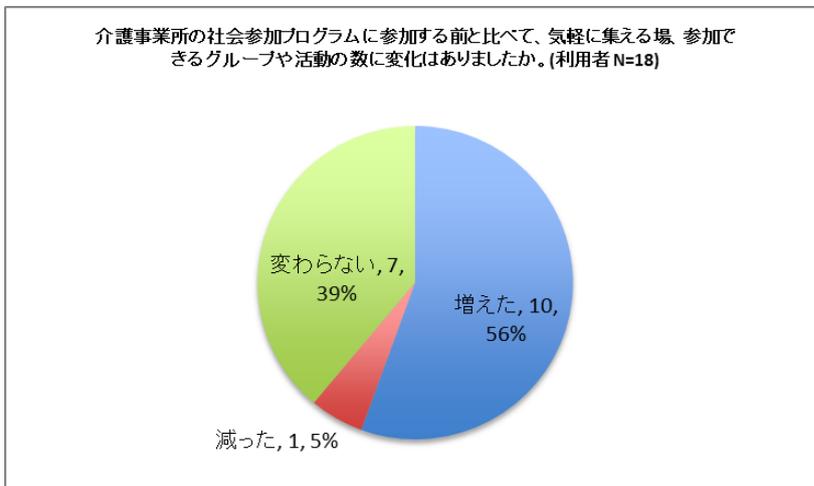
【職員との信頼関係の構築】



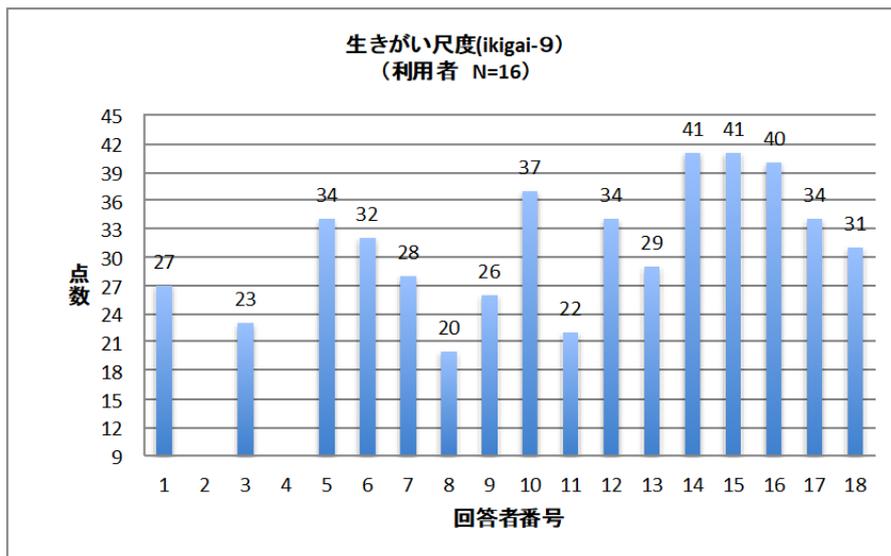
【社会参加、就労のイメージの明確化】



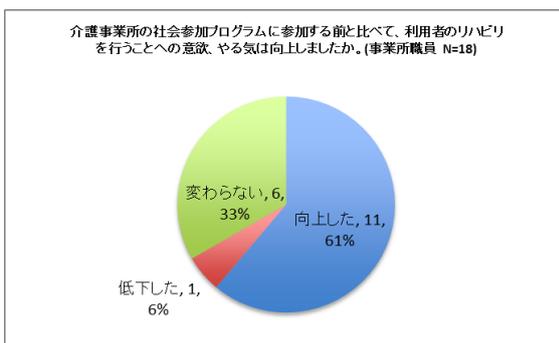
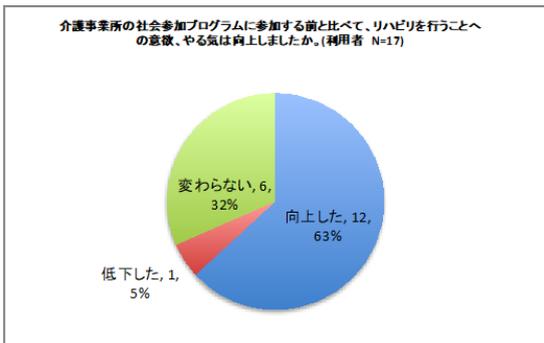
【居場所が増える】



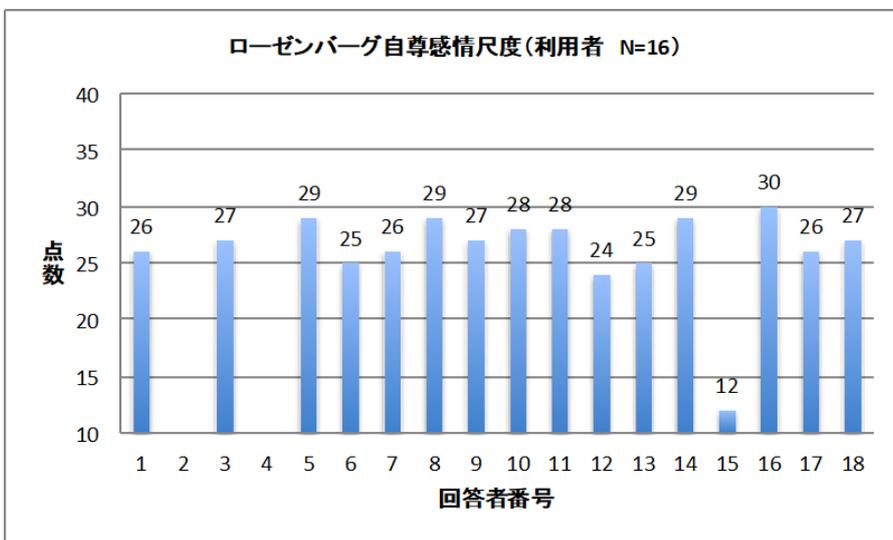
【生きがいが増す】



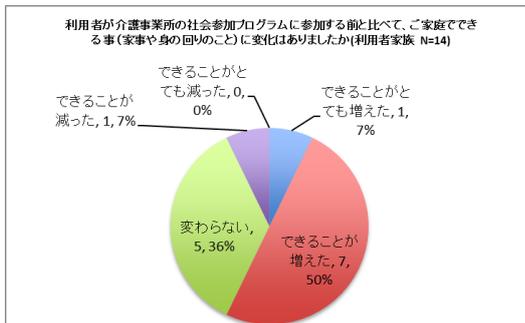
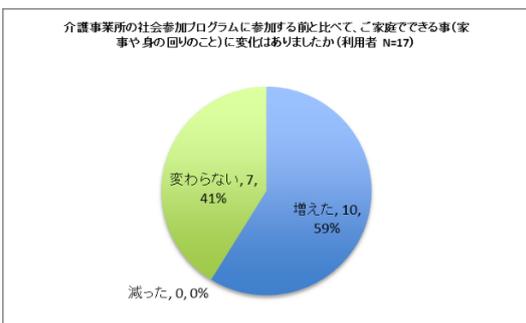
【リハビリへのモチベーションの維持・向上】

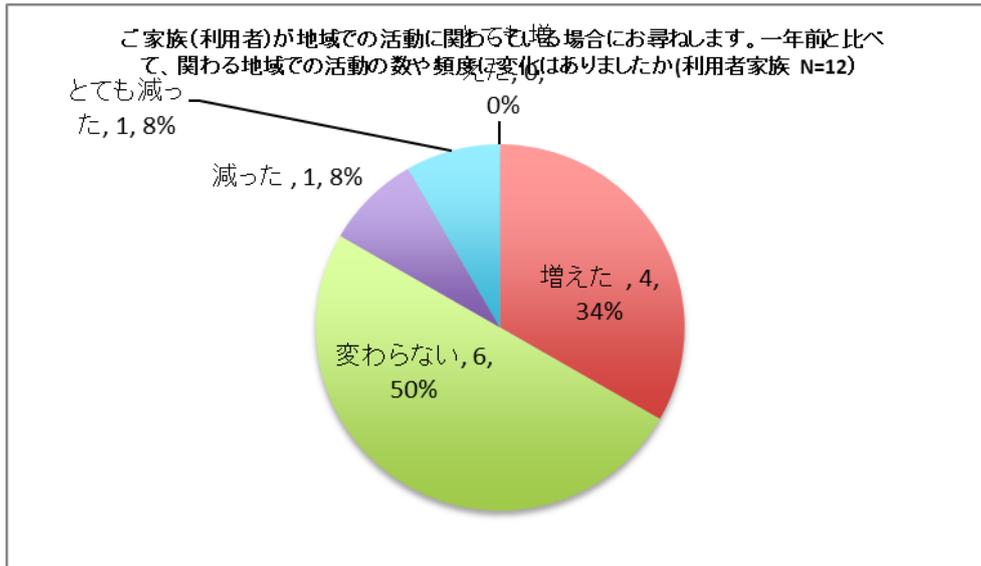


【自己肯定感・効力感の向上】

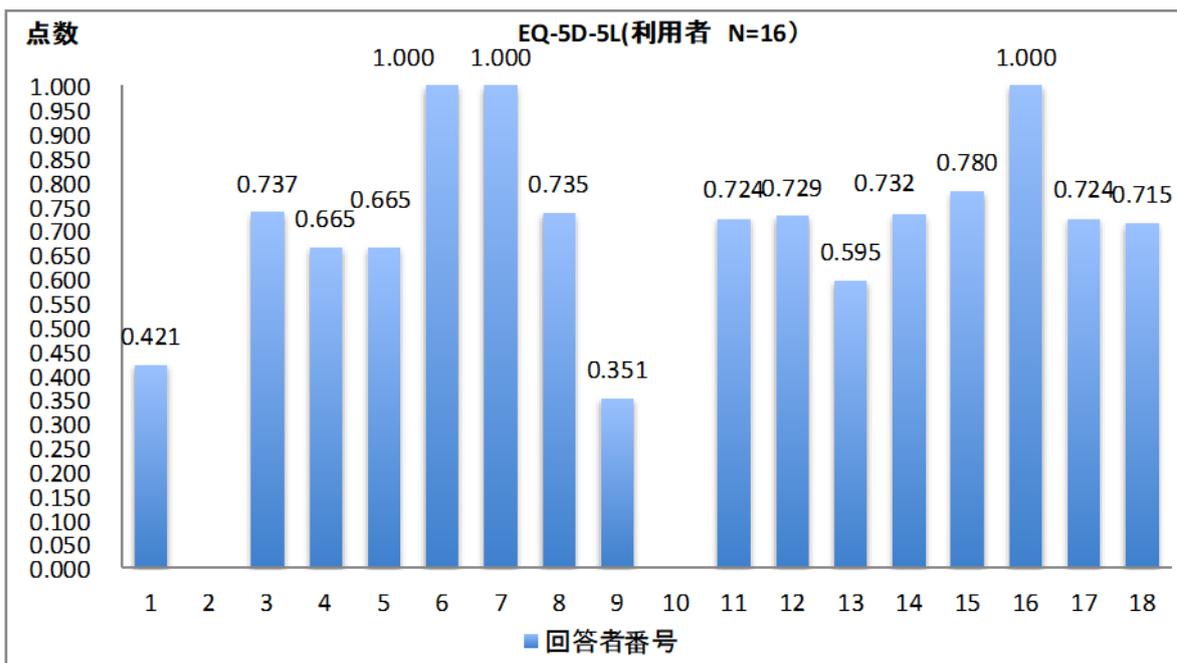


【家庭・地域内での役割が増える】





【生活満足度の向上】



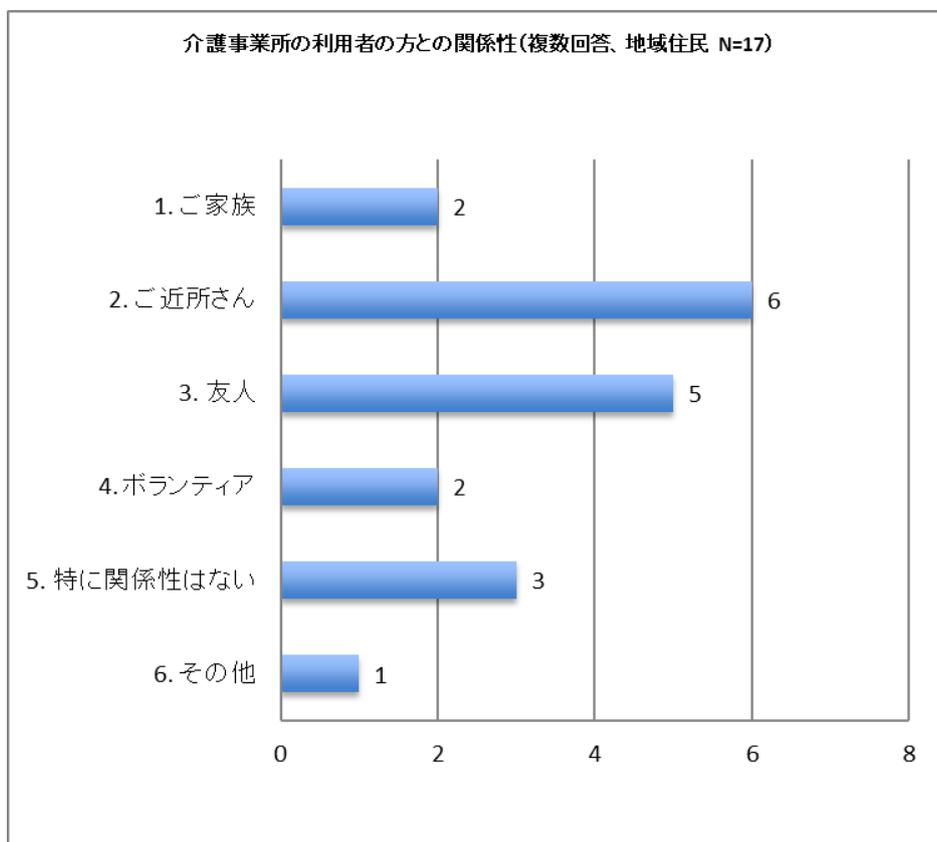
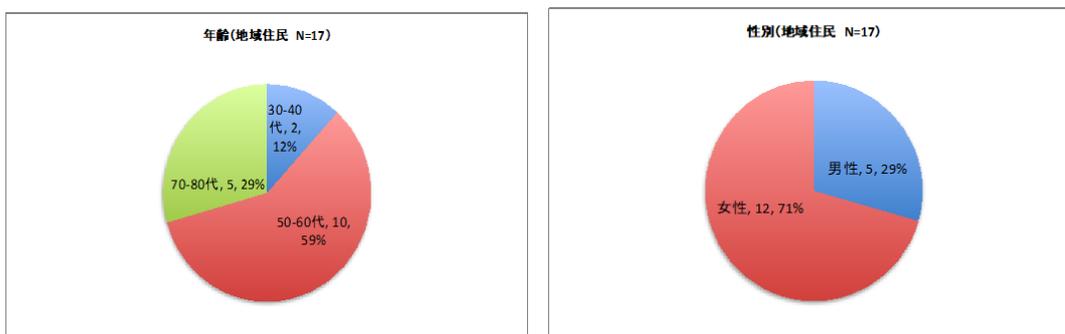
② 地域に関するアウトカム

<回答者の属性>

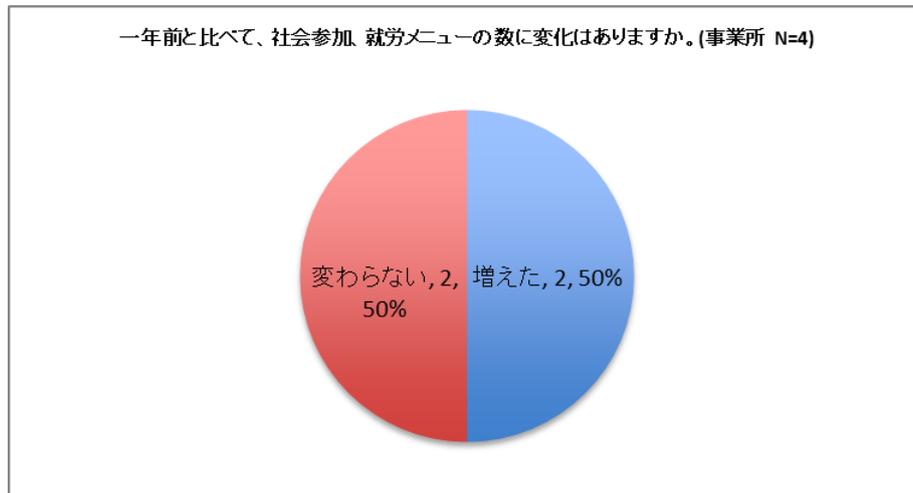
事業所：

- ・ NPO 法人 つどい（デイサービス）
- ・ 株式会社 浪漫（小規模多機能居宅介護）
- ・ 株式会社 ユニティ（デイサービス）
- ・ 霞ヶ関南病院（デイホスピタル）

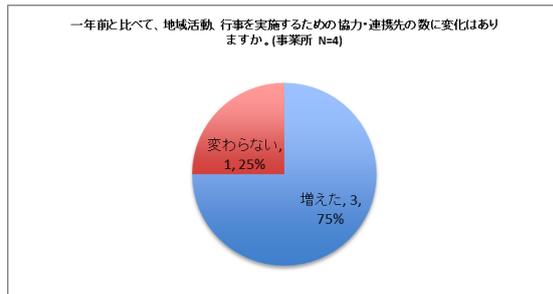
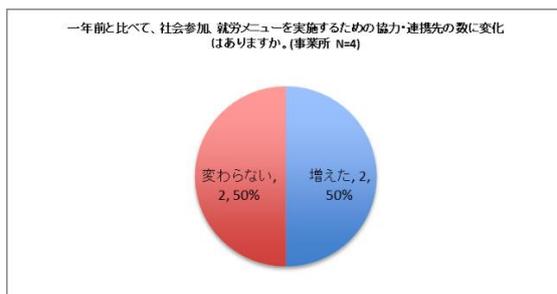
地域住民：



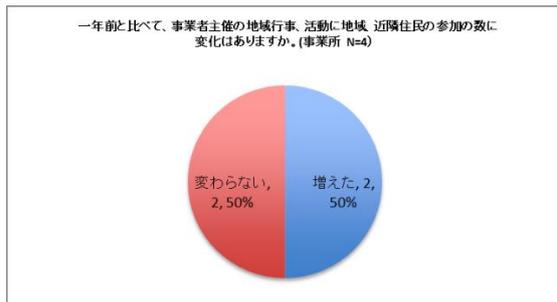
【就労メニューが増える】

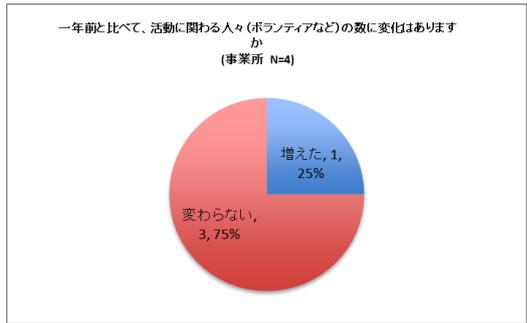
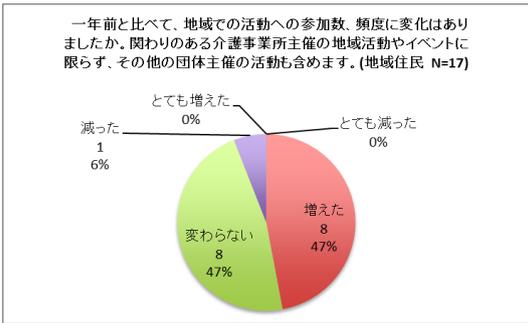


【協力・連携先が増える】

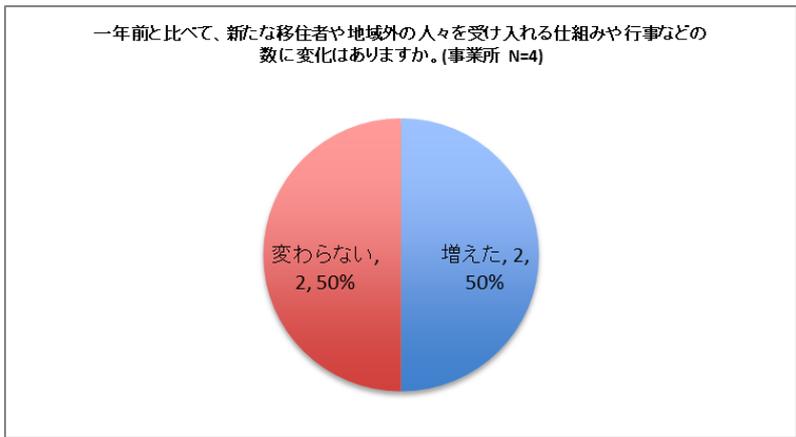


【住民の地域活動への参加の増加】

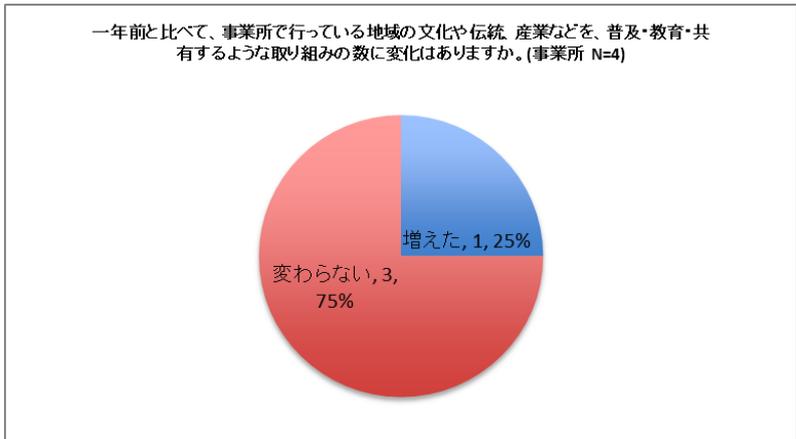




【交流人口が増える】



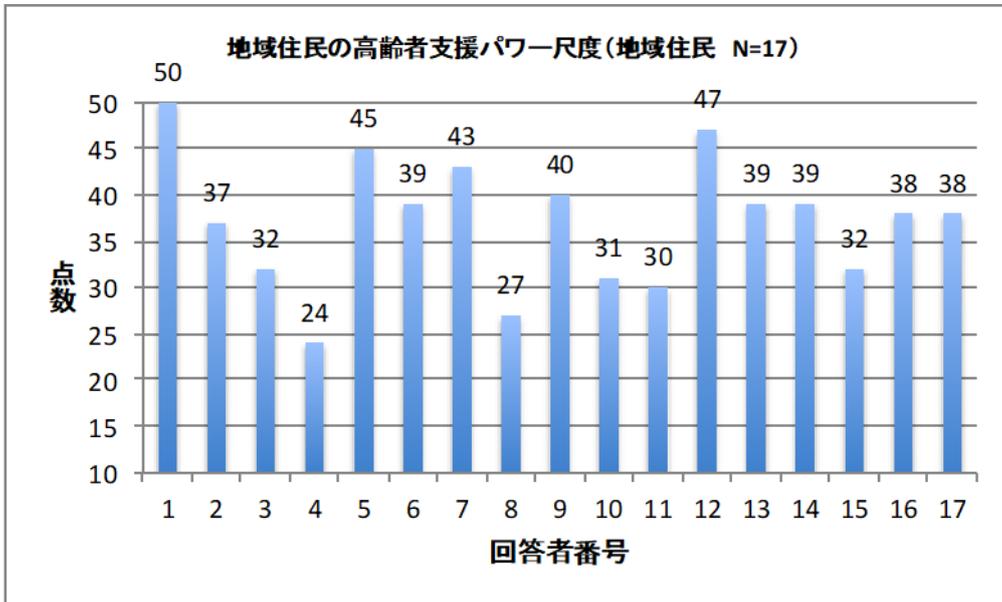
【地域の文化、伝統、産業の伝承】



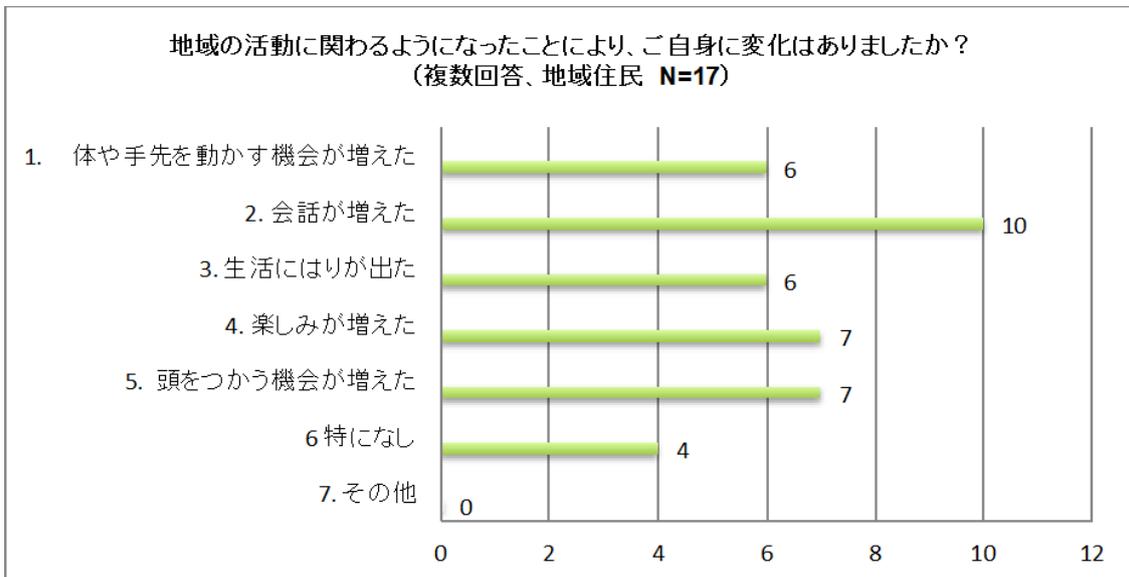
利用者や地域住民の取り組みにより発見された、新たに生み出された地域資源（人的ネットワークやコミュニティ、人々が集まる場など）の具体例（任意、自由記述）。

<p>旅行の会</p> <p>介護サービス提供時間に社会参加訓練の一環として小学校へ行き、下校時の挨拶運動、学校内の掃除、遊具のペンキ塗り、雑巾寄贈を行うことで、小学校とのネットワークが生まれました。スタートしたばかりで今はお互いを認識し合うことを目標に活動しています。</p>

【高齢者、社会的弱者への理解が進む(ソーシャル・インクルージョン)】



【担い手自身の介護予防、健康増進】



地域の活動に関わった感想など（任意、自由記述）

普段顔を合わせる事のない方との交流が増えました。今まで知らなかった地域の情報を知ることができました。

始良市の総合事業・介護予防になる健康体操などで自分の自治会以外の所に行って活動する様になってたくさんの人たちと出会い、私の方が元気をいただいています。

地域でのクリーン作戦に参加した。地域もきれいになり、参加者同士の交流もできよかった。

地域活動に参加してみて初めて高齢者、地域活動の問題点について知らないこと、また理解していないことが多いと思いました。

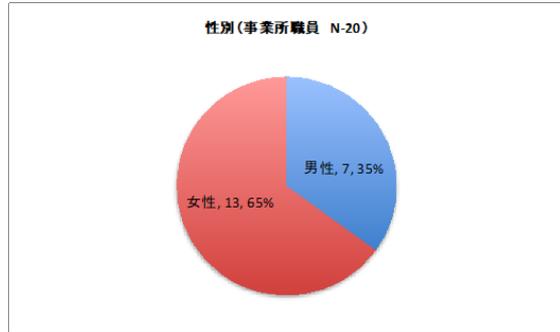
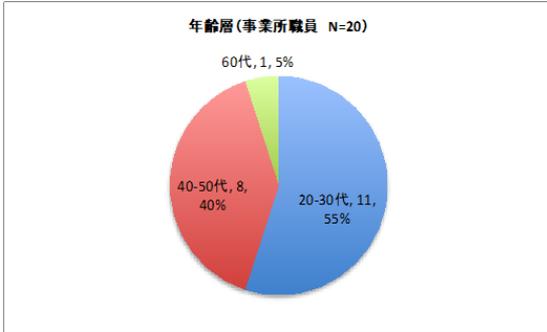
ご近所の人々との関わりが増えた

今まで挨拶程度の人たちとの会話が増えた

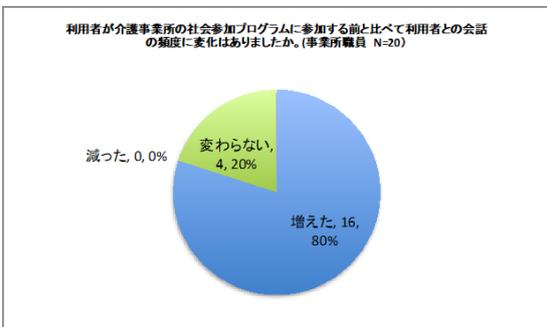
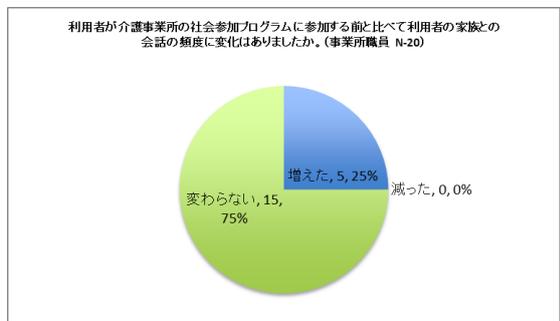
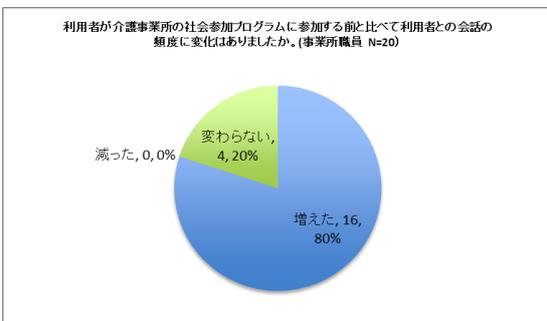
両親を亡くして利用者様が自分の親の様に感じ、楽しく会話などができてよかったと思います。

③ 介護事業所、職員に関するアウトカム

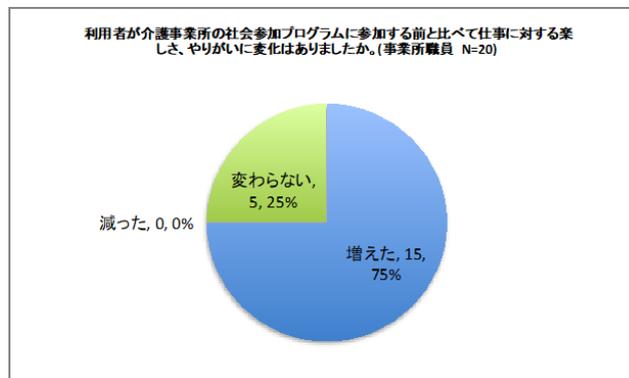
<回答者の属性>



【コミュニケーションが向上する(利用者、家族、職員同士)】



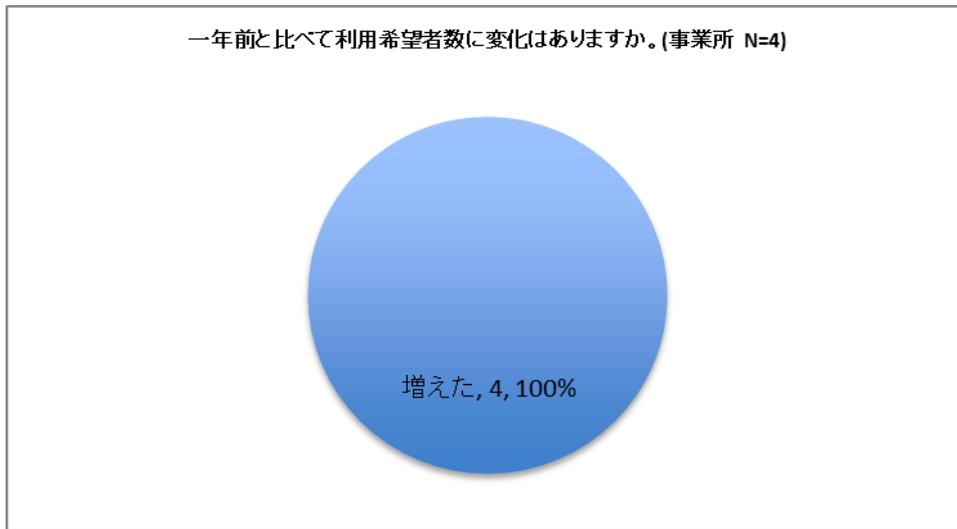
【仕事へのモチベーションが向上する】



利用者の自立支援や社会参加、就労が進むことにより生まれた仕事に対する意識や考え方の変化（任意、自由記述）。

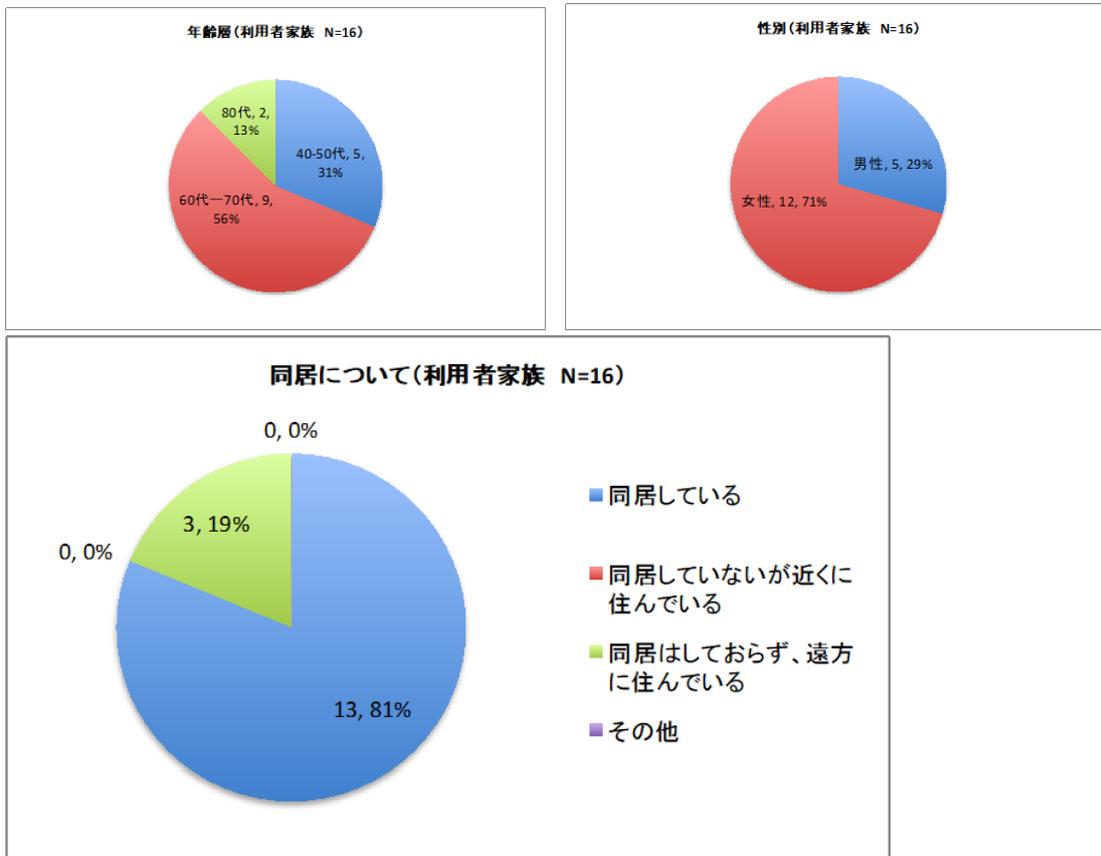
足に痛みがあり、外に出ることで、人と関わることで、痛みを考える時間が減り、傷みが気にならなくなるという話を聞き、それに関わることができて嬉しい気持ちがより強くなった。
事業所を利用者は介護を受ける対象者としての見方が意識的にも無意識的にもあったと思います。それが、社会参加することを共に動いていくことで、環境づくりすることで、その人が社会参加できて行けることに気づいた。大きな変化です。
ご利用者と一緒に歩くことで、歩行状態、身体機能を評価する機会になった。「お金をもらったら、〇〇を買いたい」と笑顔で答えられるご利用者と一緒に楽しみながら取り組んでいます。
日頃の色々な場面で自立支援や社会参加につながることを意識するようになった。
その方にとっての生きがい、楽しみ、活力とは何か、どんなことをこれから求めているのかなど深く考えるようになった。
ご利用者にとって社会参加がどのような意味があり、どう展開していけばいいのか考える様になりました。また、ご利用者の可能性を考える良い機会となっています。家族の方へ報告することで、その人の暮らしを知ることができたり、また家族にとっても新たな発見がある様で、日常の活動につながることもある様です。
より利用者の求めているものに対して深く情報を得て関わりを持つようになった。
ご自身でできることできないことの線引きが可能になった。
ご利用者様が社会とつながることにより、間近に接していた自分も嬉しくなった。本人様も活動意欲の向上にもつながっているので、他の方への提案もしていけたらと思う。
一週間のスケジュールを確認するようになりました。コミュニケーションが増え、活動など交流が増えるようになった。参加することになり、自分の役割が分かってきて、責任感が生まれた。
ご利用者様の目標や希望を聞き取るスキルが以前に比べ向上した。ご利用者様の将来の目標の先に目を向けられるようになった。ご利用者様と話たい、話すことが楽しいと思えるようになった。
通所介護のイメージが高齢者の預かりの場といったものではなく、利用される方々が再度もしくは新たな生きがいや役割を見つけていく場所だという認識に変化しました。
社会参加で子供達と嬉しそうに触れ合う姿を見るとお誘いして良かったと思います。これからも他の方々と一緒に参加できるようにしていきたいと思います。

【利用希望者数の増加】

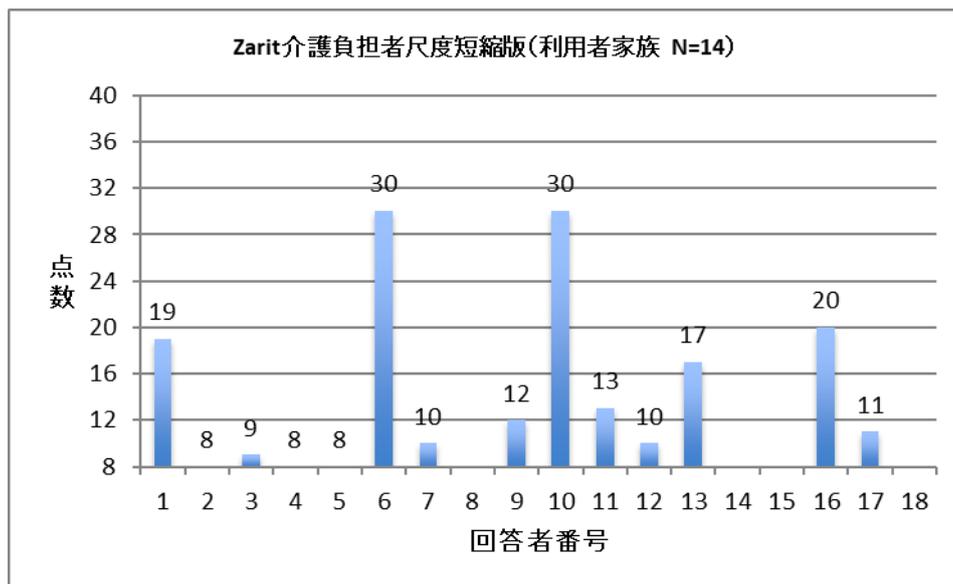


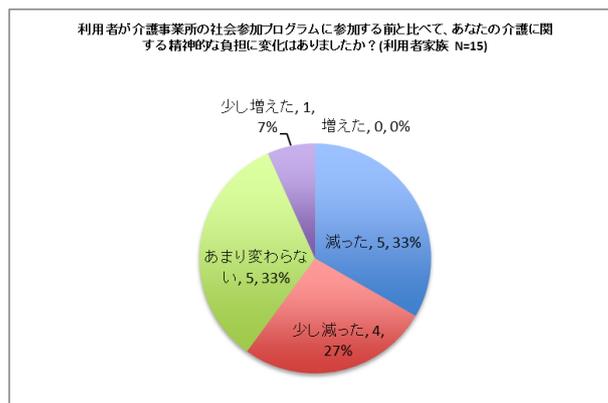
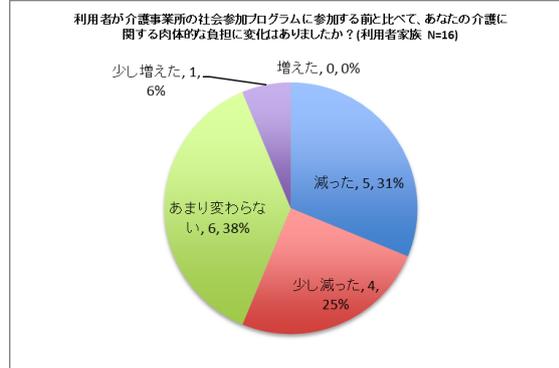
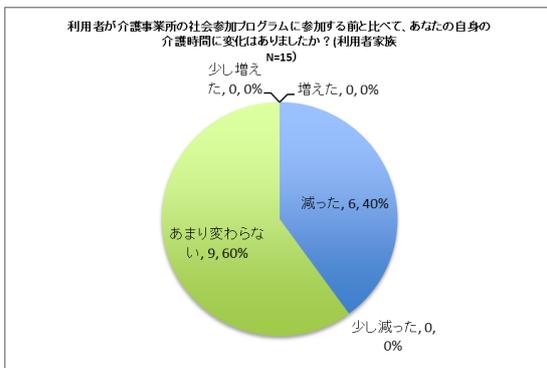
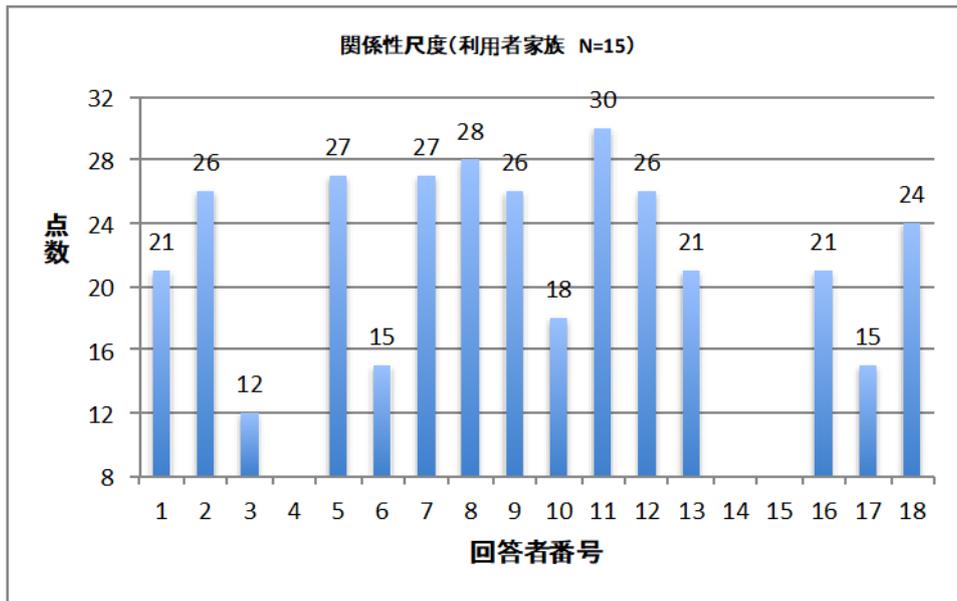
④ 利用者家族に関するアウトカム

<回答者の属性>



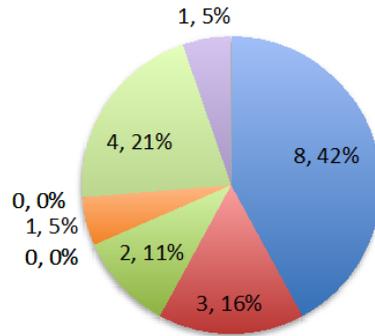
【家族間関係の変化】





利用者が介護事業所の社会参加プログラムに参加する前と比べてご自身の生活環境に変化はありましたか。
(複数回答 利用者家族 N=16)

- 1. 自分の時間が増えた
- 2. 自分の時間が減った
- 3. 家族で過ごす時間が増えた
- 4. 家族で過ごす時間が減った
- 5. 仕事(パートを含む)を始めた
- 6. 仕事(パートを含む)をする時間が増えた
- 7. 仕事(パートを含む)をやめた
- 8. 仕事(パートを含む)をする時間が減った



つながる・役割・ハタラク

～介護サービス事業から広がる「社会参加活動」の始め方～



一般社団法人 人とまちづくり研究所



平成30年度 厚生労働省 老人保健健康増進等事業
介護サービス事業における社会参加活動の適切な実施と効果の検証に関する調査研究事業

目次

Contents

- p.01-02 はじめに、目次
- p.03-04 なぜ社会参加なのか？
- p.05-06 社会参加までの道のり
必要な7つの力
- p.07-08 事例(1) ユニティ(豊島市)
- p.09-10 事例(2) 熱心會
(倉敷市・岡山市ほか)
- p.11-12 事例(3) かめキッチン(藤沢市)
- p.13-14 事例(4) つどい(横浜市)
- p.15-16 事例(5) よかあんべ(横浜市)
事例(6) 東五反田地域密着型
多機能ホーム(品川区)
- p.17-18 事例(7) せんだんの丘(仙台市)
事例(8) アール・ケア
(玉野市・岡山市ほか)
- p.19-20 計画書への記載例
- p.21-22 自治体の声(岡山市)
まとめ

豊島市の連携介護事業所「リハケアガーデンネクスト」では、利用者が、地域の小学校を訪問し、清掃や登下校時のあいさつ運動などを担っています。



「事業所」の研究の内容をもちに、利用者が、家庭や事業所、そして地域で役割を持って参加、はたらくことをどのように始めたらよいのか、どのような準備が必要なのかをまとめたものです。また、数としては、それほど多くはありませんが、全国の介護事業所では、業種や規模を問わず、チャレンジが始まっています。こうしたケースも参考に、皆さんの事業所でも新たな活動がスタートするきっかけとなれば幸いです。





「社会参加」と聞くと、多くの介護事業所が「私たちの事業所も要介護などを迎えて、利用者と地域の交流をしています」と説明されると返します。たしかに、夏祭りも社会参加のひとつです。しかし一方で、デイサービスなどの日常を見ていくと、利用者は、施設内ですっと時間を過ごし、あまり外部とのやりとりもないまま一日が終わるといふ風景もそう珍しくありません。介護保険サービスを利用し始めることで、その人がもともともっていた地域のつながりや友人知人のネットワークが切れ、てしまうケースが多いのも事実です。年に数回のイベントで地域と交流していても、日常がもし地域や社会と隔絶しているのであれば、十分に社会参加をしているとは言えません。

この冊子は、厚生労働省老人保健健康増進事業「介護サービス事業における社会参加活動の適切な実施と効果測定に関する調査研

事業所スタッフの声



ご利用者と一緒に歩くことで、歩行状態、身体機能进行评估する機会になった。「お金をもらったら、〇〇を買いたい」と笑顔で答えられるご利用者と一緒に楽しみながら取り組んでいます。



ご利用者にとって社会参加がどのような意味があり、どう展開していけばいいのか考える様になりました。また、ご利用者の可能性を考える良い機会となっています。家族の方へ報告することで、その人の暮らしを知ることができたり、また家族にとっても新たな発見がある様で、日常の活動につながることもある様です。



ご利用者様の目標や希望を聞き取るスキルが以前に比べ向上した。ご利用者様の将来の目標の先に目を向けられるようになった。ご利用者様と話したい、話すことが楽しいと思えるようになった。



通所介護のイメージが高齢者の預かりの場といったものではなく、利用される方々が再度もしくは新たな生きがいや役割を見つけていく場所だという認識に変化しました。

社会参加で子供達と嬉しそうに触れ合う姿を見るとお誘いして良かったと思います。これからも他の方々と一緒に参加できるようにしていきたいと思えます。



地域の声



地域活動に参加してみて初めて高齢者、地域活動の問題点について知らないこと、また理解していないことが多いと思いました。



役割を亡くして利用者様が自分の役割の様に感じ、楽しく会話などができてよかった思います。



なぜ社会参加なのかなのか？

社会参加活動には、一体どのような効果があるのでしょうか。

活動をはじめた本人では、効果が向上したり、身体機能が向上することもあります。

また、その人の変化を通じて、家族、地域の人、事業所のスタッフなどにも変化があります。

こうした活動は、介護事業所内のアクティビティの「コマ」という意味合いを超え、文字通り、地域社会全体に様々な波及があります。文字通り、社会に参加することで、地域における人と人のつながり、生霊系に変化をもたらすのです。

本人(利用者)の声



小学校ボランティアなどの社会参加活動を通して、今は体がいうことを聞かないことも多いが、参加したいという気持ちを持つことが増えた。今後も体が動くなら色々なことに参加したい。

(80代男性・通所介護事業所)



弁当の作業(弁当箱にスタンプを押す作業)を行う事で愛着が出て、お店までお弁当を購入するために行った。

(70代女性・通所介護事業所)

家族の声



「折り紙や塗り絵などしたくない、自分はまだまだいろんなことができる」という父の言葉を頼りにデイサービスなどを探してきました。(他のメンバーと一緒にいたらく姿をみて)あんな様子の父を久しぶりに見ました。本当に嬉しかったです。



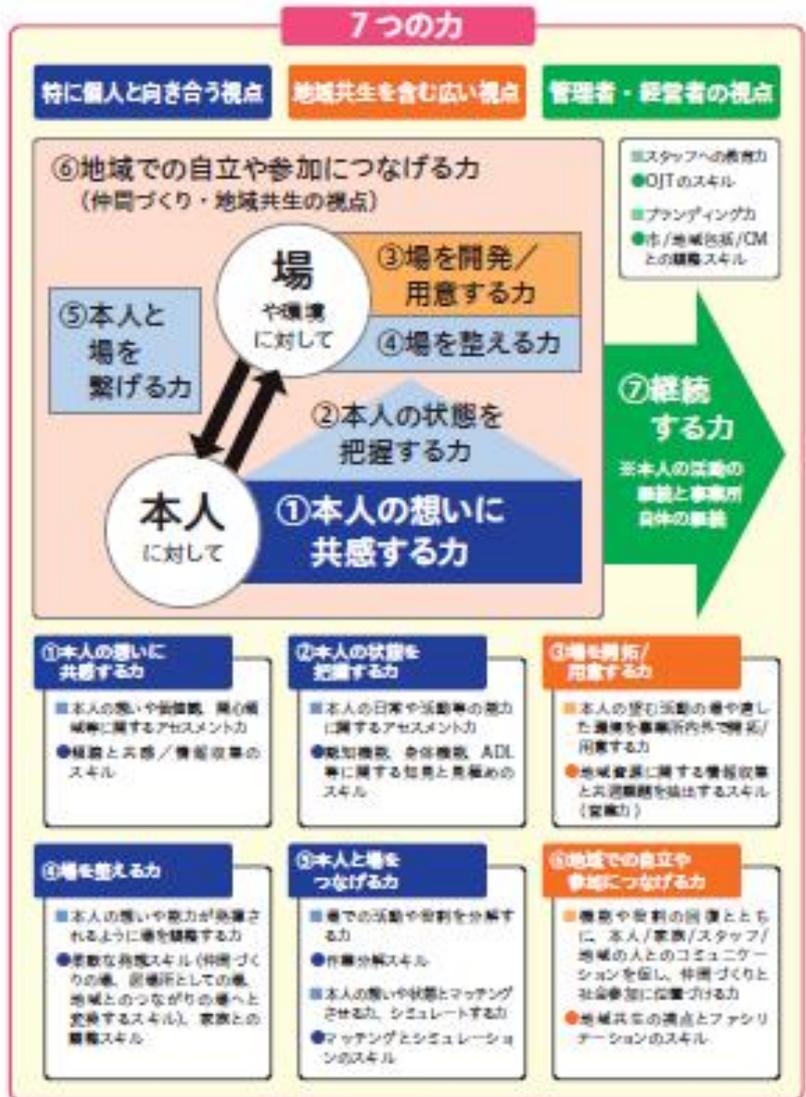
(デイサービスに通う)以前は、家で暗く曇り込んでいましたが、そこにいた人たちの明るさが伝染したのか、洗車という社会的なつながりが良かったのか、以前の父の明るさを取り戻していったようです。今も道に迷うことや、鬼の形相で怒ることもありますが、そんなことより友人ができたことが嬉しく思います。

活動がうまくいくために、 必要な7つの力

社会参加活動を成功させるためには、どのような力が必要になるのでしょうか。今回の調査では、こうした活動に取り組みキーパーソンの動きに注目し、共通の要素を整理しました。

図のような7つの力が必要となります。こうしたことを一人で行うのが難しいケースも少なくないと思いますが、これらはチームで分担することもできます。

社会参加活動の事例を参考に、活動を始めても、どうもうまく行かないという場合には、前提となるこうした要素が不足している可能性があります。自分たちは、いま、どのようなことができていて、どのようなことが課題になっているのか、必要に応じて検討してみることで、解決の糸口が見つかるかもしれません。





社会参加活動までの道のり

介護事業所の中には、「社会参加活動」と言われても、何をすればいいのかイメージできないところも少なくないと思います。全国の事例を通じて、利用者の参加・はたらくの実現・継続には、どのような道のりがあるのかをまとめました。

1 そもそも、何をすればいいのか？

一口に社会参加といっても、軽度から重度までの人がいるので、謝礼の発生する範囲から家庭内での役割づくりや買い物といったものまで様々です。利用者のできることとやりたいことをきき人とアセスメントすることがスタートラインとなります。(P.09、P.16、P.17、P.18参照)

2 地域でしごとや役割を見つけるには？

利用者が得意なことやできることを起点に、地域の中でそれができる場所や仕事を発見してくれるところを探します。一般企業や商店、自治会などに尋ねてみることもできますし、隣近所の人などがあれば、そこで探すこともできます。最初は無理でスタートし、信頼関係を築く中で、謝礼を支払う作業ボランティアに移行するケースもあります。(P.07、P.13参照)

3 外に出て、人員は大丈夫？

従来の運営方法のまま、それに加えて、外に出る活動をするに介護スタッフが足りなくなるという懸念もあります。しかし、実際に活動をしている事業所では、室内も外でも、利用者によることを積極的にしてもらうことで、こうした懸念は起こっていません。社会参加を進めていくには、「してあげる」型の運営体制から転換する必要があります。(P.07、P.11参照)

4 謝礼が発生しても大丈夫？

介護保険サービスの利用者が、社会参加活動を通じて、作業ボランティアとして謝礼をもらうことは認められています。ただ、施設内ではそれほど多く事例がある数ではないので、地域によっては慣習がなく、否定的な解釈がなされる場合もあります。会議などを発案させず、地域通貨のようなポイント制にする方法をとっているところもあります。(P.11、P.13参照)

5 自治体はどう思うだろうか？

社会参加活動は、異業支援という介護保険の本来の目的に沿ったもので、自治体の中には、積極的に推進しようというところもあります。ただ、活動内容によっては慎重な判断がなされる場合もあります。活動の目的や他の地域の事例なども話し、丁寧にコミュニケーションをとることが大切になります。(P.19、P.23参照)

6 継続発展させていくには？

社会参加活動は、利用者の意欲や活動性が落ちさきかけになります。介護サービスの利用時以外の、社会活動や就労などにつながるケースもあります。活動をより発展させていくために、就労継続支援との連携や、一般の企業活動の中にも展開できる動きもあります。(P.09、P.13、P.15参照)





コンビニの食品整理の作業

知り合いだったコンビニエンスストアの人に、何かできることはないか聞いてみたところ、商品整理の仕事を任せられました。



弁当箱にスタンプを押す作業

事業所の中で空き時間を見つけてできる作業なので、多くの人が参加できます。

中には作業がきっかけでこの弁当を買いに行く人も。

基本データ

- リハケアガーデンネクスト
(通所介護事業所)
- 利用者数(1日平均)
3時間コース：18名
6時間コース：30名
- 平均要介護度
3時間コース 支援2～介護1
6時間コース 介護1～介護2

「外にでて活動をすることに対して、当初、ケアマネさんから怪訝をしたらどうするのかなど危惧する声もありました。活動の内容をニュースレターにして届けたり、周囲の方たちにも理解してもらおうようにしています。事業所の外と内で別れると、スタッフが不足するのではないかと、いう声もありましたが、事業所内に残る利用者さんにも、自分でできることは自分でやっていたいので、人員不足を感じたことはありません。」



株式会社ユニティ
代表取締役
渡田桂太郎さん

が、有償のものも提供し、働いている方たちの通り合いにつなげていきたいと思っています。」



絵筆のペンキ塗り

教育委員会と話し合い、地域の小学校で、絵筆のペンキ塗りのほか、歌謡さ、あいさつ運動などを行っています



**ユニティ（鹿児島県霧島市）
通所介護事業所**

 **まずは、身近なところから仕事を見つけていく**

鹿児島県霧島市にある通所介護事業所リハケアアギーブネットワークでは、利用者の社会参加に力をいれてきました。代表の瀧田様太朗さんは、以前、自分の祖父が通っていたアイサービステ、夕方になると多くの利用者が交っ伏している姿を目の当たりにして、自身で事業を始めることにしました。

「その人が本来できることまでしてしまっ、何かに挑戦しようという気持ちや身体機能も落ちてしまい、介護がより必要になってしまつという悪循環を断ちたいと思いました」と瀧田さんは言います。

利用者が役割を持って、できることを見つけていきたいということで、瀧田さんやスタッフの友人や同級生などのつながりで仕事をできる先を捜索してきました。現在、コンビニや自動車販売店の仕事や、弁当容器のスタンプ押し、小学校での清掃やあいさつ運動などを行っています。こうした仕事を始めたことによる効果は大きく、要介護2だった人が、要介護状態から卒業した人もいます。当初、アイサービスの利用者だった人が卒業し、今度はアイサービステがボランティアとしてはたらくようになった人もいます。

「役割や仕事の先には、必ず地域や企業、子供たちなどの人がいるので、交流も生まれています。現在は知覚不全ボランティアという形でやっています



模擬就労スペース Chaya-cafe

創心會施設のカフェで就労体験している介護保険サービス利用者
(写真中央)。

者の意識も変わってきました。」まず、利用者の自己肯定感につながっていると感じています。そして、「こうした取り組みを続けてきた結果、利用者や家族、スタッフが、介護保険サービスの利用の先にある目標・次の人口を考慮するようになっただのではないかと感じます。」創心の専任役員・河野美史さん。

一方で課題もあります。生活機能の回復し、就労意欲の高い人が増えても、家族が「今更そこまではなくても」と反対されることもあり、更に、障害者・高齢者が参加・就労する場所、受け皿を増やすなど、環境の整備も進めていかなくてはな



青ネギの加工・出荷作業

介護保険サービスを利用しながら関連法人が運営する就労継続支援事業所(A型)で、社会参加をする様子。

りません。

創心會グループの代まで作業療法士の二神優一さんは、「単に『仕事』に従事するということに意義を向けるのではなく、働くことで役に立てるという効力感や、社会の中に自身の居場所を構築することで、人としての生きる喜びが得られるという普遍的な価値観に基づく取り組みと、その新発活動で地域を巻き込んでいくことがとても大切だと考えています。」

また、当事者の自立が促進され、社会参加やQOLが向上すれば、家族にも同様の効果へ参加促進のQOL向上が期待できるのです。」と言います。

基本データ

- 創心會デイサービス事業
(通所介護事業所)
 - 利用者数：2,105名
 - 平均介護度：2.10
(2019年2月末時)
- ※関連法人
農地所有連絡法人
合同会社ど根性ファーム
株式会社リンクスライブ
(就労継続支援A型、B型)

当社は訪問看護リハビリ事業やデイサービス事業を中心に、自立支援介護に力を入れ、活動・参加へのアプローチに積極的に取り組んできました。これらは地域社会から寸断された環境では成しえません。利用者が要介護状態になったことで地域社会から切り離されることを防ぐためには、利用者を通じて地域社会にも働きかけていくことが重要です。利用者や地域社会を結び、そこに居場所・出荷・役割を創っていくことが、自立支援、活動・参加へのアプローチの在り方だと思います。



株式会社 創心會
代表
二神 優一さん



ピエール館の結束作業

利用者の社会参加の入口として、利用者の目標に合わせた就労訓練として実践している。

株式会社創心會(豊田市・岡山市ほか)
デイサービス事業



社会参加の“入口”を意識したデイサービス 障害者就労や一般就労につなげることも

岡山県各地でデイサービス事業などを運営する創心會では、2010年頃から、利用者の社会参加や就労に力を入れてきました。当時、リハビリを通じて、生活機能を回復しても、その先に行く場がなく、機能が再び低下してしまうことに危機感を持ち、経営層を中心に議論を重ねました。その結果、医療・介護保険制度の中で考えられるのではなく、より広く、地域社会の中での居場所・出番・役割を創る仕組みを作らないといけないという結論に達しました。それ以来、強いリーダーシップの下、製造法人を立ち上げながら、農業や食に関係する事業を開始してきました。現在製造法人には、就労継続支援A型、B型を運営する株式会社に加え、農地所有資格法人があります。

デイサービスでは、リハビリの一環として、箱の組み立て、パンづくり、事務系の作業など様々な作業を行っています。こうした作業を通じて、生活機能を回復した人の中に、福祉就労や一般就労につながっていくケースがあります。農地所有資格法人で生産している特産の青ネギは、農作業や加工、箱の組み立てなどを、高齢者や障害者などで分担しています。また、デイサービスの施設に併設されている地域交流スペース(Café)では、地元のパン製造販売会社の協力の下、パンの製造販売をしており、高齢者や障害者が働く場となっています。社会参加や就労を通じて、関係



調理するメンバー

地域のボランティアと介護サービスの利用者がまじり、分担しての調理。

3000円ほどが支払われています。レストランの営業以前から調理を遊じた経験が豊富などほしてきましたが、謝礼が支払われるようになってから、利用者の盛り合いも増したと言います。デイサービスに通う中で、自分の役割を見出し、地域のボランティアの人たちと一緒に作業をし、地域の人たちが食事を食べにやってくる、こうした一連の



ピュッフェ形式のランチメニューは、種類も豊富

会員制のボランティア団体(亀山縁楽園)に入ると割引の特典もあります。

風景が、利用者の喜びにつながっています。理事長の鈴木しげさんは、「介護保険の利用者であってもなくても、障害があってもなくても、それぞれの人がやりたいことと思うことを実現するために、様々な事業をしてきました。法人としては、将来的には、介護保険事業からの『卒業』も視野に入れています。」

基本データ

- カルチャースクール亀山
(通所介護事業所)
- 利用者数：6.5名(1日平均)
- 平均介護度：1.5
- 主な社会参加の活動
かめキッチンで提供する
惣菜の調理

ここでの活動は、地元のボランティアの方と介護サービスの利用者の方たちが中心です。介護スタッフは、関わりを最小限にするよう努めています。介護スタッフが何でもやろうとすると、ボランティアさんが活躍する領域がなくなってしまい、楽しくボランティアができなくなってしまいます。



NPO法人
シニアライフセラピー研究所
理事長
鈴木しげさん



親子で楽しむレストラン

同じ建物内には、ヨガや子育て関係のイベントなども開催されています。高齢者から子どもまでがまぎらひある拠点になっています。

カルチャースクール亀古(神奈川県藤沢市) 透所介護事業所

 **高齢者がはたらく地域レストラン「かめキッチン」**

神奈川県藤沢市にある「かめキッチン」は、親子連れや地域の人でにぎわう想元でも人気のレストランです。様々な惣菜や「はん、汁物、無添加のパンなど、ビュッフェ形式でランチを食べることが出来ます。ここで提供される惣菜づくりには、アイサービスの利用者は、積極的に参加しています。アイサービスの利用者は、施設訪問の中で、食材の下ごしらえや調理、味付けなどを行っています。

このレストランがスタートしたのは、2018年6月。アイサービスが、無償回復の場としてだけでなく、社会と接点を持ち、生きがいにつながる場になればとの思いがありました。この場を運営するNPO法人シニアライフセフティー研究所は、介護保険事業だけでなく、障害福祉事業、地域ボランティア事業など40を超える事業を幅広く運営しています。このレストランではたらくのは、アイサービスの利用者ですが、同じ施設には地域のボランティアも数多く活躍しています。お昼にやってくるのは、福祉作業所でつくったパンを買いに来たお客さんもしれば、交流スペースでヨガをやっていた女性たち、小さい子どもと一緒にママさんたちなど幅広い地域の人たちです。

ここではたらくアイサービスの利用者は、有償ボランティアとして謝礼を必ず取っています。2018年現在、時給に換算すると、2000円から

と就労継続支援B型事業所ではたらく若者が交流をすることもあります。

2015年から特に力を入れているのは、休耕の棚田を利用したハスの栽培と加工品づくりです。長浜市は古くから観音堂印が盛んで、ハスは縁が深く、地元農家の協力も得ながら、地域振興の起爆剤にしたいと考えています。

さらに積極的な地域振興をしていくために、2018年には合同会社を設立。放棄される予定だったビニールハウスで、シイタケ栽培を始めました。介護保険事業とは関係なく、地域の高齢者がシイタケづくりをしています。

「同じような事業を通じて、いろんな人がごちやまぜになって、役割やしことがある地域を作っていきなさいです」川村さんの夢の地域を形にする作業は続きます。



1 シイタケ栽培

地元で栽培をしていた農家が廃業となり、施設が利用されない状態でした。

2 収穫作業

地域に住む高齢者が収穫・収穫の作業をして、道の駅などで販売しています。

3 香水

香水を製造する会社の協力で作られたハスの花を使った香水。

4 染物

ハスを使って作られた染物。

基本データ

- ダイサービスつどい (通所介護事業所)
- 利用者数：22名(1日平均)
- 平均介護度：要介護1～2

※同じ法人で、
就労継続支援B型事業所、
放課後児童クラブなども運営

高齢化が進むこの地域をなんとかしたいというのが、原点の想いです。そのためにも、高齢者から子どもまで、障害があってもなくても、みんながごちやまぜになって、地域にしかることを作るしかないという思いでやってきました。介護事業だからとか、NPOだからとかではなく、やりたいことを実現するためにどんな法人、どんな仲間で作るかという発想が必要ではないかと思っています。



代表NPO法人つどい
理事長
川村美津子さん



休耕田を利用したい人の数増

専任ではさくから農畜関係の職人の
力には限界が大きい



認定NPO法人つどい(滋賀県長浜市)
通所介護事業所



いろいろな人がまざり、仕事ができる 地域に産業を作っていきたい

滋賀県長浜市の西黒田地区は、人口2千人余り、高齢化率32%の地域です。この地区を拠点にするNPO法人つどいは、通所介護事業のほか、就労継続支援B型事業所、放課後児童クラブ、引きこもりなどの働きづらさを抱えた若者の支援などを幅広く活動しています。代表の川村美津子さんが事業を始めたのが2011年。はじめから、いろいろなことをやろうと思っていた訳ではなく、ダイサービスを始めたら、こういう人がいて困っている、こういう場がないかと、地域の人から困りごとが持ち込まれるようになり、どんどん事業が増えていきました。

「介護保険事業がしたいというよりも、この地区に産業を作りたいというのが根幹にある思いです。農業にしても担い手が高齢化して耕作放棄地が増えている。高齢者も職業者も含めて、いろいろな人が働ける場を作ったり、仕事を作っていきたいんです。」

ダイサービスでも、利用者は、できることは自分であるのが基本。食事の支度や清掃などの一部も利用者ができるほか、緑茶の煎じをしたり、耕作放棄地を利用した農作業などもしています。ダイサービスでは、仕事してもらった利用者には、金太郎マネーという独自のポイントを発行し、事業所で買い物に行った際に物が買える(事業所の負担)とそうにしています。仕事を通じて、高齢者



つながる・役割・ハタラク ～介護サービス事業から広がる「社会参加活動」の始め方

長野から伺った話を聞き

「長野市では、小規模多機能型居宅介護サービス事業所を開設し、その人が社会参加できるようにしています。」

**品川区立東五反田地域密着型多機能ホーム
小規模多機能型居宅介護/認知症グループホーム**



建物内にある駄菓子屋スペース
地元の子供たちが立ち寄る人気スポット。親の世代も、この場所に関心を持ち立ち寄ってくれるようになりました。

基本データ

- 品川区立東五反田地域密着型多機能ホーム
(小規模多機能型居宅介護・認知症対応型共同生活介護)
- 【小規模多機能】(2018年2月現在)
- 登録者：25名
週いの平均は10名程度
- 平均介護度：2
- 【グループホーム】(2018年2月現在)
- 登録者：18名
- 平均介護度：2.4

「働きたい」の声に応じて、子どもや地域の人が集まる場に

東五反田地域密着型多機能ホームでは、2017年に開設以来、認知症の人のできることや、働きたいという思いを実現することに力を入れています。ここを運営するのは、岡山県に拠点を置き、認知症ケアで全国的にも知られるきのこグループの社会福祉法人です。施設長の鈴木裕太さんは、16年前に、このグループに就職し、都内の施設で働いてきました。「重度の認知症の人やBPSD(認知症に伴う行動・心理症状)がある人へのケアには力を入れてきましたが、軽度の人を中心に、「まだ」できることがある」「働きたい」「自分で使える

お金を持ちたい」といった声には十分向き合ってこれなかったという思いがありました」と鈴木さんは言います。

連携している基幹系の福祉作業所で作っているおむねなどを仕入れ、施設内の専外スペースで販売をしたり、施設1階のスペースを使って駄菓子屋をしたりしています。接客やお金の計算をするのは、グループホームの入居者や小規模多機能の利用者です。地域の人や子供たちが集まる場所になり、それまで働いていたことが多かった人が、そろばんを勉強して持っている姿が見られるようになったと言います。



謝礼の入った袋を見せる男性

はたらく利用者には、義援ボランティアとして謝礼が支払われます。謝礼を手にした男性は、自分で稼いだお金で洋服店に行きたいと願っていました。

DM便の配達

周辺に配布するDM便が、事業所にまとめて置かれます。そのDM便を、利用者と介護スタッフがベアになって、車で配って歩きます。

 **株式会社浪漫**
(鹿児島県始末市)
小規模多機能型居宅介護



宅配事業者と協働 地域との顔の見える関係づくりに



外へ出る機会を増やし、介

こうした活動を通じて、

払います。

たる謝礼の金額を謝礼へ有償

ボランティアという形で支

は、利用者に対し、受け取っ

は、利用者に支払われます。事業所

は、契約関係を結び、ヤマ

マト運輸から多額費として事

業所に支払われます。事業所

は、利用者に支払われます。事業所

は、利用者に支払われます。事業所

は、利用者に支払われます。事業所

基本データ

- 共生ホームよかあんべ
(小規模多機能型居宅介護)
- 利用者数：28名
- 平均介護度：1.85

障保険からの卒業を日刻すとい人もいます。株式会社浪漫の代表の黒岩尚文さんは、「これまでも、地域の清掃活動をしたり、自治会と一緒に夏祭りを楽しんだりする中で地元の人たちとの関係づくりをしてきました。これまでは、要介護度が重い方が中心でしたが、新しく利用される経度の人たちの中には就労意欲が高い人もいます。こうした活動で、生活の場になると同時に、顔の見える関係づくりのきっかけになれば」と言います。



つながる・検測・ハタラク ～介護サービス事業から広がる「社会参加活動」の始め方～

自宅での転倒が繰り返していたため、自宅や周辺の環境のチェックを経て運動訓練の計画が立てられました

お住まいの100段の階段

1階までには階段を自分の足で登るといふ目標は実現済み。

アール・ケア
(玉野市・岡山市ほか)
通所介護事業所



リハビリテーションを通じて、生活リズムや習慣を取り戻す



マシントレーニングの様子

目標達成へ向けた女性の意欲は高く、5ヶ月後には転倒が防げるようになってきました。

基本データ

- アイサービスセンター アルフィック (通所介護事業所)
- 利用者数：40名(定員)
- 平均要介護度：1.8(2014～2018年)

岡山県岡山市で10事業所を展開するアール・ケアは、運動訓練に特化した通所介護事業所です。介護保険事業の中では、社会参加やはたらくといった取り組みにつながるよう、筋力強化、歩行訓練やバランス訓練などを実施しています。プログラムを通じて、以前の生活のリズムや習慣を取り戻すことを目標にしています。アイサービスを利用する80代の女性は、夫が亡くなり、一人暮らしとなってから、自宅内での転倒が繰り返してい

ました。アイサービスでは、本人の状況と自宅内の環境を評価した上で、運動訓練のプログラムを計画しました。ご本人と医師の中で、夫の納骨の際には、100段ある階段が乗れず、お寺に自分の足で行くことができなかつたので、一週間で自分の足で上がれるようにしたいという生活目標が設定されました。5ヶ月のプログラムの結果、階段も歩行者として登ることができ、自宅内での転倒も防ぐことができています。



おしゃべりな利用者の方の調理の様子

地域の定例行事に積極的に参加
 社会福祉本居町で、大規模な行事の開催が、
 住民参加の行事の開催が盛ん。

せんだんの丘(宮城県山形市)
 介護老人保健施設
 通所リハビリテーション
 介護予防・日常生活支援総合事業

💡 アセスメントから始まる それぞれの目標や役割

山形市にあるせんだんの丘は、在宅復帰率が8割(2019年2月時点)の高度化型の介護老人保健施設です。同法人では、通所リハビリテーション、介護予防・日常生活支援総合事業(以下、総合事業)をはじめとする地域部門も備えており、連携したサービスにより、対象者が可能な限り在宅生活を継続できるように支援をしています。

せんだんの丘の支援相談員の三浦美さんは、「在宅生活の維持または再建にあたり、その方の社会参加を支援していくためには、最初の動き取りが大事だと考えています。日常会話のような雰囲気而努力ながら、その方の生活習慣や価値観を考慮するようにしています。そのうえで、やってみたいこと、大事にしたいことは何かをお聞きし、障害性のある計画を作成することを優先しています」と言います。

入所者の場合は、要介護度が高い傾向にあり、施設外での積極的な活動が通わないことも多いですが、なるべく「ハイハイ」や「車椅子」の練習を持つように支援しています。外出・外出の際に、いつもの席でお茶を飲む、いつものお

基本データ

- 介護老人保健施設
せんだんの丘
- 定員：100名
- 平均要介護度：3.24
- 平均稼働率：96.89%
- 在宅復帰率：80%
(2019年2月末現在)
- ※同法人で、通所リハビリテーション、介護予防・日常生活支援総合事業も運営

部屋で過ごさせる、そんな日常的なことが、「本人やご家族にとってかけがえない場面」だったりしますし、一つの社会参加の形と捉えています。

一方、通所リハビリテーションや総合事業では、「自分で食材を選んで自分で料理したい」「バスに乗ってアパートに行きたい」など、地域での活動を支援する例も多くなります。例えば「野原観察」が目標である場合、交通手段やタイムスケジュール、水分補給などのリスク管理などを、まずは「本人」に考えていただきます。そして、必要な助言を通して野原まで移動方法を整理し、現地集合を設定することもあります。実施後の振り返りを通して、自分で考えられる力、行動する力が向上し、その後の行動範囲の拡大につながった例もあります。



株式会社ユニアイ
代表取締役
山田 由子 さん

「社会参加・はたらく」を進めていくには、ケアマネジャーとのコミュニケーションが非常に大切になります。目標に向けて、屋外活動などの必要性も認識してもらい必要があります。こうした活動は必ずしも一般的ではないので、ニュースレターを作成し配布するなど、なるべく具体的な情報を届けるようにしています。

居住サービス計画書

短期目標(期間)	サービス内容	サービス種別	サービス提供事業所	頻度	期間
H28/5/1～ H28/10/31	自宅内の移動動作は手すりに頼り慣熟に行う。	インフォーマル	本人様	毎日	H28/ 5/1～ H28/ 10/31
歩き方、移動動作が安全に行え転ぶ心配なく生活できる。	日常生活動作の維持、向上を目的とした個別機能訓練を実施する。ほぐし、ストレッチ、物履、歩行訓練、レッドコード、パワーリハビリを実施する。移動動作時の見守り、声かけを行う。気分転換、リハビリの課題に屋外活動を実施する。	適所介護	リハケアガーデン ネクスト	2～3 回/週	H28/ 5/1～ H28/ 10/31

ニュースレター(全体)

リハケアガーデン ネクスト 2月号

「歩-歩-」(高齢サービス)

「動作獲得に向けて」(地域活動サービス)

「卒業自慢からの繋がりに」(地域活動サービス)

「旅行実現に向けて」(高齢サービス)

ニュースレター(詳細)

「ホングボランディア室内」 4月11日(18時～20時)

「ホングボランディア屋外」 4月19日(18時～20時)

介護サービスは計画に基づいて実施されますので、居宅介護サービス計画書で、総合的な援助方針に「社会参加」、長期目標のところには「社会活動に継続して参加」といったキーワードが記載されている必要があります。その上で、通所介護計画書には、「本人の希望」で「社会参加」をすること、その具体的な内容を記載します。



NPO 法人つながり支援
DAYS BLG | 代表
前田隆行さん



計画書の記載例

居宅サービス計画書

総合的な援助の方針

病気の進行により記憶力、判断力が低下されてきているために、日常生活に支障をきたしています。ご本人様の生活リズムを維持していくことと同時に、介護者である妻の介護にかかる負担を軽減していけるように、サポートしていきます。

社会参加、人と関わる楽しみ、食事等のサービスを目的としたデイサービスの利用。

長期目標

社会活動に継続して参加できる。

短期目標

気の合う仲間と交流ができる。

サービス内容

- 社会とのつながり
- 地域での役割を果たす
- 社会交流活動

通所介護計画書

本人及び家族の希望

- 社会参加のできる居場所がほしい
- 本人の社会参加と生きがいにつながる交流活動

午前の活動

ボランティア活動、HONDAの洗車(有償)、ショッパーの配布(有償)、近隣の草取り(有償)、庭木の剪定、BLG(通所介護サービスのある建物)の修繕、買い物、その他の中から希望する活動を選択。

留意事項

なるべく本人の意思や希望を尊重し、社会とのつながりを広げるために接点を増やしていきます。特に、社会参加活動に力点を置きます。

午後の活動

ボランティア活動、ショッパーの配布(有償)、近隣の草取り(有償)、庭木の剪定、BLG(通所介護サービスのある建物)の修繕、買い物、その他の中から希望する活動を選択。

留意事項

「仲間」と共に有償、無償のボランティア活動や野外活動を通じて、心身機能の維持を図ります。



今回の調査をする中で、ある委員の方から、「社会参加活動」という言葉自体がおかしいのではないかといい声援がありました。活動者ではなく、若い人であれば、人と交流したり、仕事をしたりすることを、わざわざ社会参加活動などと呼びたいのではないかとという疑問でした。活動であるが、認知症であろうが、その人が生き生きと暮らしていくためには、人や社会とのつながりが必要であり、その中でなんらかの役割やしごと（有償無償を問わず）が必要なのは言うまでもありません。逆に言えば、既存の制度にあわせて事業をする中で、いつの間にか、そうした当たり前のことが実現しにくい状況が生まれてしまっているという現実があるのかもしれない。

今回の事例を通じて分かってきたことは、既存の枠組みの中で、「社会参加」をどのように実現するのかという視点だけでなく、民間ビジネスや地域の活動も含め、社会全体で、要介護・要支援の人々を含む全ての人が、つながり、役割を持ち、ハタ



ラクするための、なんらかの仕事をする）ことができる社会をどのように作っていくのかという大きな視点が求めたいということです。「社会参加」をことさらに強調しなくても、要介護・要支援の人々が社会に参加できる状態をどのようにつくるのか。そのために、介護保険サービスも含めた仕組みをどのように活用しているのか、発想の転換が求められています。



「社会参加・はたらく」により 生きがいをつくる必要がある



Q&A



岡山県 社会福祉協議会
社会福祉部
社会福祉推進課 課長
百瀬一之介

Q1 介護保険サービスの利用者の社会参加・はたらくというテーマについて、自治体としてはどのようなとらえていますか？

A1 本市は、高齢者の方が長く住み慣れた地域で暮らしていくことが出来る社会を目指し、従来から自立支援を推進しています。運動による身体状態の改善だけでなく、「社会参加・はたらく」により生きがいを持って生活することは、自立に欠かせない要素だと考えています。またこれにより、増大する社会保険費の抑制にも繋がると考えます。

Q2 有償ボランティアとして参加が発生する場合もあると思いますが、保険者としては、どのようなと考えていますか？

A2 厚生労働省からの通知により、介護サービス利用者や、有償ボランティア活動により謝礼を受け取ることは、現在でも条件付きで認められています。今後は、利用者のモチベーションや事業所の創意工夫を向上させていくため、より十分な謝礼の受領が可能になっていくことも期待しています。

Q3 今後の介護保険サービスの展開はどのように考えていますか？

A3 これからは、高齢者の方が介護が必要な状態になったとしても、既存の形式の中でお世話をするだけではなく、本人へのアセスメントをベースに、地域や社会と繋がりを持ちながら生き生きと住み慣れた地域で暮らしていくことが出来るような介護サービスが求められていくのではないかと考えています。

Q4 全国での社会参加・はたらくを進めようとしている介護事業所へのメッセージをお願いします。

A4 「社会参加・はたらく」を進められている事業所の方は、利用者に向き合い、その個別性を尊重し、生き生きと暮らしてもらうために工夫しながら取り組まれていることと思います。これから取り組まれようとする方は、本誌の事例等も参考にしてくださいながら、是非利用者にとってより良いサービスを提供していただきたいと思います。



つながる・役割・ハタラク

～介護サービス事業から広がる「社会参加活動」の始め方～



一般社団法人 人とまちづくり研究所

冊子編成・編集：後田緑人(株式会社スマートエイジング)

冊子デザイン：佐藤唯樹(アルファデザイン)



平成30年度 課題研究 老人保健施設運営事務局 介護サービス事業における社会参加活動の適切な実施と効果の検証に関する調査研究事業 2019.03発行

平成 30 年度 老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）
介護サービス事業における社会参加活動の適切な実施と効果の検証に関する
調査研究事業
報告書

平成 31（2019）年 3 月発行
発行 一般社団法人 人とまちづくり研究所

不許複製

